第Ⅲ章　遺跡解説

本章では，図版に収録した木器出土遺跡の概略を述べる。原稿の執筆は，資料を提供した近畿各府県市町の教育委員会や埋文関係機関に依頼したが，第Ⅱ章の「木器一覧表」との対応や表現法の統一を考慮して，編集事務局で加筆したところもある。ただし，遺跡の年代観・性格に関しては，執筆者の意見を尊重し，弥生時代前期・中期・後期，古墳時代前期・中期・後期などの用語をそのまま残し，あえて統一していない。記述の重点を，木器が出土した遺構（河川・溝・井戸・土坑・包含層などが一般的である）に置いたため，遺跡全体の性格やそのほかの遺構・遺物に関しては，必ずしも充分な内容にはなっていない。さらに詳細を知るには，付記した参考文献を参照されたい。なお，遺跡解説の原稿は1987年11月に各担当者に執筆を依頼し，原稿が集まった段階で編集事務局が加筆・調整して，1990年11月に各担当者に校正を依頼した。したがって，本章は原則として1990年までの知見で，その後，発掘調査や遺物整理が進展して新知見が加わった遺跡も少なくないことはあらかじめ御了承いただきたい。

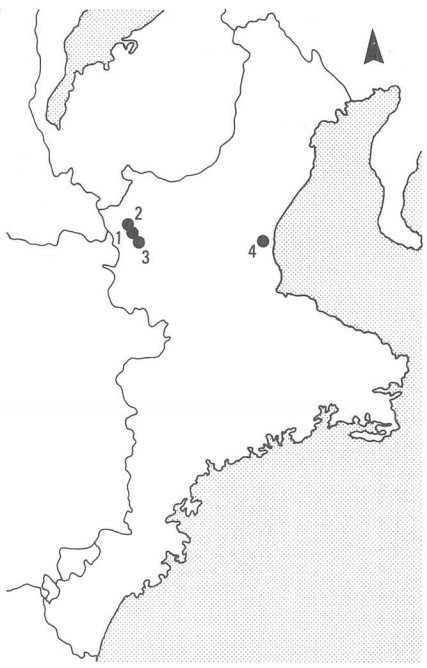


fig. 189　三重県の木器出土遺跡

A　三　重　県

1　神部遺跡（fig.190）　じんぶ

上野市笠部字神部に所在する。1980年9月～10月に三重県教育委員会が発掘調査。当遺跡の北西約1kmのところにある北堀池遺跡と同様，木津川の左岸に形成された沖積地に立地する。調査に際し，南北約180mにおよぶ幅4mのトレンチを設定したが，調査区が遺跡範囲の東縁部に相当するためか，北端部で杭列や木器を含む堆積層，南端部で古墳時代前期の土師器が集中する一段低い堆積層を確認したのみで，明確な遺構は検出されていない。なお，出土遺物には弥生時代後期から古墳時代前期及び奈良時代の土器のほか，平安時代以降の土師器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器なども出土している。

木器はトレンチ北端部にあたる厚さ1m前後の一段低い堆積層から出土しており，槽などのほかは長い杭・板材等が大半を占めることなどから，水田畦畔及びそれに直交する水路に付随する杭・矢板の周辺に埋没したものと考えられる。なお，木器出土層の下位で弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土していることから，木器の時期を古墳時代前期とした。

〔木器番号〕*13703, 18319, 19205*

〔文　　献〕駒田利治「上野市笠部　神部遺跡」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1981年

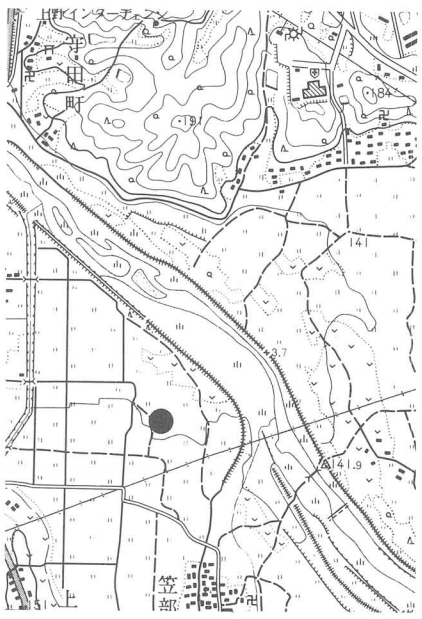


fig. 190　神部遺跡木器出土地点
（1:25,000　伊勢路）

2　北堀池遺跡（fig.191）　きたほりいけ

上野市大内字北堀池・竹之下・中沢に所在する。1977年7月より1980年3月まで三重県教育委員会が発掘調査を実施した。木津川の左岸に位置し，その支流岩根川と山の川とにはさま

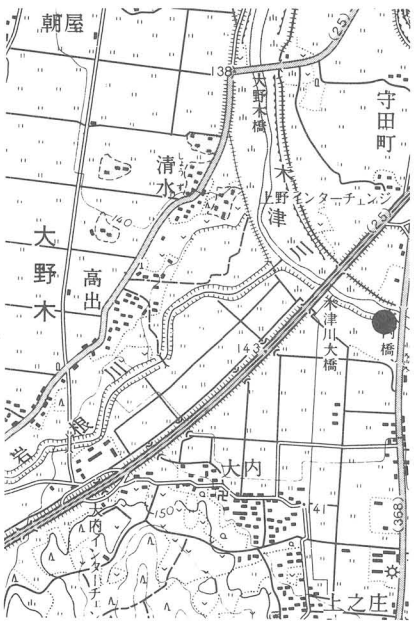


fig. 191　北堀池遺跡木器出土地点
(1:25,000　月ヶ瀬)

れた沖積地に立地する。縄文時代の前期土器片・後期の土坑，弥生時代中期・後期の土器も出土しているが，大半の遺構・遺物は古墳時代以降のものである。古墳時代の遺構には54棟に及ぶ竪穴住居や井戸・溝・水田跡などがあり，そのほか奈良時代の井戸・土坑，平安・鎌倉時代の掘立柱建物・条里溝・道路・井戸・土坑などを検出した。収録した木器は大溝・旧河道Ⅰ・旧河道Ⅱで出土している。

大溝は竪穴住居群の東，水田跡との間を南から北の木津川に向かって流れる。自然形成によると思われる流路で，幅3.5～7m，深さ約1.2mをはかる。最上層では古墳時代後期初めの須恵器が出土し，上層では加工板材・杭・丸太等による集水桝状の構築物が検出された。下層では古墳時代前期前半の土器群とともに，直柄鍬・泥除・曲柄鍬・竪杵・横槌などの農具，槽・曲物の底板・箱状品などの容器，舟形・刀子形・剣形などの祭祀具，各種建築部材など多量の加工木・自然木・種子等が出土した。

一方，居住区域である微高地の北東縁辺部は，木津川による堆積と浸食によってかなり凹凸のある河岸となっている。このようなよどみ状の河道のうち，南のものを旧河道Ⅰ，北を旧河道Ⅱとした。いずれも古墳時代前期前半を主体として弥生時代中・後期をも含む多量の土器と共に，農具・容器・建築部材・その他の加工木・自然木が出土した。

〔木器番号〕大溝；*01205, 04906, 04909, 05004, 05109, 06603, 06610, 08908, 08912, 09301, 13403, 13405, 15012, 16308, 16311, 16704, 16804, 17704, 18301, 18308, 18318, 19002, 19105*

旧河道Ⅰ；*09117, 14507*

旧河道Ⅱ；*03804, 04309, 04410, 13902, 19816*

〔文　　献〕駒田利治・山田猛・吉水康夫・谷本鋭次『北堀池遺跡発掘調査報告第1分冊』三重県埋蔵文化財調査報告51－1，三重県教育委員会1981年
駒田利治・山田猛・他『北堀池遺跡発掘調査報告第2分冊』三重県埋蔵文化財調査報告51－2，三重県教育委員会1992年

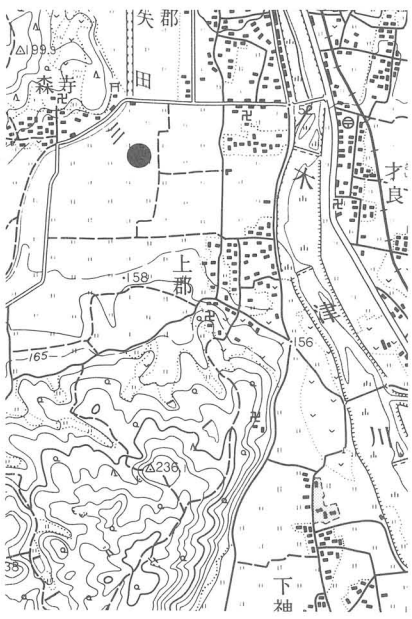


fig. 192　森寺遺跡木器出土地点
(1:25,000　伊勢路)

3　森寺遺跡（fig.192）　もりでら

上野市の南部，依那古地区の森寺字前出を中心に広がる遺跡で，弥生時代から中世に至るまでの複合遺跡である。森寺遺跡を含む上郡・下郡・森寺の圃場整備に伴い，上野市教育委員会と上野市遺跡調査会が1983年9月から1984年3月末まで，試掘調査・発掘調査を実施した。

森寺遺跡は，古山につながる山稜が南と西から迫り，それに沿って流下する矢田川と，東の低地部を北流する木津川との間の微高地上に広がる。延暦銘木簡の出土及び伊賀郡衙の想定地として知られている下郡遺跡の南西約700m，弥生時代の長頸壷が出土した才良遺跡の西約1kmに位置し，今次調査で，近接して原ケ野遺跡・岩ケ上遺跡が確認されている。

木器は，1956年1月に一木平鋤が出土した場所から約30m東に寄った地点の地表下1.5mから櫂（鋤？）が，さらに60cm下がったところから多量の木器が出土した。主な出土木器は，櫂（鋤？），田下駄，箍，建築部材などで，そのほか漁撈用と考えられる竹串や多数の自然木がある。出土地は暗黒褐色の泥砂が堆積し，湧水の激しいところで，旧自然流路縁辺ないしそのよどみ部分と想定される。上層で土師器破片が出土しているのみで，共伴する遺物はないが，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての木器と考えられる。

〔木器番号〕旧自然流路上層；*10103*

旧自然流路下層；*07414, 07507, 07508, 07702, 10836, 10839, 20004*

〔文　　献〕中森英夫・山田猛・山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』上野市文化財調査報告5，上野市教育委員会・上野市下郡遺跡調査会 1978年

森川桜男「三重県上野市森寺発見の木鋤」『古代学研究』14，古代学研究会 1956年

4　納所遺跡（fig.193）　のうそ

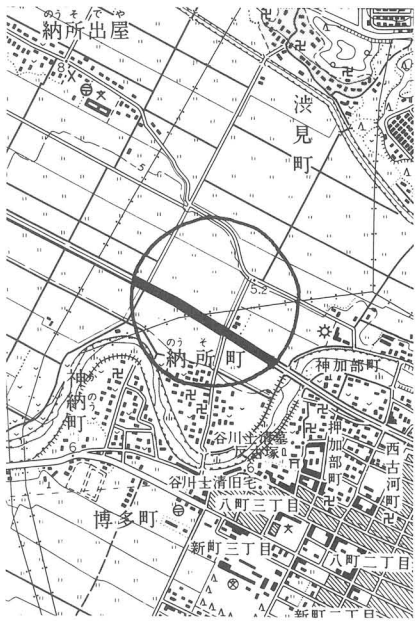


fig. 193　納所遺跡木器出土地点
（1:25,000　津西部）

津市納所に所在する。1973年10月～1975年12月に県道バイパス建設に伴い三重県教育委員会が発掘調査。安濃川の左岸，標高5ｍ前後の現在水田地帯となっている沖積地に立地している。主な検出遺構には弥生時代前期の溝，中期の竪穴住居・方形周溝墓・土坑墓・溝，後期の溝，古墳時代以降の掘立柱建物・溝・配石遺構などがある。

収録した木器は大別して弥生時代前期，同中期，古墳時代の3時期にわたる。弥生時代前期の木器はＢ地区からＦ地区におよぶ下層で検出した幅5ｍ以上，深さ約0.8mの自然流水路（河川）とＤ地区下層東部の落ち込みやＧ地区下層の落ち込みなどから出土した。前期中段階を中心とする土器群や自然木・木の葉・種子・獣骨などとともに，鍬・鋤・横槌・竪杵・斧柄・鉢・高杯・槽・杓子・匙・網枠・弓・紡織具・櫛・琴・鐸形（？）・編籠など多種大量の木器が出土している。

弥生時代中期の木器はＨ地区下層の自然流水路（河川）から出土した。東西7～8ｍをはかり，北から南へ緩やかに傾斜し，弥生時代中期における遺跡東端に相当する。第Ⅲ様式前半の土器に伴い，鍬・一木鋤・斧柄や種子が出土している。

古墳時代の木器はＡ地区を南北に流れる幅約22m，深さ約1ｍの自然流水路（河川）から出土した。共伴遺物に弥生時代中期から古墳時代の土師器・須恵器が混在し，周辺からは1点ではあるが奈良時代後期の蓮華文軒丸瓦も出土している。さらに，重複する現代の水路による上部の撹乱などもあり，明確な時期決定はし難いが，泥除・槽・杓子・弓・紡織具・建築部材などが出土している。

〔木器番号〕Ｂ～Ｆ地区下層河川・Ｄ地区下層東部の落ち込み・Ｇ地区下層の落ち込みなど

（弥生Ⅰ期中段階）；*00106, 00113, 00606, 00608, 00805, 00806, 01303, 01309, 01402, 01605, 01709, 02301, 02302, 02502, 02503, 02504, 02804, 02806, 03903, 04703, 05601, 05802, 06101, 06206, 08001, 08710, 09115, 10612, 11116, 12003, 12303, 12605, 12802, 13007, 15402, 15605, 15901, 18616, 18704, 19401, 19520, 19706, 19908*

Ｈ地区下層河川（弥生Ⅲ期前半）；*00101, 00104, 02901, 04004, 04411, 05805, 07202, 18905*

Ａ地区下層河川（弥生Ⅰ～Ⅲ期）；*03004, 03704, 04407*

A地区下層河川（古墳時代以降）；*03608, 09708, 12507, 19102, 19103*

出土地点不詳；*01702, 08002*

〔文　　献〕伊藤久嗣・吉水康夫『納所遺跡範囲確認調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告27，三重県教育委員会1976年

伊藤久嗣『納所遺跡―遺構と遺物―』三重県埋蔵文化財調査報告35－1，三重県教育委員会1980年

伊藤久嗣・他『納所遺跡－その自然環境と自然遺物－』三重県埋蔵文化財調査報告35-2，三重県教育委員会1979年

B　滋　賀　県

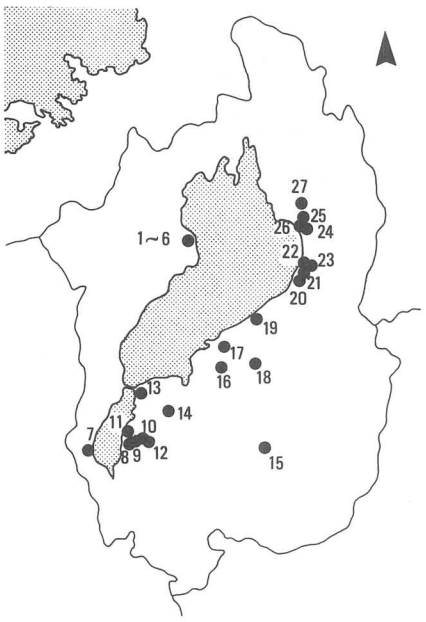


fig. 194　滋賀県の木器出土遺跡

1　森浜遺跡（fig.195）　もりはま

高島郡新旭町森から針江にかけての，通称「森浜」と呼ばれる湖岸から湖中に所在。遺跡は浜堤上に立地し，陸地側はかつて内湖であった。1977年に新川舟溜り（第1次調査），新川水路（第2次調査），1978年に新川舟溜り航路（第3次調査）の工事に伴って滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。

第1次調査では，第2層～第3層から大量の庄内式・布留式土器が出土し，時期不明の杭を多数検出した。また，この包含層に伴う溝2－1からは火鑽臼が出土した。なお，調査後に採集された板づくりの琴は，この包含層より出土したものである。包含層よりも下層で検出された溝6－1からは，少量の弥生土器（第Ⅴ様式）と穂摘具や補修した泥除などが出土し，溝からやや離れた地点では，大型の杭や板などが並んで出土した。さらに下層では土器を伴っていないが，沼状の落ち込みの肩部から輪樏付きの田下駄が出土している。

第2次調査では遺構は検出されず，包含層中から庄内式・布留式土器，木器が混在した状態で大量に出土した。ただ，土器・木器とも，ある程度のまとまりをもって出土している。また，調査区の中央から，中心に直径7cm程，長さ3.7mの太い棒を背骨のように用い，直径数cm程の細長い棒を格子に組んだ組み物が3つ出土した。出土した木器には，直柄横鍬・槽づくりの琴・琴柱・竪杵・盤・火鑽臼・火鑽杵・板や棒などの部材・用途不明品などがある。

第3次調査では木器は出土せず，庄内式・布留式土器が包含層中より出土した。

〔木器番号〕第1次調査包含層；*10102, 15609*　　第1次調査溝2－1；*17213*

第1次調査溝6－1；*03809, 07824*　　第1次調査沼状落ち込み；*07510*

第2次調査包含層；*01601, 03409, 05211, 07107, 07712, 08913, 09304, 09516, 10206, 10408, 13802, 15109, 15612, 15802, 15903, 16411, 16710, 17201, 17203, 17210, 17215, 17216, 18303, 18501, 18513, 19302, 19506*

〔文　　献〕本田修平「森浜遺跡出土の田下駄について―高島郡新旭町―」『民俗文化』第168号，滋賀民俗学会1977年

兼康保明「古代の琴―森浜遺跡出土などの遺品をめぐって―」『月刊文化財』169号，文化庁文化財保護部1977年

兼康保明・堀内宏司・他『森浜遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1978 年

2　旭遺跡（fig.195）　あさひ

高島郡新旭町旭に所在。安曇川左岸の沖積平野北半を南北に連なって弧状に分布する針江遺跡群の北端に当たり，田井川を北限とし，南に広がっている。遺跡の一部が中世の吉武城跡と重複するため，吉武城遺跡として報告されたこともある。

1981 年・1986年 度に，国道 161 号線バイパス工事に関連して滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。1981 年度の調査では，古墳時代の溝や土坑が検出され，包含層中と遺構から庄内式・布留式土器が出土した。木器は，包含層（第Ⅲ層）中と自然流路と考えられる溝（ＳＤ01）から木錘・火鑽臼・部材・板などが出土した。1986 年度の調査では，1981 年度調査地の周囲を大規模に発掘し，ＳＤ01の延長をはじめ，溝や土坑を検出した。遺構からは 1981 年度と同様，庄内式・布留式の土器が混在して出土する。木器は，溝ＳＤ01から曲柄平鍬・穂摘具・田下駄，溝ＳＤ04から直柄平鍬，溝ＳＤ05から横槌，溝ＳＤ09から直柄横鍬，溝ＳＤ12から曲柄又鍬などが出土している。

〔木器番号〕溝ＳＤ01；*04701, 07416, 09314, 18909*

溝ＳＤ04；*02205, 04412*

溝ＳＤ05；*09012*　溝ＳＤ09；*03601*　溝ＳＤ12；*04713*

包含層（第Ⅲ層）；*18514, 20126*

〔文　献〕図司高志・山口順子・他「高島郡新旭町針江遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅵ―１，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1979 年

兼康保明・宮崎幹也『針江遺跡群旭遺跡発掘調査概要』国道 161 号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和 56 年度）１，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1982 年

大崎哲人・森正『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要―吉武城遺跡―』国道 161 号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和 61 年度）７，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1987 年

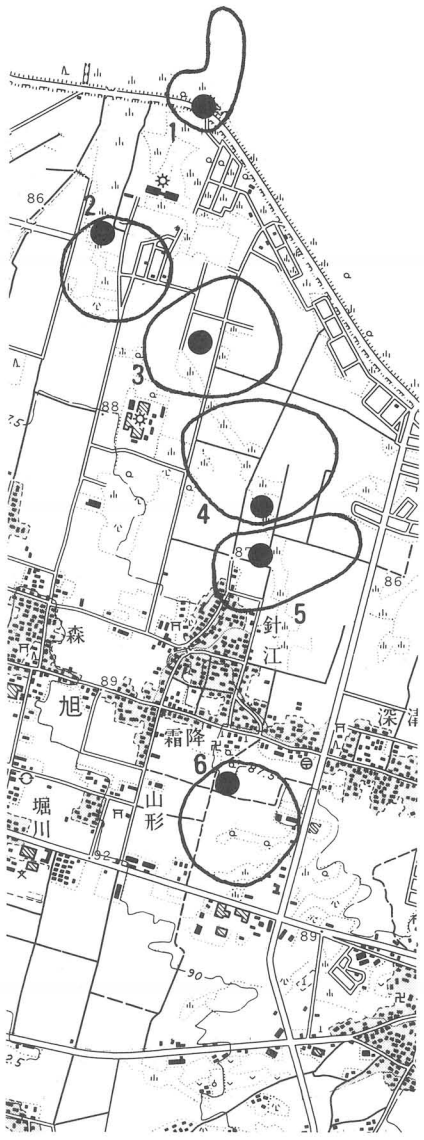


fig. 195　森浜・旭・針江川北・針江北・針江中・正伝寺南遺跡木器出土地点（1:25,000　今津）

3　針江川北遺跡（fig.195）　はりえかわきた

高島郡新旭町針江に所在。旭遺跡の南東に接し，安曇川左岸の沖積平野の低湿地に立地する。1985 年度に，国道 161 号線バイパス工事に関連して滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。調査地の北側（第２区）で古墳時代前～中期の３間×５間の総柱をもつ大型の掘立柱建物１棟と，小型の掘立柱建物４棟，竪穴住居，落ち込み，近接する吉武城に関連すると考えられる安土桃山時代から江戸時代にかけての溝などを検出した。木器は落ち込みＳＸ４の埋土中から，大量の布留式土器とともに出土しており，直柄鍬・田下駄・アカ取り・片口容器・火鑽臼・火鑽杵・櫂などがある。

調査地の南側（第１区）では，弥生時代後期（第Ⅴ様式）から古墳時代前期（庄内式）の遺物包含層と，掘立柱建物・竪穴住居・柵などを検出しており，その北側には溝を隔てて木棺墓群がある。この木棺墓を覆う包含層からも，蓋や田下駄などの木器が出土している。

〔木器番号〕第１区包含層；*07501, 07505, 14905*

第２区落ち込みＳＸ４；*01811, 05206, 07417, 10209, 10402, 12709, 17221, 17222*

〔文　　献〕清水尚『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要―針江川北遺跡―』国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和60年度），滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1986年

4　針江北遺跡（fig.195）　はりえきた

高島郡新旭町針江に所在。針江川北遺跡の南に接し，安曇川左岸の沖積平野の低湿地に立地する。1958年，農道工事に関連して排水路を掘削した時に，弥生土器（第Ⅴ様式）と舟形木器などを新旭町教育委員会が採集した。遺物の出土状況は，スクモ層中に土器と僅少の木器がまとまっていたという。1982・1984年度の国道161号バイパス工事に関連して滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し，弥生時代中期から庄内式期の土器を伴う竪穴住居群，溝などの遺構を検出した。その時の木器は図版に収録していないが，1982年度に検出した溝ＳＤ18から穂摘具・火鑽臼・杓子形木器・直柄平鍬の未成品など，1984年度に検出した溝ＳＤ１やＳＤ６からも直柄平鍬・アカ取り・部材などが出土している。

〔木器番号〕*16806*

〔文　　献〕兼康保明・堀内宏司・他『森浜遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1978年
兼康保明・尾崎好則・山口順子「針江北遺跡の調査」『新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要』国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和57年度）３，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1983年
吉谷芳幸・森下直子「針江北遺跡の調査」『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要』国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和59年度）５，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1985年

5　針江中遺跡（fig.195）　はりえなか

高島郡新旭町針江に所在。安曇川左岸の沖積平野北半を南北に連なって弧状に分布する針江遺跡群のほぼ中央を占める。国道161号線バイパス工事に伴い，1982年度に滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し，土坑・溝などの遺構を検出した。木器は南調査区（Ａ地区）の土坑SK３の下層から反柄鍬の柄と身が一緒に出土したほか，下層の弥生時代中期（第Ⅳ様式）の土器片を含む層から剣形，土坑SK８から板材などが出土している。

土坑ＳＫ３は径1.9m×1.1mの楕円形を呈し，深さ0.4m。土師器甕や底部穿孔の須恵器壷が埋土の上部から出土している。

〔木器番号〕Ａ地区下層；*16008*　　Ａ地区土坑ＳＫ３；*05201, 05202*

〔文　　献〕兼康保明・尾崎好則・山口順子「針江中遺跡の調査」『新庄城遺跡・正伝寺南遺跡・針江中遺跡・針江北遺跡発掘調査概要』国道161号線バイパス関連遺跡発掘調査概要（昭和57年度）３，滋賀県教育委員会・(財)同県文化財保護協会1983年
清水尚・ほか『針江中遺跡・針江南遺跡』一般国道161号（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ，滋賀県教育委員会・(財)同県文化財保護協会1991年

6　正伝寺南遺跡（fig.195）　しょうでんじみなみ

高島郡新旭町深溝に所在する。安曇川左岸の沖積平野北半を南北に連なって弧状に分布する針江遺跡群の南端にあたり，霜降の集落をほぼ北限として南に広がっている。1983・1984年度に，国道161号線バイパス工事に関連して滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。北地区では，弥生時代後期（第Ⅴ様式）から古墳時代前期の自然流路など，南地区では，古墳時代中期や飛鳥時代の土坑，平安時代中期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物・柵・井戸・溝・土坑などを検出している。木器は北地区の自然流路ＳＤ１から庄内式土器などとともに出土しており，鍬・梯子・蓋・盤・部材などがある。

〔木器番号〕*02105, 10306, 14401, 14910, 19211*

〔文　　献〕兼康保明・吉谷芳幸・山口順子「正伝寺南遺跡（北地区）の調査」『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要』国道161号線バイパス関連遺跡調査概要（昭和58年度）４，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1984年

7　湖西線関係遺跡（fig.196）　こせいせん

大津市に所在。1974・1975年に湖西線関係遺跡発掘調査団が，大津市錦織から穴太までの約3.4kmにわたる範囲で発掘調査を実施し，縄文時代から歴史時代に至る遺構・遺物を明らかにした。3.4kmの路線予定地を南から北へⅠ～Ⅴ区の５調査区にほぼ等分し，８地点において各種の遺構を検出。縄文時代晩期の木器はⅢＣ区開析谷の黄褐色砂層・第２ピート層・黄灰色砂層，ⅢＤ区貝塚地点における貝塚形成以前のピート層から，弥生時代中期の木器（直柄平鍬・泥除）はⅠ区の１号溝から，庄内式併行期の木器はⅢＥ区灰褐色微砂層から，庄内式～布留式期の木器はⅣＢ区灰白色粗砂層と暗青灰色泥砂層から，５世紀後半～６世紀の木器はⅢＥ区開析谷の黒色泥砂層から，６世紀後半の木器はⅡＨ区の旧河道（黒色ピート層・３黒灰色泥砂など），ⅢＣ区の溝（灰白色砂層），ⅣＢ区開析谷（黒褐色泥砂・暗灰色粗砂など），ＶＡ区の各種溝や１号竪穴住居内から，６世紀後半～７世紀前半の木器はＶＤ区東半の６号溝から出土した。

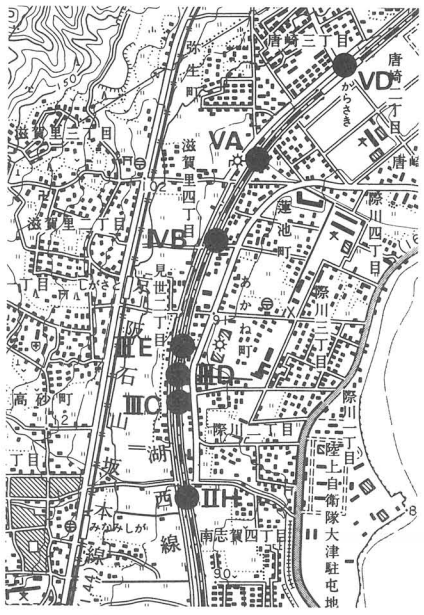


fig. 196　湖西線関係遺跡木器出土地点
（1:25,000　京都東北部）

〔木器番号〕　ⅡＨ区　黒色ピート層；*01110, 01114, 01115, 07903, 09525, 10519, 10521, 14914, 16211, 16416, 16421*

ⅡＨ区　３黒灰色泥砂；*16403*

ⅢＣ区溝　灰白色砂；*01116, 03509, 09204, 13303, 19504, 19508*

ⅢＣ区谷　黄褐色砂；*00601, 10901, 10902, 10903, 11004, 11009, 12206*

ⅢＣ区谷　第２ピート層；*12015, 12901, 12902, 19906*

ⅢＤ区貝塚　ピート層；*00804, 10205, 10301, 11005, 11007*

ⅢＥ区　灰褐色微砂；*18412*

ⅢＥ区　黒色泥砂；*02107, 09601, 09602, 09603, 13301, 17501, 18901*

ⅣＢ区　灰白色粗砂；*00205, 14510, 16903*

fig. 197　支那中遺跡木器出土地点
(1:25,000　草津)

ⅣB区　暗青灰色泥砂；*15205*

ⅣB区　黒褐色泥砂；*00305*

ⅣB区　暗灰色粗砂；*12011, 14301, 15104, 16210, 18908*

ⅣB区　茶褐色泥砂・褐色粗砂互層；*06511, 09001*

ⅣB区　茶褐色泥砂・砂互層；*16405, 16406, 16420, 18804, 18811*

ⅤA区　13号溝；*10518, 20104*

ⅤA区　14号溝；*09518, 10523, 20129*

ⅤA区　19号溝；*07913, 10520*

ⅤA区　1号住居跡；*10522, 15620, 19717*

ⅤD区東半　6号溝；*12005, 15101, 15702, 16404*

〔文　　献〕田辺昭三・加藤修・江口千恵子・他『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会 1973 年

8　志那中遺跡 (fig.197)　しななか

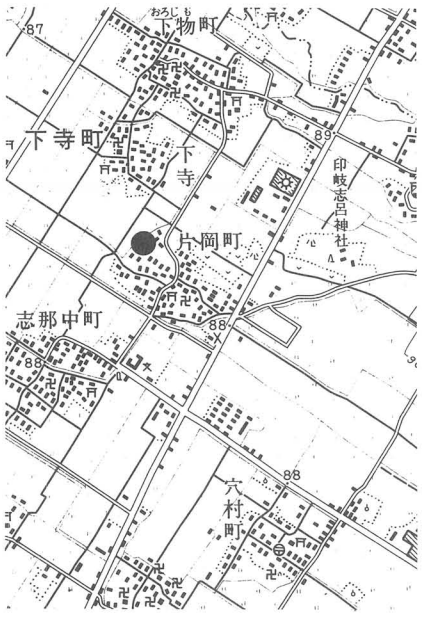


fig. 198　片岡遺跡木器出土地点
(1:25,000　草津)

草津市志那中町に所在する。1977 年度県営圃場整備事業に伴って滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。調査の結果，弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期・奈良～平安時代の井戸・溝・土坑・掘立柱建築物を多数検出した。木器が出土したのは，いくつかの井戸跡と沼沢地で，弥生中期末の井戸ＳＥ５から出土した組合せ平鋤，鎌倉時代の井戸から出土した漆塗花弁文椀や，古墳時代中期の沼沢地から出土した鉢・丸木弓・杭などがある。

〔木器番号〕井戸ＳＥ５；*05507*

〔文　　献〕大橋信弥・谷口徹「草津市志那中遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1978 年

9　片岡遺跡 (fig. 198)　かたおか

草津市片岡町北島田・上島田・下島田，下寺町皆出に所在。1975 年度の圃場整備事業に伴い，下寺観音堂の寺域と弥生遺跡確認のため，滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。検出した遺構には，弥生時代後期～古墳時代前期の大溝や白鳳期と思われる溝などがある。アカ取り・容器・板材などの木器は，弥生時代後期（第Ⅴ様式）～庄内式の土器とともに，包含層や溝から出土している。

〔木器番号〕特設 13 トレンチ　東西溝下層；*10503*

〔文　　献〕丸山竜平・石原道洋「草津市片岡遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅲ―2，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1976 年

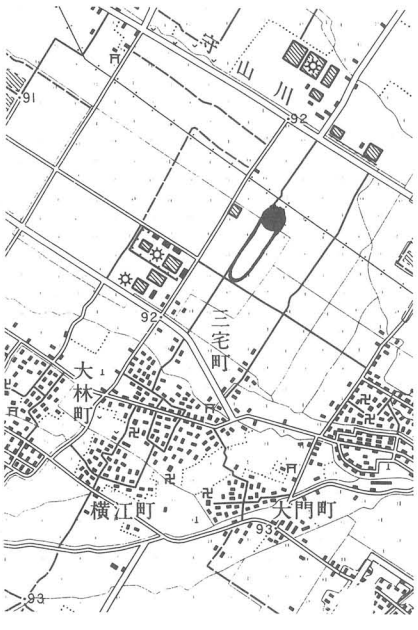


fig. 199　金ケ森西遺跡木器出
(1:25,000　草津)

10　金ケ森西遺跡 (fig. 199)　かねがもりにし

守山市金ケ森町・三宅町に所在する。野洲川左岸微高地に立地。下水道工事に先立って 1977 年度から三ヵ年にわたり滋賀県教育委員会が(財)滋賀県文化財保護協会の協力を得て発掘調査を実施した。調査の結果，古墳時代前期を中心とする溝 73 条・方形周溝墓 2 基・竪穴住居 5 棟・掘立柱建物 6 棟・土坑25基などを検出した。各遺構から大量の布留式土器が出土したほか，大規模な旧河道と見られるＳＤ34 から直柄平鍬をはじめとする 20 点余の木器が出土

している。

〔木器番号〕河川ＳＤ34；*01808*

〔文　　献〕大橋信弥・谷口徹・他『金ヶ森西遺跡発掘調査報告書―湖西中部流域下水道管理用道路関連遺跡発掘調査報告書２―』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1980 年

11　赤野井湾遺跡（fig. 200）　あかのいわん

守山市赤野井町の琵琶湖赤野井湾内に所在する。湖岸から湖底にかけて，縄文時代早期から平安時代に至る遺構や遺物が出土している。1985・1986年度の天神川水門工事，およびそれに続く湖岸堤建設工事に伴い，滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施。弥生時代後期の溝，古墳時代の溝や水田跡と思われる足跡層，白鳳時代の瓦群などを検出している。図版に収録した木器は，1985年度調査時のもので，弥生時代後期の溝ＳＤ２，古墳時代の溝ＳＤ３や足跡層・包含層などから出土している。なお，1986 年度の発掘調査でも，弥生時代後期の溝から穂摘具・火鑽臼・盾・短甲，古墳時代の溝や包含層から鍬・泥除・鋤・竪杵・横槌・攪網枠・櫂・容器など，多彩な木器が出土した。

〔木器番号〕　溝ＳＤ２；*02315, 03802, 07825, 07826, 09806, 11806, 11807, 15005, 16206, 20012*

溝ＳＤ３下層；*18312*　　溝ＳＤ３上層；*19409*

足跡層（黒褐色粘質土層）；*03806, 18315*

包含層；*02207, 07818, 09015, 09609, 10504, 11514, 16307, 16807, 18714*

〔文　　献〕濱修・他『赤野井湾遺跡―湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1986 年

濱修・他『赤野井湾遺跡―湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書２―』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1987 年

fig. 200　赤野井湾遺跡木器出土地点
(1:25,000　草津)

12　吉身中遺跡（fig. 201）　よしみなか

守山市吉身町に所在する。野洲川左岸微高地に立地し，1982 年度に「中高年齢労働者福祉施設」の建設に先立って，守山市教育委員会が発掘調査を実施した。調査の結果，古墳時代前期の竪穴住居１棟，古墳時代前期から後期の大溝１条および溝10条などを検出。大溝から刀形・横槌・盤などの木器が出土した。大溝には古墳時代前期から後期の遺物が混在しており，木器の所属時期を特定できなかった。

〔木器番号〕*09013, 16213*

〔文　　献〕山崎秀二「吉身中遺跡発掘調査報告書」『守山市文化財調査報告書』第 16 冊，守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター 1985 年

fig. 201　吉身中遺跡木器出土地点
(1:25,000　草津)

13　服部遺跡（fig. 202）　はっとり

守山市服部町に所在する。南北二流に分流した野洲川にはさまれた中洲に立地。二分流を一本化する野洲川改修工事に先立って，1974 年から５ヵ年にわたり，滋賀県教育委員会・守山市教育委員会が(財)滋賀県文化財保護協会の協力を得て発掘調査を実施した。調査の結果，縄

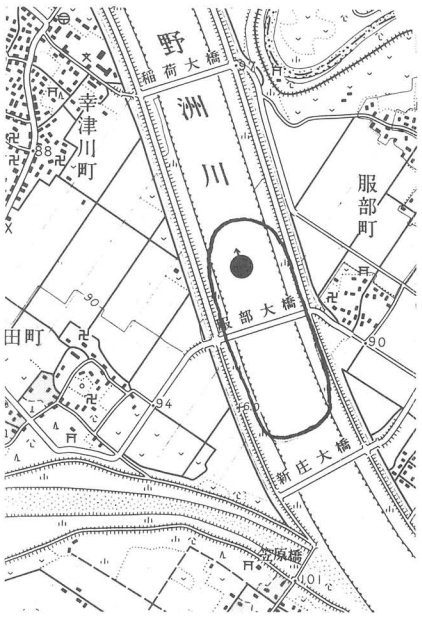


fig. 202　服部遺跡木器出土地点
(1:25,000　堅田)

文時代晩期から弥生時代，古墳時代，奈良・平安時代にかけての各時代の遺構が，何層にも重複して検出された。木器が出土したのは，弥生時代後期末の洪水で形成された数条の旧河道と，古墳時代中期末から後期初頭に築かれた古墳群の周溝内などである。

旧河道（A・Bなど）からは，古墳時代前期の集落にともなう大量の土器とともに，農工具・容器をはじめとする木器が出土している。旧河道Aは幅60m以上，深さ4m前後の大規模なもので，一部に人為的な掘削や護岸がなされ，敷石・槽・樋・杭などによる導水施設も設けている。旧河道Bも幅50m以上の大規模なものである。

方形墓17基，円形墓9基の26基以上からなる古墳群は，削平されて埋葬施設を残していないが，いずれも径（一辺長）6～20mの小規模古墳である。周溝からは，供献用の土器とともに箱・曲物などの木製容器，あるいは琴・一木平鋤・横槌・刀形・矢形・盾形など，古墳祭祀のための木器が出土している。

〔木器番号〕第1号円形墓；*18108*
第5号方形墓；*06704, 06709, 17010*
第9号方形墓；*09206, 09207*
第12号円形墓；*11505, 11506, 18109*
第17号方形墓；*15615, 15616, 15617, 15618, 15701*
第19号方形墓；*04609, 06705, 06711, 06804, 17008*
第23号円形墓；*06801, 06803, 13502, 14202, 16314*
第25号方形墓；*04712, 06706, 06802, 07204*
旧河道；*03009, 03404, 03405, 03606, 04002, 04301, 04508, 04604, 04802, 05311, 14402*
D地区溝；*16009*　不詳；*12004*
不詳（古墳周溝出土）；*04710, 18912*

〔文　献〕大橋信弥・山崎秀二・他『服部遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1979年
谷口徹「服部遺跡出土の線刻ある木製品について」『滋賀文化財だより』№48，(財)滋賀県文化財保護協会1981年
大橋信弥・谷口徹『服部遺跡発掘調査報告書』V，滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1984年

14　下繰子遺跡（fig. 203）　しもくるす

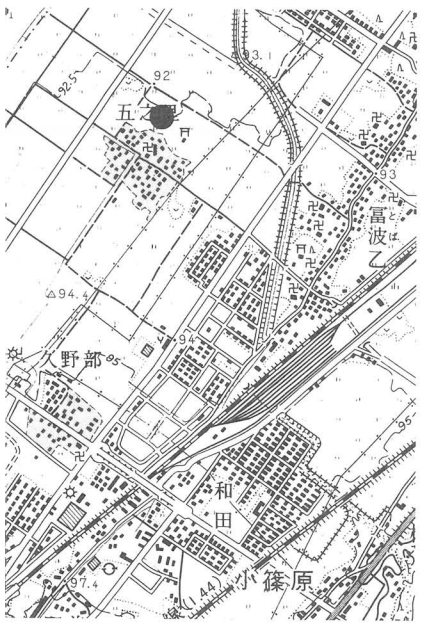


fig. 203　下繰子遺跡木器出土地点
(1:25,000　野洲)

野洲郡野洲町大字五之里に所在する。野洲川右岸微高地に立地し，標高91.3mをはかる。1976年度県営圃場整備事業に伴って，遺構が掘削される排水路部分と一部切土部分の発掘調査を滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が実施した。調査の結果，弥生時代末から古墳時代前期の竪穴住居6棟・井戸1基・旧河道・土坑など多数の遺構を検出したほか，大量の土器と木器が出土した。出土遺物の大半は，調査区の中央を南から北に流れる旧河道より出土した。旧河道は幅9.5m，深さ55cmをはかる。旧河道中央には自然木と加工木を組合せた堰状の遺構があり，土器や大部分の木器は，ここに堆積していた。木器の大半は用途不明品であるが，竪杵・机・火鑽臼・杭などがある。

〔木器番号〕旧河道；*17502, 18009, 18710*

〔文　　献〕谷口徹・他「野洲町下繰子遺跡Ｅ・Ｓ地区」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ―２，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1977 年

15　堂田遺跡（fig. 204）　どうだ

蒲生郡蒲生町市子沖・市子松井・鈴にまたがる古墳時代を中心とする集落遺跡。付近は日野川中流域にあって，遺跡密度の高い地域である。かって縄文時代の石器が採集され，1986 年度県営圃場整備事業に伴い，滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が蒲生町教育委員会の協力を得て発掘調査を実施した。調査の結果，弥生時代後期から鎌倉時代前期にいたる時期の遺構や遺物を検出した。遺跡の盛期は古墳時代中期にあり，小河川が縦横に走る中に，小単位の住居群が散在する。これまでに調査された住居群では，布留式土器に須恵器が共伴して出土するものが多く，馬鍬・田下駄・曲物・槽などの木器が出土した旧流路ＳＤ１・２・４・５などもこの時期に当たる。

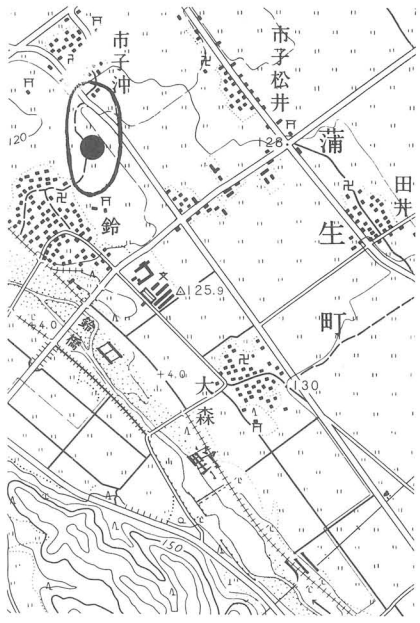


fig. 204　堂田遺跡木器出土地点
(1:25,000　日野西部)

〔木器番号〕旧流路ＳＤ１；*07301, 07302*
旧流路ＳＤ２；*07304*　　旧流路ＳＤ４；*07303*

〔文　　献〕宮崎幹也・岡本武憲「堂田・市子遺跡（２）―蒲生郡蒲生町市子沖・市子川原所在―」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』ＸⅥ―５，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1989 年

16　新開遺跡（fig. 205）　しんがい

蒲生郡安土町常楽寺に所在。西の湖を望む湿地帯の微高地に立地する。弥生時代中期（Ⅱ様式）～庄内・布留式期の遺跡である。1983・1984 年度の圃場整備事業に伴って，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会と安土町教育委員会が発掘調査を実施した。検出した遺構には，古墳時代前期の竪穴住居・方形周溝墓・土坑・溝などがある。木器は，1984 年度の調査で，溝ＳＤ７内と包含層から出土した。

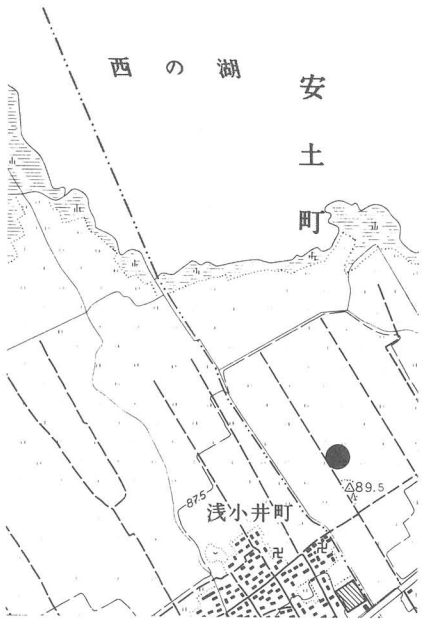


fig. 205　新開遺跡木器出土地点
(1:25,000　近江八幡)

〔木器番号〕溝ＳＤ７；*04908*　　包含層；*18907*

〔文　　献〕葛野泰樹・西家淳朗「蒲生郡安土町新開遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』ＸⅡ―３，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1985 年

17　大中の湖南遺跡（fig. 206）　だいなかのこみなみ

蒲生郡安土町下豊浦から神崎郡能登川町伊庭にかけての，旧大中の湖の南湖畔にある幅 100 m 前後の低平な小砂洲に立地する。1964 年に大中の湖の干拓によって発見され，1965・1966 年に滋賀県教育委員会が発掘調査を実施した。

遺跡の範囲は幅約 150m，東西 1,600m にわたり，その範囲内に弥生時代中期（第Ⅱ様式）の住居地域と水田地域が整然と区画されていた。両地域の境には，両側を杭で護岸した巾７ｍの潅漑用の溝がめぐり，溝の中から弥生土器（第Ⅱ様式）や木器が出土した。また，水田の畦畔にも矢板や杭列を用いていた。湖辺の集落にふさわしく，貝塚や丸木舟なども発見されている。出土した木器は，各種の鍬や鋤，木偶，石斧柄，竪杵，網枠，各種の容器とその未成品など多彩である。

fig. 206　大中の湖南遺跡木器出土地点
(1:25,000　能登川)

〔木器番号〕*00301, 01307, 01310, 01507, 01608, 01904, 02309, 02805, 03304, 03305, 03706, 05604, 05901, 05905, 05907, 12702*

〔文　　献〕水野正好『大中の湖南遺跡発掘調査概要』滋賀県文化財調査概要第５集，滋賀県教育委員会 1967 年

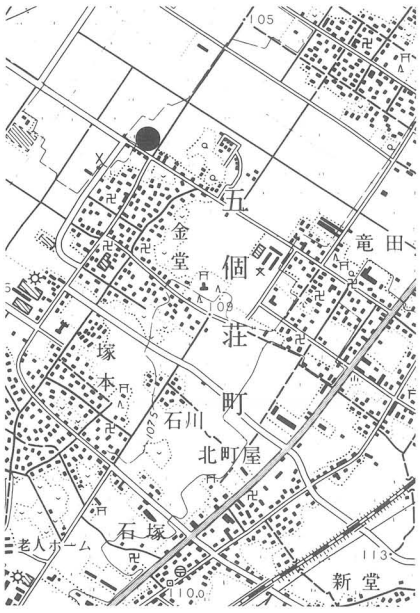


fig. 207　正源寺遺跡木器出土地点
(1:25,000　八日市)

18　正源寺遺跡（fig. 207）　しょうげんじ

神崎郡五個荘町大字金堂に所在。琵琶湖の東岸，湖東平野のほぼ中央部を貫流する愛知川の左岸の低位扇状地端部に立地し，標高 102m 前後をはかる。圃場整備事業に伴って，1982 年 10 月から翌年１月にかけて五個荘町教育委員会が発掘調査を実施した。検出した遺構には，６世紀のものと８世紀のものがある。前者には大量の木器が出土した竪穴住居ＳＴ03をはじめとする計６棟の住居跡と，一辺７ｍの低墳丘の方形墳がある。後者には，２間×２間・２間×３間・３間×４間などの掘立柱建物跡20棟がある。

竪穴住居跡ＳＴ03は一辺 5.3m の方形を呈し，南辺にカマドを設けている。床面は検出面から 60cm と比較的深いが，北半分は一段高くベッド状になっている。出土した木器には，経巻具，布巻具，桙，椅子などの織機と，平鍬・又鍬・木錘などの農具，斧の柄などの工具，盤・槽などの容器類と，建築部材・用途不明品がある。伴出した土器は，６世紀中葉から末葉の須恵器と土師器である。これらの出土状況は，住居床面に散乱したものや住居の埋土内で浮いた状態のものがあり，出土した木器の大半は破損品であることから，廃絶した住居跡を不用品の廃棄土坑として利用した結果と見られる。

〔木器番号〕竪穴住居ＳＴ03；*00507, 00508, 04707, 05210, 06003, 09427, 09504, 09613, 09614, 10837, 17901, 18720*

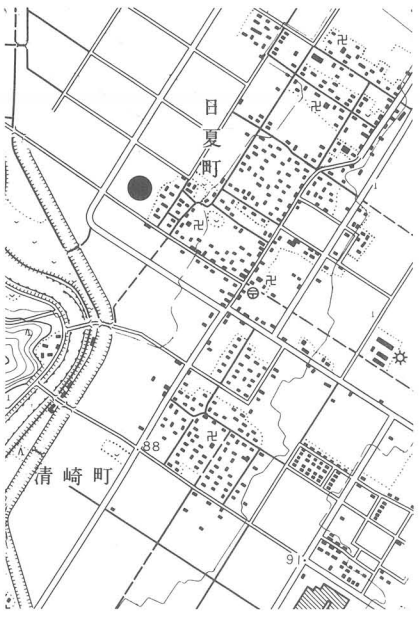


fig. 208　妙楽寺遺跡木器出土地点
(1:25,000　能登川)

19　妙楽寺遺跡（fig. 208）　みょうらくじ

彦根市日夏町に所在。湖岸に近い独立丘陵，荒神山の東山麓の低地に立地する。1980 年度の圃場整備事業に伴って，滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施した。検出した遺構・遺物は弥生時代後期（Ｖ様式）～庄内式期のものと，奈良時代中期～平安時代末期のものに大別でき，自然流路・溝・ピットなどを確認した。木器は，庄内式の土器をともなう自然流水路（ＳＤ３，８）と小溝（ＳＤ９）から出土した。

〔木器番号〕自然流水路ＳＤ３；*05706, 19722*　　自然流水路ＳＤ８；*01418*
小溝ＳＤ９；*16414*

〔文　　献〕近藤滋・北川浩「妙楽寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ―１，滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1980 年

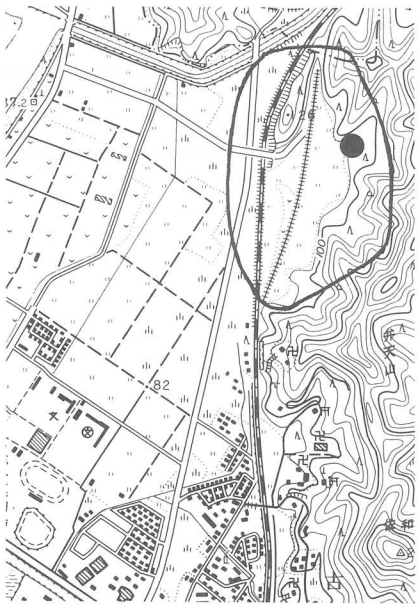


fig. 209　松原内湖遺跡木器出土地点
(1:25,000　彦根東部)

20　松原内湖遺跡（fig. 209）　まつばらないこ

彦根市松原町に所在。旧松原内湖の東北岸に広がる遺跡である。滋賀県東北部流域浄化センターの建設に先立ち，1984 年以降滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施している。遺跡は縄文時代早期に形成され，江戸時代後期まで断続的に継続するが，なかでも縄文時代後期から奈良時代までの期間は，ほぼ連続して遺物が出土し，出土量も他の時期を凌駕している。遺物量に比べ検出された遺構は極めて少ない。これまでの調査では，縄文時代後期のピットが２群，５基の甕棺墓を含む縄文時代晩期の土坑墓群，弥生時代後期の住居跡数棟と井戸・土坑，古墳時代の旧内湖に流入する河道，奈良時代の掘立柱建物４棟等を検出したにとどまる。木器には縄文時代後期から奈良時代後期までの各時代のものがあるが，これ

らは包含層の層位や出土地点によって区別できる。

〔木器番号〕縄文晩期包含層；*15601, 15607*

弥生後期包含層；*02201*　　古墳前期包含層；*12104*

〔文　　献〕細川修平「滋賀県松原内湖遺跡出土の箆状木製品」『考古学雑誌』第72巻第4号，日本考古学会1987年

滋賀県埋蔵文化財センター「黒漆塗り蓋？が出土―彦根市・松原内湖遺跡―」『滋賀埋文ニュース』第93号，1987年

滋賀県埋蔵文化財センター「彦根市・松原内湖遺跡出土着柄鍬の保存処理」『滋賀埋文ニュース』第95号，保存処理ニュースNo.31―［B］1988年

21　入江内湖遺跡（西野地区）(fig. 210)　いりえないこ(にしの)

入江内湖は東西2km，南北2.6km，周囲8kmにおよぶ琵琶湖第2の大きさの内湖で，1944～1949年の干拓事業に際し，縄文時代早期から平安時代に至る大複合遺跡であることが判明した。西野地区（入江内湖西野遺跡）は，坂田郡米原町磯西野に所在する。旧矢倉川の形成するデルタ地帯の南側，旧入江内湖の南東岸付近に立地している。1976年度に矢倉川の改修に伴い，滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施し，古墳時代後期の掘立柱建物数棟のほか，耕作土を除く第1～3層の遺物包含層を確認した。木器は第3層下部の泥炭層から出土している。各包含層のいずれからも布留式の甕を伴う土器類が出土しているが，第Ⅰ形式4段階以降の須恵器類を出土する上部2層とは異なり，第3層では須恵器類を伴っていない。

〔木器番号〕第3層下部；*10602, 10609, 11015, 11115, 11123, 11308, 18623, 18722*

〔文　　献〕田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会1977年

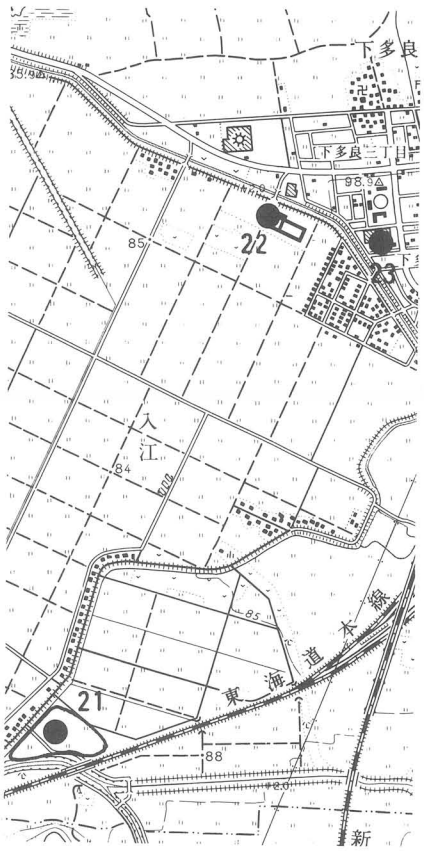


fig. 210　入江内湖遺跡（西野・丸葭・行司町地区）木器出土地点
(1:25,000　彦根東部)

22　入江内湖遺跡（丸葭地区）(fig. 210)　いりえないこ（まるよし）

丸葭地区は，旧入江内湖の北東縁辺部に位置し，坂田郡米原町入江に所在する。1984年度に米原町教育委員会が発掘調査を実施し，旧内湖の汀線もしくは水深の極めて浅かった箇所に堆積したと考えられる遺物包含層を確認した。包含層は耕土直下の褐色腐植土層で，多量の木器を含んでいた。土器類は，極めて少量であるが，須恵器類を含まない布留式並行期のものが出土している。

〔木器番号〕褐色腐植土層；*03604, 04804, 09109, 09210, 09303, 09324, 09421, 09611, 10104, 10113, 11507, 13803, 17504, 18007, 18015, 18611, 18717*

〔文　　献〕中井均『入江内湖遺跡発掘調査報告書―米原町立米原小学校新設に伴う発掘調査―』米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅵ，米原町教育委員会1987年

23　入江内湖遺跡（行司町地区）(fig. 210)　いりえないこ（ぎょうじちょう）

坂田郡米原町大字下多良小字行司町に所在する。入江内湖遺跡は旧内湖の全域に広がる縄文時代早期から平安時代に至る大複合遺跡であるが，行司町地区は，内湖の東北縁辺部の低湿地

に立地する。1985・1986年度に米原町教育委員会が発掘調査を実施し，古墳時代前期の自然流路1条，土坑1基のほか，その上面に堆積する遺物包含層を検出した。層序は第Ⅷ層の暗灰色粘土層を基盤とし，その上の第Ⅵ・Ⅶ層が遺物包含層にあたる。木器は主として第Ⅵ層（腐植土層）から出土し，第Ⅵ層および第Ⅶ層（砂層）からは布留式土器を中心に，縄文土器，弥生土器，庄内式土器などが出土している。木器の年代は布留式土器に並行すると考えられる。木器の総量は2,839点にのぼり，工具・農具・紡織具・運搬具・漁撈具・食事具・容器・祭祀具・楽器・建築部材等の各種におよぶ。

〔木器番号〕第Ⅵ・Ⅶ層；*01104, 01105, 01113, 02108, 02204, 02206, 02208, 02414, 03605, 03705, 03808, 03812, 04306, 04806, 05207, 05310, 05902, 05910, 05912, 07003, 07004, 07101, 09709, 09807, 10110, 10404, 10410, 10501, 10502, 10506, 10606, 10810, 11411, 11519, 12108, 12215, 13312, 14508, 15606, 16207, 16305, 17003, 17804, 18203, 18214, 18302, 18307, 18311, 18314, 18316, 18317, 18413, 18507, 19515, 19813, 20107*

〔文　　献〕中井均・岡田文男・他『入江内湖遺跡（行司町地区）発掘調査報告書―滋賀県立文化産業交流会館建設に伴う発掘調査―』米原町埋蔵文化財調査報告Ⅸ，米原町教育委員会1988年

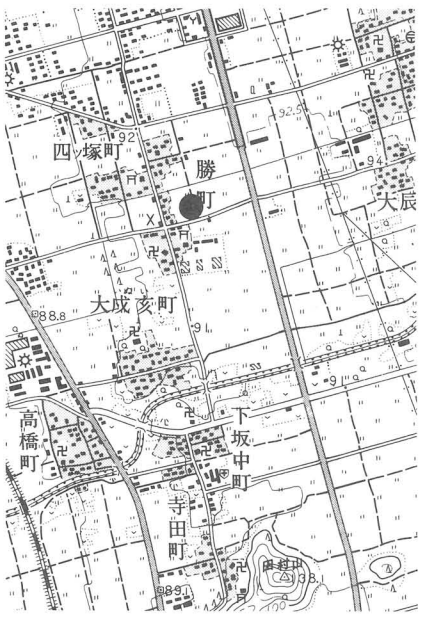


fig. 211　鴨田遺跡木器出土地点
（1:25,000　長浜）

24　鴨田遺跡（fig. 211）　かもだ

長浜市大戌亥町に所在する弥生時代中期から古墳時代後期にかけての集落遺跡。姉川が形成した扇状地の末端部，湧水の激しい低地に立地する。これまでに，国道8号線長浜バイパス建設工事や県営圃場整備事業などに伴い，滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施している。バイパス建設工事に伴う1971年度の調査では，人工的な溝2条，流水路10条・沼沢地・地割り畔・ピットなどが検出され，低湿地状況を示すに過ぎなかったが，その東側における圃場整備事業に伴う調査では方形周溝墓が検出され，少なくとも墓域の存在が明確になっている。木器はバイパス工事に伴う調査時に出土したもの。弥生時代後期から古墳時代後期までの遺物を含む溝3からも若干量が出土しているが，大半は溝A（沼沢地）から出土した。溝Aは調査地を縦断する幅10～20m，深さ1.5mの河道状のもの。上から腐植土層・粘土層・砂層が順次堆積し，木器は最上層の腐植土層から出土している。下層の粘土層と砂層から出土する土器は，弥生時代中期から古墳時代中期を中心とし，古墳時代後期のものを若干含む。

〔木器番号〕T地区溝3；*14102*

溝A（沼沢地）；*04006, 04705, 07705, 09319, 09711, 11002, 11901, 15105, 15111, 16310, 17206, 18305, 18411, 18414, 19206, 19723, 20101*

〔文　　献〕中谷雅治・田中勝弘・他「鴨田遺跡」『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会1973年

25 川崎遺跡（fig. 212） かわさき

長浜市川崎町に所在する弥生時代の集落跡。扇状地性の沖積平野にあって，湧水の激しい低湿地に立地している。1970年度に国道8号線長浜バイパス建設工事に伴う発掘調査を滋賀県教育委員会が実施して以来，小規模な調査が何回か行われている。1970度の調査では，弥生時代前期中段階及び新段階の土器類が木器・石器と共伴し，少量の水神平式土器を伴出する包含層も検出されている。その後の調査では，前期中段階の単純遺物を含む溝を検出し，また，前期古段階に遡る遺物も出土している。木器には，弓・斧柄・梯子・平鍬・無頸壷などがあり，獣骨，籾の炭化物なども出土している。

〔木器番号〕*00901, 01703, 01705, 02601, 03007, 11122, 12306, 12805, 20122*

〔文　　献〕鹿野健・松田典夫・他「川崎遺跡・南方東遺跡」『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会 1971年

fig. 212 川崎遺跡木器出土地点
(1:25,000 長浜)

26 高田遺跡（fig. 213） たかだ

長浜市高田町に所在。長浜市街の中心地であるが，琵琶湖岸から僅か1kmの低湿地に立地する。1978年度に長浜市教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が実施した発掘調査では，河川あるいは氾濫による堆積を示す砂・礫・粘土・粘質土・腐植土の互層のなかに12層におよぶ遺物包含層を検出した。各包含層には各時期の遺物が混在するが，弥生時代後期・庄内式並行期・布留式並行期・8世紀前半頃の4時期に大別できる。木器は布留式並行期と考えられる第8層から出土。脚付の盤や丸木舟・梯子などが出土しているが，いずれも鋭い刃物の傷が残っており，人為的に廃棄されたものと考えられる。

〔木器番号〕第8層；*18803*

〔文　　献〕宮成良佐・他『高田遺跡（長浜電報電話局敷地内所在）調査報告書』長浜市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1980年

fig. 213 高田遺跡木器出土地点
(1:25,000 長浜)

27 国友遺跡（fig. 214） くにとも

長浜市国友町に所在。姉川左岸に形成された沖積地に立地する。1975年度に北陸自動車道建設工事に伴い，滋賀県教育委員会と(財)滋賀県文化財保護協会が発掘調査を実施。姉川の旧河道と思われる自然流路MⅠのほか，数条の溝を検出した。自然流路MⅠは幅6.0〜18.4m，深さ1.5mで，内部の堆積土は，上から砂層・腐植土層・砂礫層の3層に大別できる。土器類をはじめとする遺物は各層から出土しているが，木器は主に腐植土層から出土した。共伴した土器には，第Ⅰ形式4段階から第Ⅱ形式1段階までの須恵器がある。木器には，鋤・鍬・田下駄・弓・網粋・火鑽臼・横槌・木錘・容器・梯子・縦櫛・紡織具等がある。

〔木器番号〕自然流路MⅠ；*00408, 01103, 05301, 05308, 05911, 07001, 07706, 07707, 08522, 08808, 09211, 09412, 09413, 09503, 09505, 10706, 10709, 10710, 10806, 10838, 11006, 11008, 11114, 11120, 11508, 11518, 15007, 16209, 16312, 16418, 18004, 18010, 18107, 18304, 18402, 18810,*

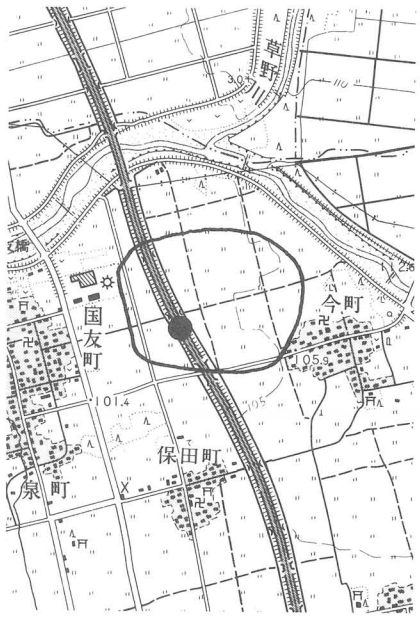


fig. 214 国友遺跡木器出土地点
(1:25,000 長浜)

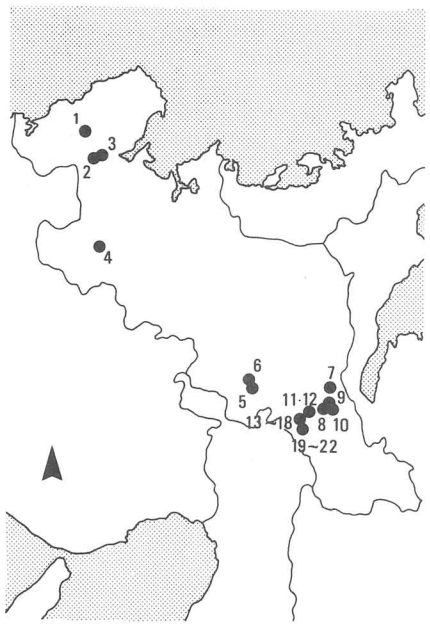


fig. 215　京都府の木器出土遺跡

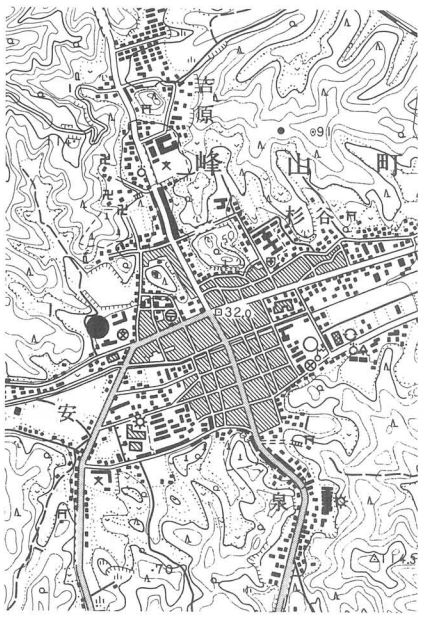


fig. 216　古殿遺跡木器出土地点
(1:25,000　峰山)

19307

〔文　　献〕田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅹ―長浜市国友遺跡―』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1988 年

C　京　都　府

1　古殿遺跡 (fig. 216)　ふるどの

中郡峰山町字古殿にある京都府立峰山高等学校敷地に所在する。1977 年 4 ～ 5 月（第 1 次調査）に京都府教育委員会が，1982 年 7 ～10 月（第 2 次調査），1986 年 8 ～12 月（第 3 次調査），および 1989 年 8 ～12 月（第 4 次調査）に(財)京都府立埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。丘陵の先端部に立地する集落遺跡で，3 世紀（弥生時代後期）～ 5 世紀初頭・12～13世紀の 2 時期の遺構が重複している。3 世紀～ 5 世紀初頭の遺構には，竪穴住居・井戸・溝・木樋・河川・土坑などがあるが，集落構造などは不明である。

図版に収録した 3 世紀～ 5 世紀初頭の木器は，上記各種の遺構や包含層から出土した。4 回の調査をあわせた総数は二千数百点に達し，工具・農具・紡織具・武器・食事具・容器・祭祀具・腰掛・机・箱・火鑽臼・火鑽杵・建築部材など各種におよぶ。5 世紀初頭のものは 2 次的に火を受け，表面が焼けこげているものが多く，集落廃絶の原因をうかがわせる。多量の弥生土器（第Ⅴ様式）と庄内・布留式の土器，扁平片刃石斧，敲石，磨石，石鑿，砥石，碧玉管玉，碧玉・水晶・石英・瑪瑙の原石や剥片，土製品などが共伴した。

〔木器番号〕第 1 次調査溝ＳＤ02；*09519, 19314*
第 1 次調査井戸ＳＥ03；*15201, 19408*
第 1 次調査溝ＳＤ04；*14305*
第 1 次調査包含層（Ⅱ層）；*04106, 07907, 09508, 13308, 16014, 16712, 17209, 17220, 18510, 18511, 19522, 20106*
第 2 次調査河ＳＤ02；*06407, 07904, 09424, 09617, 10512, 11309, 11527, 12212, 12216, 13602, 15102, 17402, 17404, 17603, 17708, 18101, 18502, 19303, 20016*
第 2 次調査河ＳＤ11；*08810, 09710, 12214, 13901, 18603, 19517*
第 2 次調査　包含層；*09510, 10517, 11213, 12211, 12217, 12218, 18405, 18613, 18620, 18624*
第 3 次調査木器溜ＳＸ301；*17101, 18403*
第 3 次調査河ＳＤ302・303；*17114, 17801*
第 3 次調査　包含層；*00316, 00319, 16702, 17805, 18102, 18801*

〔文　　献〕平良泰久「古殿遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1978』京都府教育委員会 1978 年
戸原和人・藤原敏晃「古殿遺跡出土の注口土器・案」『京都府埋蔵文化財情報』第 6 号，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982 年
鍋田勇「峰山町古殿遺跡の第 3 次調査」『京都府埋蔵文化財情報』第 23 号，(財)

京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 年
鍋田勇『古殿遺跡出土の梯子状組合せ木製品」『京都府埋蔵文化財情報』第 23 号，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 年
鍋田勇・戸原和人・他『古殿遺跡』京都府遺跡調査報告書第 9 冊，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 年
岩松保「古殿遺跡第 4 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 37 冊，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990 年

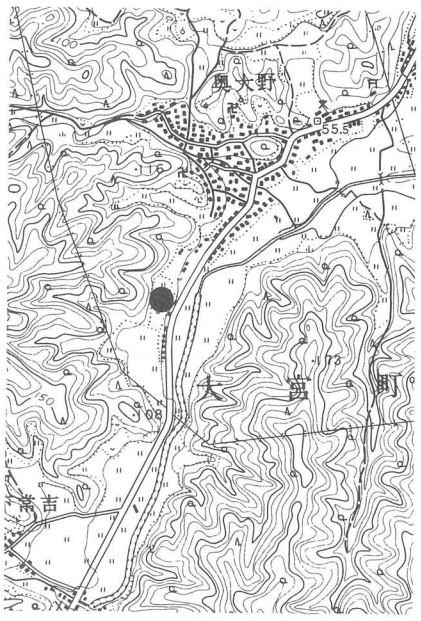


fig. 217 正垣遺跡木器出土地点
(1:25,000 四辻)

2 正垣遺跡 (fig. 217) しょうがき

中郡大宮町字奥大野小字正垣ほかに所在する。1985 年・1986 年に(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが，府営圃場整備事業に伴い発掘調査を実施した。谷間に開けた小台地上に立地する。2 次にわたる調査の結果，弥生時代後期の竪穴式住居 1 基と河川，古墳時代後期の円墳 1 基，方形竪穴式住居 7 基，奈良時代～鎌倉時代の掘立柱建物20棟・柵・井戸・土坑などを検出した。出土遺物に施釉陶器や墨書土器・転用硯・石帯（巡方）があることから，奈良時代以降の集落遺跡は地方官衙的な性格を持つと考えられる。

収録した木器は，弥生時代後期（弥生Ⅴ期）の土器を含む河ＳＤ05から出土した。幅 5 m，深さ 60cm をはかり，集落を画する溝の可能性もあるが，検出部分が長さ 3 mと限られているため明確ではない。伴出遺物には土器類のほかにガラス小玉などがある。

〔木器番号〕河ＳＤ05；*12210, 15610, 16808, 18915*

〔文　　献〕竹原一彦「府営ほ場整備関係遺跡昭和 60・61 年度発掘調査概要（１）正垣遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 22 冊，(財)京都府埋蔵文化財研究センター 1987 年
竹原一彦「京都府正垣遺跡出土の弥生時代木製琴」『考古学雑誌』第 72 巻第 4 号，日本考古学会 1987 年

3 谷内遺跡 (fig. 218) たにうち

中郡大宮町字谷内小字古苗代田に所在する。1986・1987 年に，府営圃場整備に伴い京都府教育委員会および(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。谷平野の奥にある小扇状地に立地する集落遺跡で，4 次にわたる調査によって縄文時代早期の押型文土器をはじめ，弥生時代後期末から古墳時代中期にかけての多量の土器を含む自然流路・竪穴住居群，奈良・平安時代の遺構・遺物などを検出した。

木製穂摘具は，第 1 次調査で確認した自然流路ＮＲ01から出土した。流路は幅約 1.5m・深さ約 0.5m をはかる。層位は 5 層に大別でき，穂摘具等の木器や多量の土器，稲籾等の植物遺体を含む黒褐色粘質土層はその下位にあたる。共伴する土器には，口縁端部に疑凹線を施す壷・甕類があり，丹後における土器編年から畿内の庄内式に並行する時期が比定できる。

〔木器番号〕自然流路ＮＲ01；*07819*

〔文　　献〕藤原敏晃「谷内遺跡出土の木製穂摘具について」『京都府埋葬文化財情報』第 22 号，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986 年
藤原敏晃「府営ほ場整備関係遺跡昭和 60・61 年度発掘調査概要（２）谷内遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 22 冊，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 年

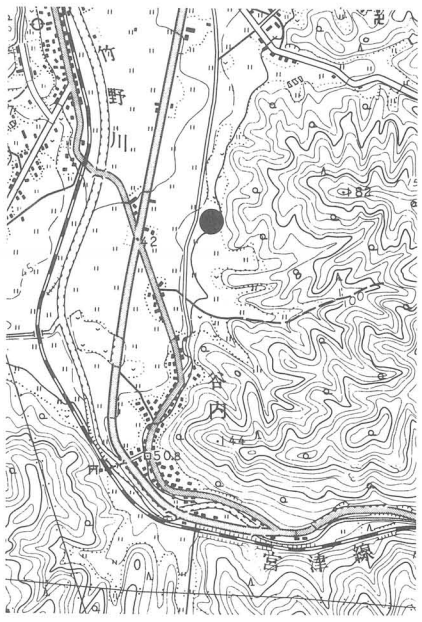


fig. 218 谷内遺跡木器出土地点
(1:25,000 四辻)

奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和61年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1987』，京都府教育委員会 1987 年
奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和62年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1988』，京都府教育委員会 1988 年
細川康晴「谷内遺跡第 4 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 28 冊，（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988 年

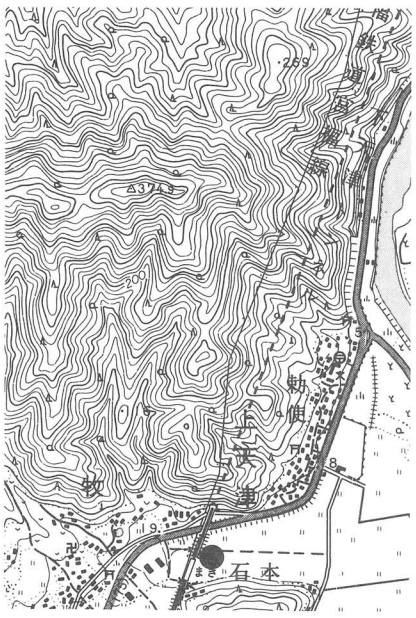


fig. 219　石本遺跡木器出土地点
(1:25,000　三岳山)

4　石本遺跡（fig. 219）　いしもと

福知山市牧字岩田・段に所在。福知山盆地を形成する由良川中流域の自然堤防状微高地に立地する。1984 年の宮福線鉄道建設に伴って(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施し，弥生時代中期の方形周溝墓・土坑群，同後期末頃の円形竪穴住居，古墳時代後期の大溝および方形竪穴住居16基・掘立柱建物・柵・溝などを検出した。

木器は，6 世紀後半を中心に存続した古墳時代集落の西縁をめぐる幅約 3 m，深さ約 1 mの大溝（溝 2）から出土した。溝は，延長約40m分を確認し，大量の須恵器・土師器のほか，鉄器，土製品，石製品，骨角製品，馬歯・牛骨等を含む動植物遺存体など多種の遺物にともない，総数約180点の木器が出土している。溝内には小規模な堰を設け，集落がわの溝肩には，土塁があったと思われる。出土した須恵器から，この溝は 7 世紀初頭頃に埋没したと考えられる。

〔木器番号〕A地区溝 2 ；*00320, 00415, 04509, 05203, 05204, 07908, 07912, 08909, 09221, 09417, 09418, 09419, 09420, 09428, 09429, 09430, 09431, 11016, 11017, 11804, 11902, 11904, 11905, 12013, 12201, 14915, 15011, 16214, 16506, 16507, 16508, 16509, 16510, 16511, 16708, 16711, 16809, 17218, 18702, 20017, 20020*

〔文　　献〕辻本和美「福知山市石本遺跡の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第 14 号，（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 年
竹原一彦「石本遺跡出土の木製遺物」『京都府埋蔵文化財情報』第 14 号，（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 年
辻本和美「宮福線関係遺跡昭和59年度発掘調査概要（1）石本遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 13 冊，（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985 年
辻本和美・竹原一彦・小橋拓司『石本遺跡』京都府遺跡調査報告書第 8 冊，（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987 年

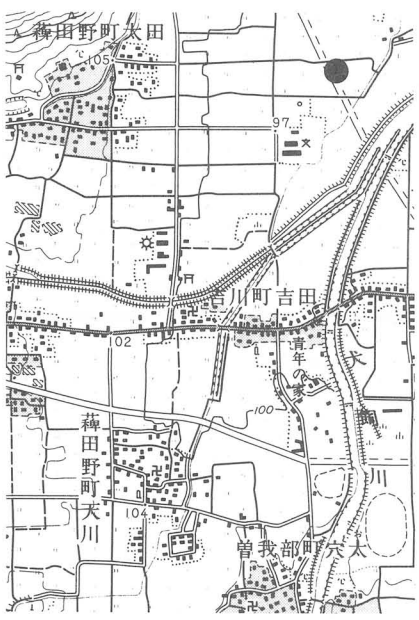


fig. 220　太田遺跡木器出土地点
(1:25,000　亀岡)

5　太田遺跡（fig. 220）　おおた

亀岡市薬田野町太田に所在する。大堰川右岸にある標高 100m 前後の扇状地上に立地する縄文時代後期から古墳時代にかけての複合集落遺跡。1982 年に国道 9 号バイパス建設に伴い(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施し，弥生時代前期末（弥生Ⅰ期）から中期初頭（弥生Ⅱ期）にかけて形成された 50 基前後の土坑（墓）群および溝・ピット群などを検出した。木器が出土した溝ＳＤ0207・ＳＤ0208は，土坑群を取り囲んで弧状にほぼ並行して走り，途中で 3 条になる。溝の規模は，ＳＤ0207が幅 5 ～ 8 m，深さ約 1 m，ＳＤ0208は幅約

3 m，深さ 0.5m で，各々延長約 40m 分を確認した。埋土の状態からみて，両溝とも中期初頭には埋没したものと想定される。出土した木質遺物は約 3,000 点を数えるが，製品と確認できるものは約 50 点程である。そのなかには籠状の編物断片があり，また，土坑から縦櫛が 1 点出土している。

〔木器番号〕溝ＳＤ0207；*03008*　　溝ＳＤ0208；*01106, 01410, 18903*

〔文　　献〕村尾政人「太田遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 7 冊，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983 年

水谷寿克・村尾政人・田代弘・伊辻忠治『太田遺跡』京都府遺跡調査報告書第 6 冊，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986 年

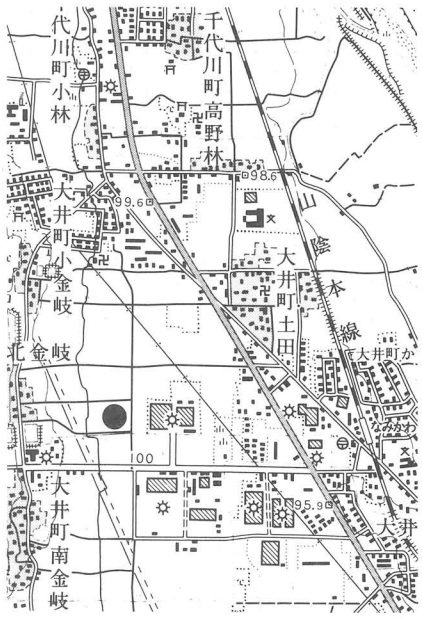


fig. 221　北金岐遺跡木器出土地点
(1:25,000　亀岡)

6　北金岐遺跡（fig. 221）　きたかなげ

亀岡市大井町字北金岐に所在する。1982～1984 年にかけて，国道 9 号バイパス建設に伴い(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。亀岡盆地の西側にある緩やかな山麓に立地する複合集落遺跡で，検出遺構は 4 時期に大別できる。第 1 期は弥生時代後期～古墳時代前期の大溝および竪穴住居群，第 2 期は古墳時代後期の竪穴住居，第 3 期は溝で区画した奈良時代中期～平安時代の掘立柱建物群，第 4 期は平安時代後期～室町時代の掘立柱建物群で大型建物を含む。

木器は第 1 期の大溝（Ｂ地点ＳＤ01）から出土した。溝は上面幅約 6 ～ 9 m，深さ約 1.5～2 m をはかり，約 55m 分を確認。溝内に 3 枚の板材を杭・栗石・粘土で固定した堰を構築しており，田舟などはその周辺で出土した。共伴する大量の土器は弥生時代後期後半に属するが，堰近辺の埋土には一部布留式甕を含み，堰の構築時期も後者の土器群に対応すると考えている。

〔木器番号〕Ｂ地点大溝ＳＤ01；*10001, 10303*

〔文　　献〕石井清司・森下衛「北金岐遺跡Ｂ地点検出の大溝について」『京都埋蔵文化財情報』第 11 号，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 年

石井清司・田代弘・中坪央暁『北金岐遺跡』京都府遺跡調査報告書第 5 冊，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985 年

7　岡崎遺跡（fig. 222）　おかざき

京都市左京区岡崎最勝寺町・成勝寺町・法勝寺町・円勝寺町・徳成町に所在する。1960 年・1961 年・1970 年・1971 年に奈良国立文化財研究所および円勝寺発掘調査団が発掘調査を実施し，1977 年・1978 年・1981 年以降は(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査を継続している。白川が形成した緩扇状地上に立地する。白河街区遺跡の下層にあって，弥生時代前期から古墳時代後期に至るまで継続する遺跡である。これまで検出した遺構には，方形周溝墓・掘立柱建物・自然流路（河川）などがある。

収録した木器は，1981 年の調査で検出した河川から出土した。河川は緩やかに彎曲して北東から南西に流れ，幅約 20m，深さ約 2 m をはかる。屈曲部の北西岸をしがらみで護岸している。4 世紀前半～ 5 世紀中葉の多量の土師器，微量の須恵器とともに直柄鍬・曲柄鍬・泥除・臼・木錘・火鑽臼・四脚槽・机脚・梯子・柱材・用途不明品などの木器が出土した。

〔木器番号〕流路；*01812, 03805, 04005, 04502, 05002, 08405, 09411, 13705, 17113, 17204, 18025, 18604, 19406, 20002*

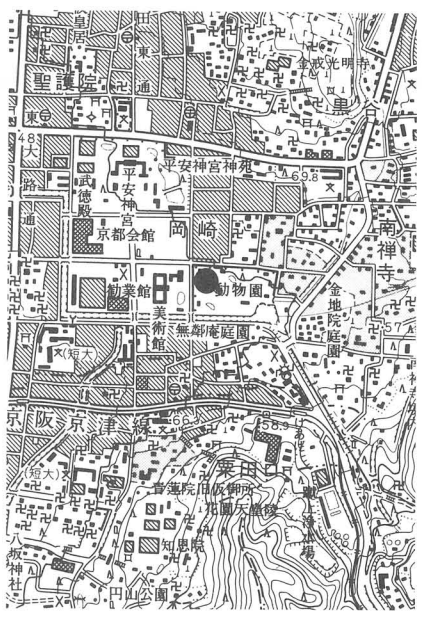


fig. 222　岡崎遺跡木器出土地点
(1:25,000　京都東北部)

〔文　　献〕杉山信三・他「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮・伝飛鳥板蓋宮跡』奈良国立文化財研究所学報第10冊 1961年
円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査（上）」『仏教芸術』第82号，1971年
京都市『史料　京都の歴史』第2巻，考古，1983年
鈴木廣司・平方幸雄「法勝寺跡」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選（二）』1986年

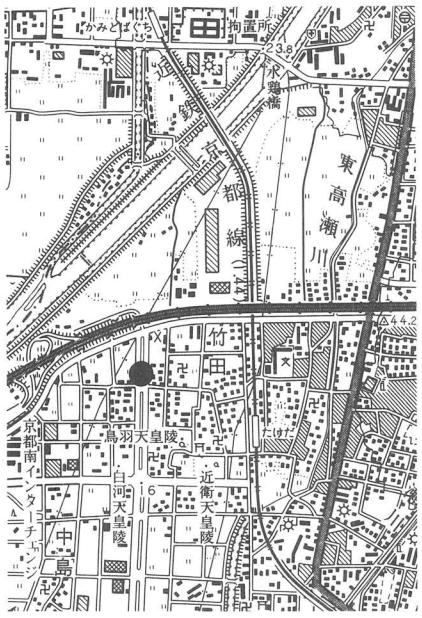


fig. 223　鳥羽遺跡木器出土地点
(1:25,000　京都東南部)

8　鳥羽遺跡（fig. 223）　とば

京都市伏見区竹田小屋ノ内町・内畑町・真幡木町・浄菩提院町・田中殿町・中島宮ノ後町・秋ノ山町・宮ノ前町・御所ノ内町に所在する。1963年に，京都府教育委員会が行なった鳥羽離宮南殿跡の発掘調査で下層遺構の存在が推定され，1978年以降は（財）京都市埋蔵文化財研究所が調査を継続している。旧鴨川右岸に形成された沖積地の微高地上に立地する。鳥羽離宮跡の下層にあって，縄文時代晩期から奈良時代まで継続する遺跡である。これまでに検出した遺構は，竪穴住居・掘立柱建物・古墳・土坑墓・木棺墓・土坑・溝・河川など多岐にわたる。

収録した木器は，1981年の調査（鳥羽離宮跡第71次調査）で検出した弥生時代中期の溝ＳＤ3005から出土した。溝は北東から南西に斜行し，断面形はＵ字形を呈する。幅1.5～2.5m，深さ0.8～1.5mをはかる。弥生時代中期の壷・甕・鉢・高杯など多量の土器類，土錘，石斧などの石器と共に，直柄又鍬・鍬膝柄・杵・容器・弓・用途不明品などの木器が出土した。

〔木器番号〕溝ＳＤ3005；*05302*

〔文　　献〕京都市『史料　京都の歴史』第2巻，考古，1983年
木下保明・本弥八郎・長宗繁一「第71次調査」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
(財)京都市埋蔵文化財研究所『増補改編　鳥羽離宮跡 1984』1984年

9　深草遺跡（fig. 224）　ふかくさ

京都市伏見区深草西浦町ほかに所在。1955年4月に古代学研究会，1960年に明治大学，1964年に竜谷大学，1966年に京都府教育委員会が発掘調査を実施し，1977年以降，周辺の下水道管埋設工事などに伴って(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査・立会調査を継続している。北東から南西にゆるやかに傾斜する標高25m前後の平地に立地する。弥生時代を中心とし，縄文時代から古墳時代に至る集落遺跡で，旧流路，竪穴住居などが判明している。木器の多くは旧流路から出土した。この流路は幅約5m，深さ約1m前後の蛇行する溝で，畿内第Ⅱ様式の弥生土器を中心とし，上層に少量の畿内第Ⅴ様式の弥生土器を包含する。

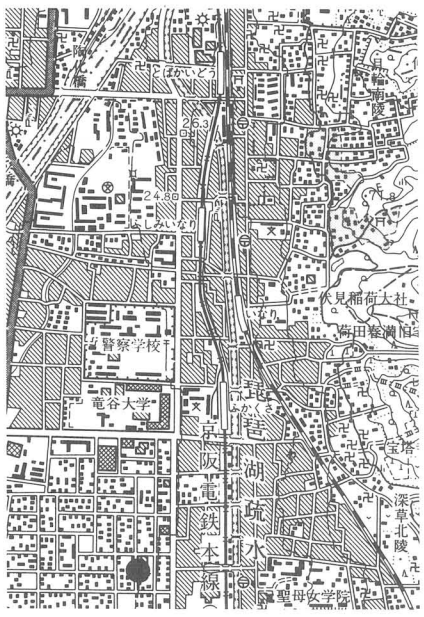


fig. 224　深草遺跡木器出土地点
(1:25,000　京都東南部)

木器には鍬・鋤・又鍬・泥除・杵・高杯・椀・盤・槽・杓子・弓・紡織具などがある。特に農具未成品の多いことが注目される。収録した木器は，1966年に京都府教育委員会が調査した旧流路からの出土品である。

〔木器番号〕旧流路：*02906, 03707, 12704, 14501*

〔文　　献〕杉原荘介・大塚初重「京都府深草遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1960・1961年
網干善教「深草弥生式遺跡の調査」『龍谷史壇』第54号，龍谷大学史学会 1965

年
網干善教「深草遺跡木製鍬の一例について」『龍谷史壇』第55号，龍谷大学史学会1965年
京都大学考古学研究会「深草弥生遺跡調査概報」『第17トレンチ』1966年
堤圭三郎「深草遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1967』京都府教育委員会1967年
宇佐晋一・小川敏夫・星野献二「深草遺跡」『古代学研究』39，古代学研究会1964年

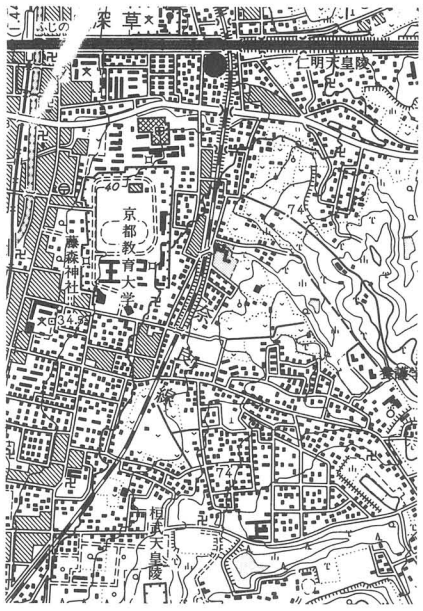


fig. 225　深草坊町遺跡木器出土地点
(1:25,000　京都東南部)

10　深草坊町遺跡（fig. 225）　ふかくさぼうちょう

京都市伏見区深草瓦町に所在。1985年5月～6月に(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施。東山連峰の南端にあたる稲荷山の南西裾にあり，深草遺跡の東側，仁明陵の西側に位置する。縄文時代晩期末の低地堆積土，飛鳥時代の川跡，奈良時代の包含層，平安時代の初期の土器埋納土坑などを検出している。

収録した木器は，飛鳥時代の川（溝58）から出土した。幅2m，深さ1mで，南東から北西に向けて流れる。7世紀初頭の土師器・須恵器とともに，把手付槽・曲物・刳物桶・斎串・把手・焼けた建築部材・植物遺体などが出土した。植物遺体には人里植物が多く，すぐ近くに居住地があったことが想定できる。なお，縄文時代晩期末の堆積土から，自生しないマメ類が出土した。

〔木器番号〕川跡（溝58）；*14004, 15110, 15204, 16407, 16408, 17305*

〔文　　献〕梅川光隆「深草坊町遺跡」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1988年

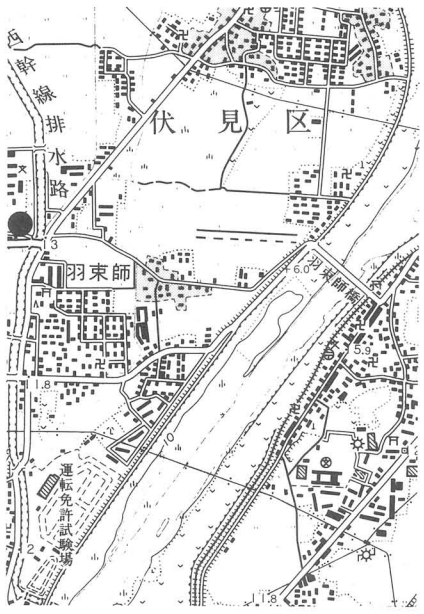


fig. 226　羽束師遺跡木器出土地点
(1:25,000　京都西南部)

11　羽束師遺跡（fig. 226）　はづかし

京都市伏見区羽束師菱川町・志水町・古川町に所在する。1976年・1979年以降，(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を継続している。桂川右岸に形成された沖積平野の微高地上に立地する。長岡京跡の下層に存在する遺跡で，弥生時代中期～古墳時代後期の竪穴住居・溝・土坑・古道・水田などを検出している。

収録した木器は，1981年の調査で検出した弥生時代後期の溝（J区溝）から出土した。溝は，同時期の集落内を貫流するとみられ，断面形はV字形を呈し，幅約1m，深さ0.7～0.8mをはかる。畿内第V様式併行の壷・甕などの土器類と共に，直柄平鍬・一木鋤・掘り棒などの木器が出土した。

〔木器番号〕J区溝；*02007, 07109*

〔文　　献〕鈴木久男・磯部勝・辻純一・吉崎伸「左京四条二坊・四坊」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』(財)京都市埋蔵文化財研究所1983年

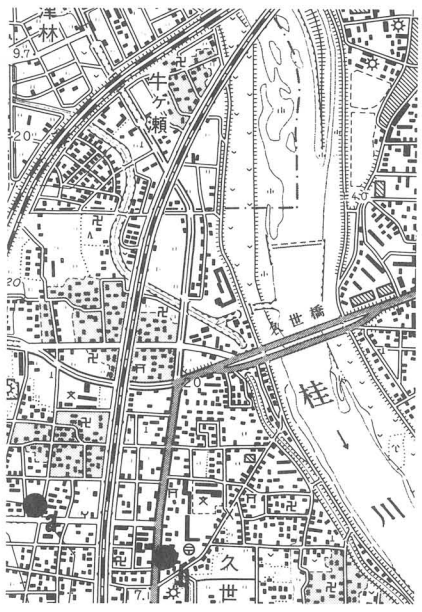


fig. 227　中久世遺跡木器出土地点
(1:25,000　京都西南部)

12　中久世遺跡（fig. 227）　なかくぜ

京都市南区久世町・殿城町に所在。1971年に平安博物館が調査して以来，百数件の発掘・試掘・立会調査を実施している。桂川右岸の自然堤防上に立地し，縄文時代から室町時代までの遺跡が重複している。縄文時代の流路，弥生時代の竪穴住居・土坑・方形周溝墓・溝・流路，

古墳時代の土坑・溝・流路・ピット，奈良時代～平安時代の掘立柱建物・土坑・井戸・溝・流路，鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物・柱穴・土坑・井戸・溝などを検出している。

なお，今回収録した木器は，1977～1978年・1986年に発掘調査で出土したものを取りあげた。

a　中久世遺跡（86MK-AA）

京都市南区久世中久世町に所在。1986年10月～11月に(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査。弥生時代中期～古墳時代初頭の溝，古墳時代後期の溝・土坑・ピットなどを検出している。中久世遺跡の北西端に位置している。

収録した木器は，弥生時代中期～古墳時代初頭の溝から出土した。この溝は上・下に大別でき，下層を溝ＳＤ１－Ａ，上層を溝ＳＤ１－Ｂとした。溝ＳＤ１－Ａは幅6.6m以上，深さ0.6～１m。畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の弥生土器とともに，泥除などの木器が出土した。溝ＳＤ１－Ｂは幅6.6m，深さ0.8m。この中層から畿内第Ⅴ様式の弥生土器とともに，曲柄又鍬身などの木器が出土した。

〔木器番号〕溝ＳＤ１－Ａ；*04008*　　溝ＳＤ１－Ｂ；*04812*

〔文　　献〕上村和直『中久世遺跡発掘調査概要』昭和61年度，京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所1987年

b　中久世遺跡（77MK-NK）

京都市南区中久世殿城町に所在。1977年10月～1978年１月に(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査。縄文時代晩期末の流路，弥生時代の土坑・土坑墓・溝・流路，平安時代の溝，中世の水田などを検出している。

収録した木器は，弥生時代の土坑ＳＫ１，溝ＳＤ８，流路ＳＤ３・６・７から出土した。土坑ＳＫ１は長軸4.3m，短軸3.2m，深さ0.9mの楕円形を呈している。畿内第Ⅱ～第Ⅳ様式の弥生土器とともに，泥除の未成品・用途不明の木器・建築部材と思われる木器などが出土している。溝ＳＤ８は幅1.5m，深さ0.8m。この溝は北東から南西方向へ延びており，北端で土坑ＳＫ１や平安時代の溝で切られている。畿内第Ⅱ～第Ⅳ様式の弥生土器とともに，直柄又鍬・直柄平鍬身の未成品・簪などが出土している。流路は幅８m以上，深さ1.4m。北西から南東方向に延びる流路で，堆積土の状況から流路ＳＤ３・６・７と分けた。畿内第Ⅱ～第Ⅳ様式の弥生土器とともに，直柄又鍬身・泥除の未成品・曲柄平鍬身・曲柄又鍬身・組合せ又鋤身・櫂・網枠・盾・横杓子・盤・蓋・剣形・横槌形・部材・用途不明などの木器が出土した。

〔木器番号〕溝ＳＤ－８；*02403, 03201, 03202, 12024*

土坑ＳＫ－１；*04003, 04202, 19411, 19412, 19413, 19414*

流路ＳＤ－３；*05808, 10702, 16415, 20118, 20120, 20125*

流路ＳＤ－６；*04311, 04402, 10108, 10305*

流路ＳＤ－７；*02313, 03904, 11526, 12506, 13804, 14909, 16212, 18602, 18902*

〔文　　献〕京都市『史料　京都の歴史』第２巻，考古，1983年

(財)京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選』(二) 1986年

13 鶏冠井遺跡（fig. 228） かいで

向日市鶏冠井町七反田・石橋一帯に所在。桂川の氾濫原上に立地する。1962年に東海道新幹線の建設に伴う調査で発見された。1981年12月～1982年4月に向日市教育委員会が長岡京跡左京第82次調査を実施して以降，向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが，長岡京跡左京域調査の一環として発掘調査を継続している。検出した遺構には，縄文時代晩期の窪地状の落ち込み，弥生時代前期中段階～中期の河跡，中期の竪穴住居・堰状遺構・土坑・道路状遺構・溝，長岡京期の掘立柱建物・柵列・井戸・溝・土坑，中世の畦畔・土坑などがある。

収録した木器は弥生時代前期中段階～中期の河ＳＤ8214，ＳＤ8221から出土した。河ＳＤ8214は幅5.5～12m，深さ0.6～1.1mで，流路は北から南東に向かう。堆積土は上・中・下の3層に大別でき，下層・中層は弥生Ⅰ期中段階～Ⅱ期，上層は弥生Ⅲ期～Ⅳ期の土器が出土している。縄文晩期の土器，弥生Ⅰ期中段階～Ⅳ期の土器・石器・銅鐸鋳型とともに斧柄・鍬・鋤・田下駄・横槌・高杯・椀・櫂・箍・用途不明品などの木器が出土している。河ＳＤ8221は幅15m，深さ0.8m。流路の方向は西から南東で，河ＳＤ8214に合流する。縄文晩期の土器・弥生Ⅱ期の土器・石器とともに網枠・箍・用途不明品などの木器が出土している。

〔木器番号〕河ＳＤ8214上層；*07410, 10807, 10816*
河ＳＤ8214中層；*10106, 10814, 13220*
河ＳＤ8214下層；*00801, 04408, 09209, 19410*
河ＳＤ8221；*10703, 10815*

〔文　献〕長谷川浩一・國下多美樹・松崎俊郎・他「長岡京跡左京第82次（7ANEIS地区）～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第2次～発掘調査概報」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集，向日市教育委員会1983年

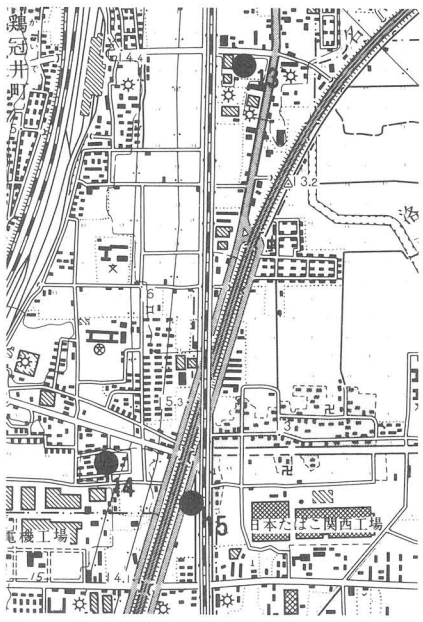


fig. 228 鶏冠井・鴨田・菱田遺跡木器出土地点（1:25,000 京都西南部）

14 鴨田遺跡（fig. 228） かもんでん

向日市上植野町鴨田・十ヶ坪一帯に所在。小畑川が形成した緩扇状地に立地する。1979年2月に向日市教育委員会が実施した長岡京跡左京第24次調査で新たに発見され，以後，長岡京跡左京域調査の一環として発掘調査を継続している。検出した遺構には，弥生時代末～古墳時代前期の土器溜り，古墳時代前期の方墳，古墳時代中期～後期の自然流路・竪穴住居，長岡京期の掘立柱建物・井戸・土坑・溝などがある。

収録した木器は左京第30次調査地の包含層，自然流路ＳＤ3003，左京第106次調査地の大溝ＳＤ10670から出土した。5世紀後半～6世紀後半の自然流路ＳＤ3003は，幅9.5m，深さ0.8m前後をはかる。流路の方向は北から南である。最下層に多量の杭を打ち込んでいるが，西半部しか検出していないので，性格は不明である。古墳時代前期の土器，5世紀後半～6世紀後半の土器とともに直柄鍬身・鋤柄・曲柄鍬・田下駄縦枠・横槌・木錘・盤・琴柱？・刀形・火鑽臼・箱・縦櫛・部材・杭・用途不明品などの木器が出土している。包含層からは斧柄・曲柄鍬・櫂・槽・部材・用途不明品などの木器が出土している。

5世紀後半～6世紀後半の大溝ＳＤ10670は幅13m，深さ1.5mをはかる。堆積土は5層に大別でき，下層の第4・5層は須恵器を含まない。弥生末～古墳時代前期の土器，5世紀後半～6世紀後半の土器と共に曲柄鍬・横槌・糸巻・下駄・刀子形・刀形・箱側板・盤・斧柄・部

材・用途不明品などの木器が出土している。

〔木器番号〕大溝ＳＤ10670；*04801, 09224, 09610, 11907, 16108, 16302, 18103, 18709*

自然流路ＳＤ3003；*03401, 06510, 07604, 09220, 09312, 15614, 16306, 17214, 18201, 20123*

包含層；*00310, 05008, 10308, 13307, 18711, 18718, 20007*

〔文　　献〕山中章・松崎俊郎・他『鴨田遺跡』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第14集，向日市教育委員会1987年

宮原晋一・他「長岡京跡左京第106次（7ANFTB-3地区）～左京四条二坊六町・鴨田遺跡第5次～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集，向日市教育委員会1985年

15　菱田遺跡（fig. 228）　ひしだ

向日市上植野町菱田に所在。小畑川が形成した緩扇状地に立地する。1981年6月～7月に向日市教育委員会が実施した長岡京跡左京第75次調査で新たに発見された。検出した遺構には，古墳時代の掘立柱建物，長岡京期の掘立柱建物・土坑がある。

収録した木器は第1グリット暗灰色粘質土（古墳時代遺物包含層）から出土した。包含層は旧小畑川の南に形成された後背湿地の一部と思われる。5世紀後半～6世紀後半の須恵器が共伴している。

なお，『向日市遺跡地図』第2版（1988）では，当該地を弥生時代前期～古墳時代後期の集落として知られる鴨田遺跡に含めている。

〔木器番号〕*06509*

〔文　　献〕山中章・國下多美樹・松崎俊郎「長岡京跡左京第75次（7ANFHD-2地区）～左京四条二坊十二・十三町～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集，向日市教育委員会1982年

16　森本遺跡（fig.229）　もりもと

fig. 229　森本遺跡木器出土地点
（1:25,000　京都西南部）

向日市森本町下森本ほかに所在。1966年の河川改修工事に際し，弥生土器・石器・弓などが出土し，当初，石田川遺跡と命名されていた。1970年に京都府教育委員会が発掘調査を実施して以後，当該地が長岡宮の北辺官衙地区にあたるため，京都府教育委員会・向日市教育委員会などが周辺の発掘・立会調査を継続している。西から東に向かって開く標高約16mの谷部（水田跡）と，その南に広がる標高約19mの台地上（住居跡など）とに立地する。1970年の谷部の発掘調査では，両側を矢板で護岸した幅1.0～1.8mの弥生時代中期の水路と，杭で護岸した幅0.5～0.8mの弥生時代後期の水路とを検出した。この両水路から，人面土器を含む多量の弥生土器・石器・木器が出土した。また，台地上における調査では，弥生時代の竪穴住居，方形周溝墓などを検出している。

収録した木器には，1970年の発掘調査で弥生中期水路から出土したもの，1966年の採集品，1979年の立会調査で溝ＳＤ794203から出土したものがある。収録した曲柄又鍬・弓・円板・発火具以外に，直柄鍬・杵・椀・槽・杭・矢板などの木器が出土している。

〔木器番号〕弥生中期水路；*15009*　　溝ＳＤ794203；*04803*
出土遺構不詳；*10906, 17223*

〔文　　献〕浪貝毅・吉本尭俊・北山惇『森本遺跡発掘調査概報』長岡京発掘調査団 1970 年
松崎俊郎「乙訓地域弥生・古墳時代木器集成－農耕具を中心として－」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会 1986 年

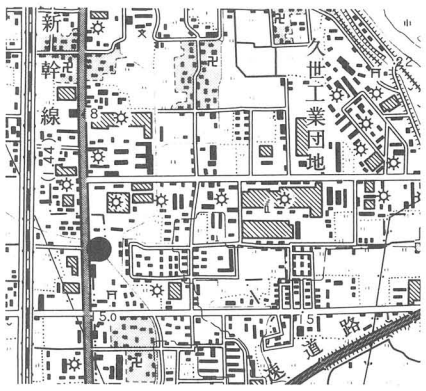


fig. 230　東土川西遺跡木器出土地点
(1:25,000　京都西南部)

17　東土川西遺跡（fig. 230）　ひがしつちかわにし

向日市森本町戌亥に所在。桂川の氾濫原に立地する。1979 年 11 月～12 月に向日市教育委員会が実施した長岡京跡左京第36次調査で新たに発見された。検出した遺構には，弥生時代後期～古墳時代初期の流路群，長岡京期の掘立柱建物がある。また，縄文時代晩期の土器包含層から丸木舟が出土している。

収録した木器は，弥生時代後期の流路ＳＤ3604，ＳＤ3608から出土した。流路ＳＤ3606は幅 2 m，深さ 0.4m をはかる。流路の方向は北東から南西である。弥生Ｖ期の土器，ヒョウタンなどの種子類，甲虫類の遺体とともに泥除の未成品，竪杵，枘穴のある部材などの木器が出土した。流路ＳＤ3608は北北東から南南西に向かって流れる。東側を流路ＳＤ3607が浸食しており，規模は不明であるが，幅 3.5m 以上をはかる。弥生Ｖ期の土器などとともに櫂が出土している。

〔木器番号〕流路ＳＤ3604；*04201, 08806, 19317, 19318, 19319, 19320*
流路ＳＤ3608；*10304*

〔文　　献〕竹原一彦「長岡京跡左京第36次（7ANDII）発掘調査略報」『長岡京』第 18 号，長岡京跡発掘調査研究所 1980 年
松崎俊郎「乙訓地域弥生・古墳時代木器集成－農耕具を中心として－」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会 1986 年

18　修理式遺跡（fig. 231）　しゅりしき

向日市寺戸町修理式・蔵町に所在。旧寺戸川の氾濫原上に立地する。1980 年 11 月～1981 年 2 月に向日市教育委員会が発掘調査を実施し，弥生時代後期の水路，古墳時代前期の土坑・足跡などを検出した。水路内の遺物は北岸に集中する傾向があり，その北東部に同時期の集落跡が存在するらしい。

収録した木器は，弥生時代後期の水路ＳＤ30と古墳時代前期の土坑ＳＫ32から出土した。水路ＳＤ30は幅 15m，深さ 0.5m で，北から東へ円弧状に彎曲して流れる。両岸の 3 箇所から岸に直交して延びる杭列があるが，いずれも途中で止まっている。堰状の施設であろう。水路埋土の上面では古墳時代前期の足跡を検出しており，この時期には水路の機能を失っていたことがわかる。後期の弥生土器・石斧・石鏃・種子などとともに鍬の未成品・鋤・鏃・用途不明品などの木器が出土している。

土坑ＳＫ32は長軸 18m，幅 3 ～ 6 m，深さ 0.6 ～ 0.7m の大きなよどみ状のくぼみである。布留式土器とともに曲柄又鍬・部材が出土している。

〔木器番号〕水路ＳＤ30；*11504*　　土坑ＳＫ32；*05101*

〔文　　献〕向日市教育委員会「修理式遺跡第 1 次発掘調査現地説明会資料」1981 年
山中章「長岡京跡修理式第 1 次（7ANBSS-1地区）分布調査概要」『向日市埋蔵文

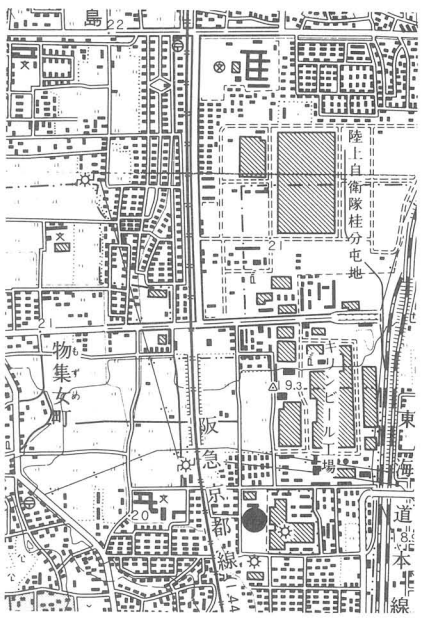


fig. 231　修理式遺跡木器出土地点
(1:25,000　京都西南部)

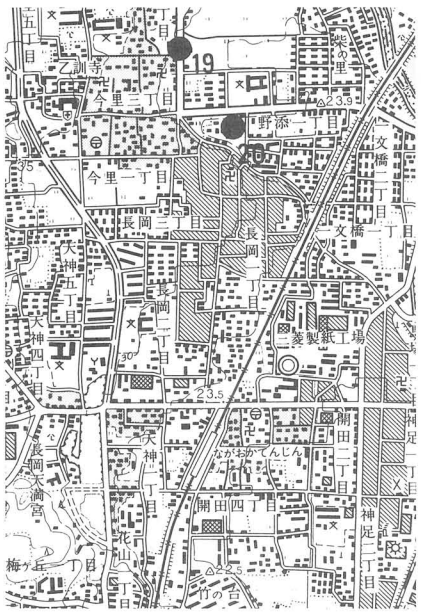


fig. 232　今里車塚・今里北ノ町遺跡木器出土地点（1:25,000　京都西南部）

化財調査報告書』第7集，向日市教育委員会 1981年
松崎俊郎「乙訓地域弥生・古墳時代木器集成－農耕具を中心として－」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会 1986年
向日市『向日市史』上巻 1983年

19　今里車塚古墳（fig. 232）　いまざとくるまづか

長岡京市今里4丁目に所在。1978・1979・1980・1981年に京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施し，削平された古墳の存在を明らかにした。標高約28mの平地に立地し，周囲に盾形の周濠をもつ典型的な中期の前方後円墳である。墳丘全長75m，後円部直径45mをはかり，周囲に幅約20mの濠がめぐる。外部施設として葺石・埴輪があり，さらに墳丘裾の葺石を葺く前に立てた木柱が4m間隔で並ぶ。検出した10本の柱根の一つでは，板材（盾形？）の基部を接して立てた状況を確認した。柱根には大小があり，これが交互に並ぶ。また，周濠内から埴輪片とともに笠形木器などが出土した。笠形木器にも大小があるが，小さい方は断片で全形がよくわからない。柱根・笠形・板材など，すべて樹種はコウヤマキである。

〔木器番号〕墳丘裾；*16904*a　　周濠底；*16904*b，*16904*

〔文　　献〕高橋美久二・他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1980』第2分冊，京都府教育委員会 1980年
石尾政信「長岡京跡右京第84次発掘調査概要（7ANITT-4地区）」『京都府遺跡調査概報』第3冊，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
高橋美久二「長岡京市今里車塚古墳の笠形木製品」『山城郷土資料館報』第3号，京都府立山城郷土資料館 1985年
高橋美久二「木製の埴輪再論」『東アジアの古代文化』56号，1988年

20　今里北ノ町遺跡（fig. 232）　いまざときたのまち

長岡京市今里北ノ町野添に所在。坂川・大正寺川・風呂川・小畑川などの中小河川の氾濫原に立地する。1981年5月～7月に長岡京市教育委員会が実施した長岡京跡右京第75次調査で新たに発見され，1984年7月～8月，1985年4月～5月のほか数次にわたって長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターが，長岡京跡右京域調査の一環として発掘を継続している。検出した遺構には，弥生時代中期から古墳時代前期の流路群，奈良時代の掘立柱建物がある。流路の方向は，西→東，北西→南東の2者に大別でき，幅は1m前後～15mのものが錯綜している。北西に位置する今里遺跡との関係が指摘されている。

収録した木器は，右京第168次調査区の青灰色礫層（弥生～古墳包含層），右京第190次調査区の溝状落ち込みから出土した。

〔木器番号〕溝状落ち込み；*01813*　　青灰色礫層；*05108*

〔文　　献〕木村泰彦「右京第168次（7ANIFD地区）調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度，(財)長岡京市埋蔵文化センター 1985年
木村泰彦「右京第190次（7ANIFD-4地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度，(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1987年

21　下八ノ坪遺跡（fig. 233）　しもはちのつぼ

長岡京市神足下八ノ坪に所在。小畑川と桂川との間にひろがる氾濫原上に立地する。1980年6月～9月に長岡京市教育委員会が実施した長岡京跡左京第53次調査で新たに発見された。検出した遺構には，古墳時代前期の自然流路，長岡京期の掘立柱建物群・溝群・土坑，平安時代前期頃に作られた古道（久我畷）などがある。

収録した木器は，古墳時代前期の自然流路ＳＤ5308から出土した。流路は幅3ｍ以上，深さ0.4mで，北西から南東に向かって流れる。少量の弥生時代後期・庄内式期の土器を含む大量の布留式土器とともに泥除・曲柄又鍬・直柄鍬などの木器が出土した。

なお，『長岡京市遺跡地図』第2版（1987）では，当該地を弥生時代前期～古墳時代後期の集落として知られる雲宮遺跡に含めている。

〔木器番号〕*03609, 05110*

〔文　　献〕奥村清一郎・戸原和人・他「長岡京跡左京第53次（7ANMSB地区）調査概要－左京六条二坊五・十二町・下八ノ坪遺跡・久我畷－」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊，長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所1985年

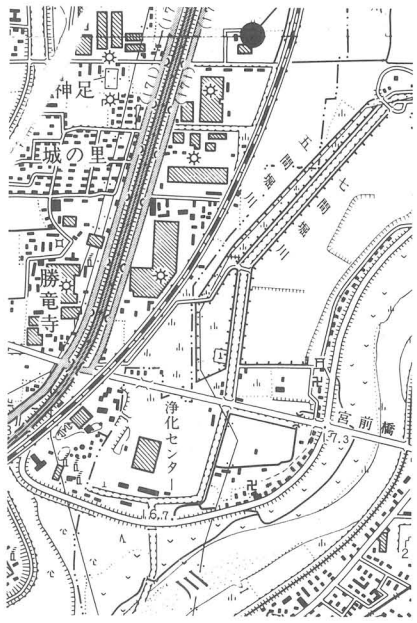


fig. 233　下八ノ坪遺跡木器出土地点
（1:25,000　京都西南部・淀）

22　硲遺跡（fig. 234）　はざま

長岡京市調子3丁目に所在。現在南を流れる小泉川の氾濫低地に立地する。1978年10月～1979年1月に長岡京市教育委員会が実施した長岡京跡右京第14次調査で新たに発見された。検出した遺構には弥生時代中期～古墳時代前期の小河川，古墳時代前期のピット，縄文時代～長岡京期の小河川がある。

収録した木器は，弥生時代中期～古墳時代前期の小河川ＳＤ1401上層から出土した。小河川ＳＤ1401は上下2層に大別でき，下層は幅7ｍ，深さ0.7m，上層は幅2.5m，深さ0.6mをはかる。流路の方向は東から西である。弥生時代中期の土器片・太型蛤刃石斧の破片・古墳時代前期の土器片とともに曲柄又鍬・鋤・用途不明品などの木器が出土した。

〔木器番号〕*05105*

〔文　　献〕久保哲正「長岡京跡右京第14次（7ANRUI地区）調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集，長岡京跡発掘調査研究所1979年

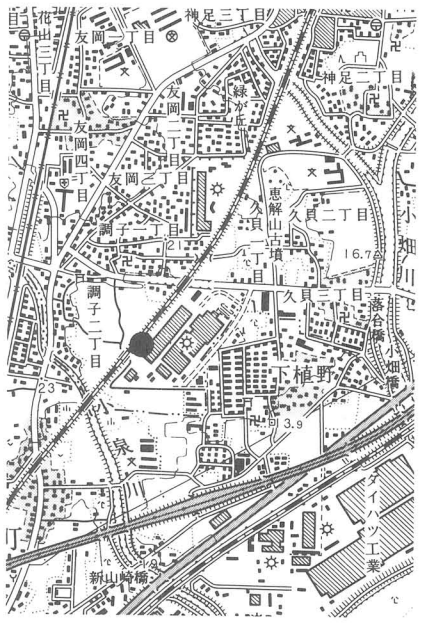


fig. 234　硲遺跡木器出土地点
（1:25,000　淀）

D　大　阪　府

1　安満遺跡（fig. 236）　あま

高槻市八丁畷町・高垣町ほかに所在。旧檜尾川が形成した扇状地の先端部に立地し，東西1.5km，南北0.5kmの広がりをもつ大規模な集落遺跡。標高は7～10mである。これまでに50次におよぶ発掘調査を大阪府教育委員会と高槻市教育委員会が行ない，現在も断続的に実施している。検出した遺構には弥生時代の環濠・井堰（前期），方形周溝墓群（中期），竪穴住居・井戸（後期）などがあり，ほかに古墳時代～中世にかけての掘立柱建物や井戸なども数多く発見している。

弥生時代前期の木器は，1968年に調査した環濠の一部と考えられる2本の東西溝のうちの

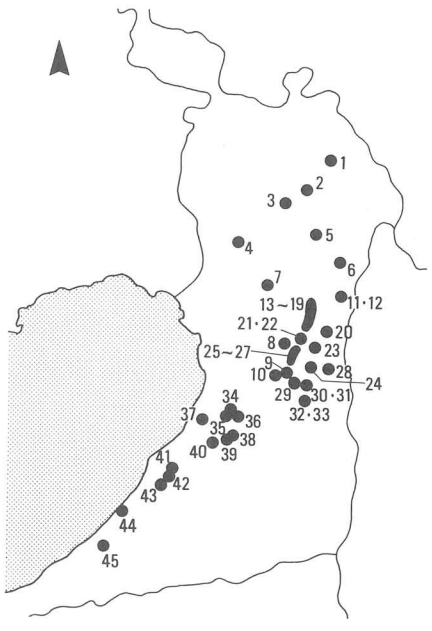


fig. 235　大阪府の木器出土遺跡

fig. 236　安満遺跡木器出土地点
(1:25,000　淀)

北溝（24Ｅ地区東西溝）から出土した。この溝は幅3.5～４m，深さ1.2m前後をはかり，溝内からは木器以外に，多量の土器や石器が出土している。木器のなかには未成品がかなり混在し，なかには原材も含んでいた。おもな木器だけでも斧柄・鍬・鋤・竪杵・匙・高杯・櫛・簪・弓・剣形などが列記できる。

弥生時代中期の木器は，1966年に調査した中期前半の大溝（23－Ｏ地区大溝）から出土している。トレンチ調査のため大溝の規模は判然としない。木器には鍬・鋤・杓子などがあり，多くの第Ⅱ様式の土器が伴っていた。

〔木器番号〕23－Ｏ地区　大溝；*05401, 05402*

24－Ｅ地区　東西溝；*00105, 00505, 00506, 00603, 01403, 01607, 02501, 02801, 03902, 04101, 08608, 10913, 11104, 11105, 12001, 12023, 12302, 12408, 12606, 13004, 13008, 16102*

〔文　　献〕田代克巳・他『高槻市安満弥生遺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会1969年
原口正三『高槻市史』第６巻，考古編，高槻市役所1973年
原口正三「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』第１巻，本編Ⅰ，高槻市役所1977年
森田克行「１大阪府　安満遺跡」『探訪　弥生の遺跡（畿内・東日本編）』有斐閣1989年

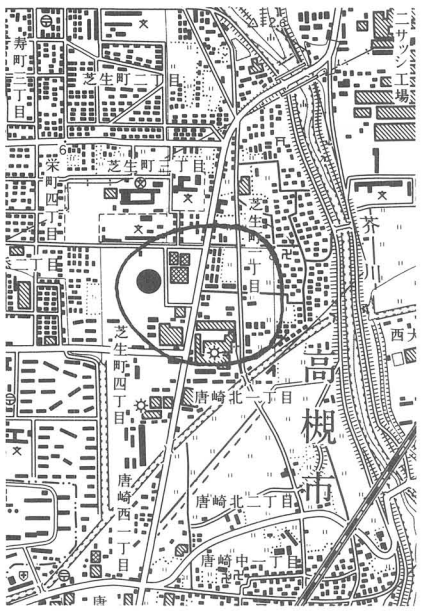


fig. 237　芝生遺跡木器出土地点
(1:25,000　吹田)

2　芝生遺跡（fig. 237）　しぼう

高槻市芝生町に所在。1983年４月，1985年７月～10月に高槻市教育委員会が発掘調査を実施した。市域を南北に貫流する芥川の右岸に形成された自然堤防上に立地する。弥生時代前期～後期にいたる拠点的な集落遺跡で，標高は４～５mである。遺跡の南方約１kmに淀川がひかえている。これまでに中期の竪穴住居・土坑墓・土器棺墓・土器溜，後期の竪穴住居・大溝・井戸・土坑・沼沢地などを検出している。

木器はいずれも後期のもので，大溝と沼沢地（落ち込み）から出土している。大溝は幅４～６m，深さ１～1.2mの人工の用水路で，一部２段掘りになっている。大量の第Ⅴ様式前半の土器とともに，鋤・穂摘具・槌未成品などが出土した。沼沢地（落ち込み）は居住区の北側および西側に広がっており，直柄鍬・穂摘具・槌未成品・竪杵・槽・板材などが多くの土器と一緒に出土している。

〔木器番号〕大溝下層；*06501, 06502, 07803, 08206*

落ち込み；*02002, 07808, 08302, 08805, 13401*

〔文　　献〕森田克行「59，芝生遺跡」『昭和59，60年度高槻市文化財年報』高槻市教育委員会1988年

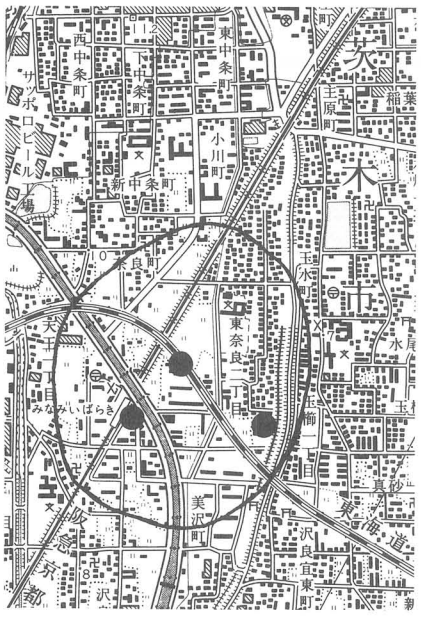


fig. 238　東奈良遺跡木器出土地点
(1:25,000　吹田)

3　東奈良遺跡（fig. 238）　ひがしなら

茨木市東奈良・奈良町・若草町ほかに所在。大正川と茨木川とにはさまれた沖積平野に立地し，南北約1.4km，東西約１kmをはかる広大な集落遺跡である。1971年以降，65次にわたる調査を東奈良遺跡調査会・茨木市教育委員会・大阪府教育委員会が実施しており，なかでも1973・1974年に出土した銅鐸・銅戈・勾玉の鋳型をはじめとする鋳造関係遺物は著名である。

縄文時代前期の遺物も出土しているが，集落の成立は弥生時代前期と考えられ，環濠や方形周溝墓群を検出している。その後，集落は若干の変動をみながらも古墳時代前期まで存続するが，古墳時代中期～奈良・平安時代にかけての資料は極端に少なくなり，中世には廃絶する。

木器は全般的に遺存状態がよく，これまでに柱根・木棺・丸木舟を含む1,000点以上を検出している。今回収録した弥生時代と古墳時代の木器は農工具・容器・武器・装身具などで，その多くは溝状遺構から出土している。このなかで溝25・溝25b・溝27・溝28は，弥生時代前期の環濠もしくはそれにかかわるものである。また第Ⅰ大形土坑・第Ⅱ大形土坑・ⅡP－191・土坑39は，木器の未成品が集中的に出土した弥生時代中期の土坑で，後二者は住居に隣接していた。

〔木器番号〕 溝25；*04001*　溝25b；*08603*
溝27；*11604, 13005, 14504*　溝28；*12016*
大形土坑－1；*01204*　弥生Ⅰ期包含層；*10908*
第Ⅰ大形土坑；*03906, 04409, 09720*　第Ⅱ大形土坑；*00503*
ⅡP－2；*06001*　ⅡP－191；*06002*
土坑39；*06005*　溝5；*03302*
井戸5；*02902*　G－4区溝Ⅴ；*15409*
弥生Ⅴ期溝；*19109*　溝Ⅴ；*17111*
溝－1；*09422, 15501*　南北溝Ⅱ；*13504*
沼状落ち込み；*17602*　井戸Ⅰ；*15301*
第7号方形周溝墓木棺内；*12007*　D棟木器溜；*03203*
D棟溝14；*08511*　溝10；*09116*
A溝；*00114*　C1溝；*04901, 05001*
溝Ⅱ；*07820*　溝Ⅱ－3；*05801*

〔文　献〕田代克己・奥井哲秀・他『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ』東奈良遺跡調査会 1979年
奥井哲秀・井上直樹・他『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅱ』東奈良遺跡調査会 1981年

4　垂水南遺跡（fig. 239）　たるみみなみ

吹田市垂水町3丁目に所在。1976年6月から30次以上にわたって吹田市教育委員会が調査。神崎川右岸の標高3mの低湿地に立地する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。古墳時代中～後期の竪穴住居・掘立柱建物・溝・矢板を有する水田跡などを検出。弥生土器（中～後期），庄内式土器，布留式土器・須恵器・埴輪・石製模造品，緑釉・灰釉陶器・和銅開珎，瓦器などが出土した。

収録した木器は古墳時代相当層から出土したものであるが，概して土器を伴出せず，詳細な時期を特定できない。収録した田下駄・剣形のほか，曲柄鍬・竪杵・容器・建築部材・矢板等が出土した。

〔木器番号〕第3次調査C－4区木組（堰）；*07511*
第21次調査G－2区第8層　；*07704*
第2次調査C－7区1G3次面；*16101*

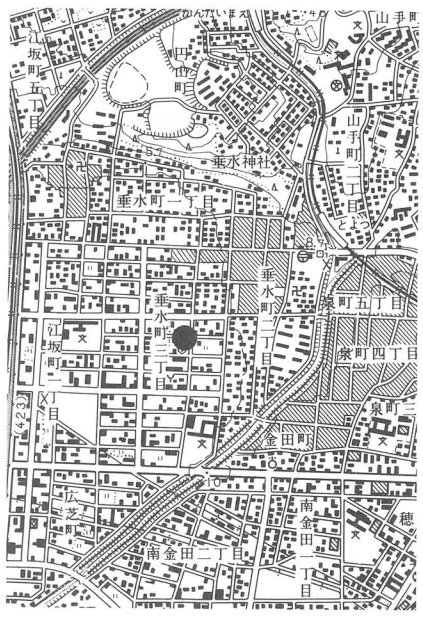


fig. 239　垂水南遺跡木器出土地点
（1:25,000　吹田）

〔文　　献〕藤原学「垂水南遺跡」『吹田市史』第8巻別編，吹田市役所1981年
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』1977年
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報Ⅱ』1978年
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報Ⅲ』1979年
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報Ⅳ』1980年
吹田市教育委員会『昭和56年度埋蔵文化財緊急調査概報』1981年
吹田市教育委員会『昭和58年度埋蔵文化財緊急調査概報』1982年
藤原学・他「垂水南遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14会研究集会資料1983年

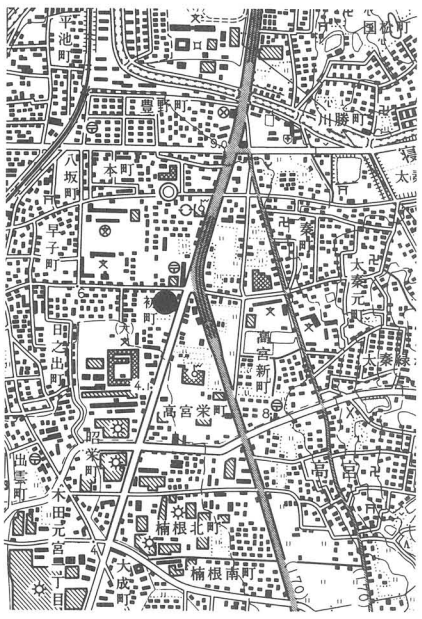


fig. 240　高宮八丁遺跡木器出土地点
(1:25,000　枚方)

5　高宮八丁遺跡（fig. 240）　たかみやはっちょう

寝屋川市初町に所在し，北西の本町にも広がりをもつ。1985年10月～1986年7月にかけて寝屋川市教育委員会が発掘調査を実施した。生駒山系の西側斜面の丘陵端部にあたり，寝屋川左岸に立地。弥生時代前期中段階～中期（畿内第Ⅲ様式）の溝や土坑・落ち込み・貯蔵穴・自然河川，中世の井戸・水路・耕作痕などを検出している。本遺跡の東側丘陵上には，本遺跡と密接な関係にある高地性集落（太秦遺跡）および太秦古墳群がある。

木器はすべて弥生時代前期中葉から中期中葉の時期のもので，鍬，鍬の未成品，鋤，竪杵，弓，矢柄，石斧の柄，高杯・椀・槽等の容器類，杭，紡織具，櫂，刺突具，匙，杓子，編物（網代），櫂，鍑，板状原材が出土している。木器は北東から南西に向けて流れる溝，及び落ち込み，自然河川内から出土しており，収録した木器は溝105・240，および落ち込み214・216から出土したものである。

溝105は幅約3m，深さ0.5mをはかる。溝内から畿内第Ⅰ様式中段階から新段階の土器が出土している。溝240は断面U字形を呈し，幅2～4.5m，深さ0.5mをはかる。この溝底の一部は，幅2～3m，深さ0.5m，長さ約10mにわたって深く掘り込まれ，内部から農具，弓，石斧の柄などの木器や未成品が多量に出土した。貯蔵場的な遺構の可能性もある。木器のほかに，畿内第Ⅰ様式中段階から新段階の土器が出土している。落ち込み214は上層と下層に分かれる。上層は東西1～6m，南北18m，深さ0.7mをはかり，木器・自然木のほかに，畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式の土器および石器類が出土した。下層は東西6m，南北17m，深さ0.6mをはかり，畿内第Ⅰ様式中段階から新段階の土器および石器類が出土した。落ち込み216は東西5m，南北17m，深さ0.5mで，畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式の土器類とともに，弓・鋤をはじめとする木器が多く出土している。

〔木器番号〕溝105；*00605*　　溝240；*10210*
落ち込み214；*01611, 02412*　　落ち込み216；*01001*

〔文　　献〕塩山則之『高宮八丁遺跡－寝屋川郵便局庁舎建設に伴う発掘調査概要報告－』寝屋川市文化財資料10，寝屋川市教育委員会1987年
塩山則之・露口真弘『高宮八丁遺跡－木器編－』寝屋川市教育委員会1989年

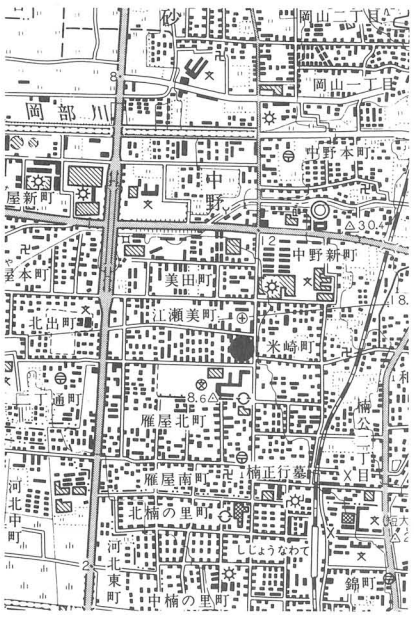


fig. 241　雁屋遺跡木器出土地点
(1:25,000　生駒山)

6　雁屋遺跡（fig. 241）　かりや

四条畷市雁屋北町・江瀬美町に所在。生駒山系の西側斜面から流出する江瀬美川の両岸に立地する。江瀬美川は古代河内潟に注いでいた。1983年5月，1985年10月～1986年3月に四条

啜市教育委員会が発掘調査を実施し，弥生時代前期の溝，中期の方形周溝墓・旧河川，後期の竪穴住居・周溝墓・大溝・土坑などを検出した。1985年の調査区内では，4基の方形周溝墓から21基の木棺墓と1基の土器棺墓を検出。木棺はコウヤマキ，ヒノキ，カヤを使用し，なかでもコウヤマキの木棺は厚さ10～13cmと遺存状態が良好で，木棺の組合せ方法や加工状態が非常によくわかる。

収録した木器は，1号方形周溝墓と2号方形周溝墓とが共有する溝から出土した。蓋と身が完存する四脚合子と柄を装着したままの直柄平鍬で，畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の土器と共伴。このうち壷3点，把手付鉢1点，水差形土器1点および四脚合子には水銀朱を施していた。そのほかに壷・甕・高杯，磨製石斧などが共伴した。

〔木器番号〕*01606, 14801, 14802*

〔文　　献〕野島稔『雁屋遺跡』四条啜市教育委員会1987年

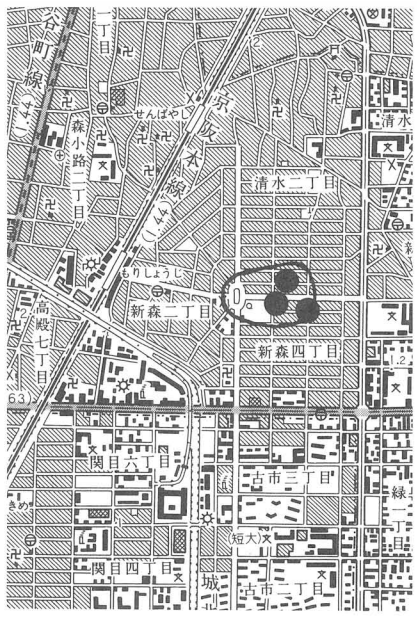


fig. 242　森小路遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪東北部)

7　森小路遺跡 (fig. 242)　もりしょうじ

大阪市旭区新森に所在する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡。淀川左岸の自然堤防上に立地し，標高1.4m前後をはかる。1931年の土地区画整理事業で発見されたが，1974年以降，大阪市教育委員会や(財)大阪市文化財協会が断続的に立会・発掘調査を実施し，遺跡の範囲や時期を明らかにしつつある。弥生時代の遺構には，ピット群・土坑群・溝・方形周溝墓があるが，住居跡は未確認である。いずれも中期に属するが，前期の土器も少量出土している。古墳時代では5世紀代の遺物が出土しており，わずかに飛鳥・奈良時代の土器も出土する。収録した木器は，弥生時代中期の土坑や溝から出土したものである。

〔木器番号〕7次調査　土坑ＳＫ09；*01518, 07105*

ＭＳ80－15　溝状遺構；*08516*　　ＭＳ81－6　ＳＸ01；*08711*

ＭＳ84－25　土坑ＳＫ01；*13120*

〔文　　献〕島田貞彦・有光教一「大阪市東成区森小路発見の弥生式遺跡に就いて」『考古学雑誌』第21巻第10号，日本考古学会1931年

大阪市立博物館・(財)大阪市文化財協会『発掘された大阪－(財)大阪市文化財協会設立5周年記念－』1984年

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会「森小路遺跡第7次調査」『昭和54年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1981年

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会「森小路遺跡ＭＳ80－15次発掘調査概報」『昭和55年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1982年

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会「森小路遺跡ＭＳ81－6次調査」『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会「森小路遺跡ＭＳ84－25次調査」『昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1984年

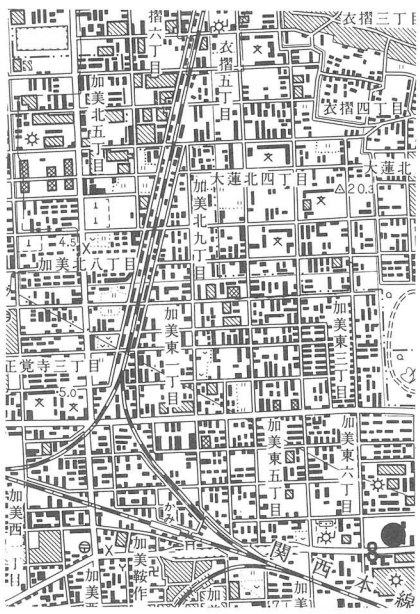


fig. 243　加美遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪東南部)

8　加美遺跡 (fig. 243)　かみ

大阪市平野区加美東1丁目～7丁目に所在する。河内平野南部を北流する旧大和川の支流である長瀬川および平野川が形成した標高3.5m前後の沖積低地に立地する。その範囲は東西900m，南北1，200mにおよび，東に接する八尾市の久宝寺遺跡とは一連の遺跡と考えられて

いる。1978年の加美東小学校建設工事に伴い発掘調査が実施され，1984年以降，大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会が調査を継続している。

収録した木器は，1984・1985年の調査で出土したもの。1984年に加美東6丁目で行なったKM84－1次調査では，上下2層において弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけての集落跡や墳墓群を検出した。上層の弥生時代後期末～古墳時代前期の井戸・土坑・大溝では，竪杵・鋤・鍬・横槌・木錘などの生活用具をはじめ，加工木・流木などが出土した。下層で検出した弥生時代中期後半（Ⅳ基）のＹ１号墳丘墓は，南北に長い長方形を呈し，長さは墳頂部で南北22m，東西11m，高さは周溝の底から約3ｍをはかる。周溝内から壷・台付無頸壷・甕・鉢・高杯・水差し・台付水差し・器台などの弥生土器（Ⅳ期）とともに，多数の木器（建築部材・薄板・高杯・四脚合子・合子蓋・刀形・鋤・鍬・泥除・用途不明品・加工木・大小のコウヤマキのチップ）や石器（石鏃・扁平片刃石斧・石庖丁・砥石）が一括出土した。土器・木器の多くには穿孔や打ち欠きがみられるほか，木器のなかには焼けたものもある。土器や木製容器類は葬送儀礼に，鋤・鍬類は墳墓の造成に使われたものかもしれない。これらは墳墓の最終の埋葬が終った後に投棄されたものであろう。

〔木器番号〕ＫＭ84－1　井戸；*01803, 08902, 15103*
ＫＭ84－1　大溝；*06503, 09213, 17110*
ＫＭ84－1　Ｙ１号墓周溝；*03815, 13108, 14605, 14805, 16109, 19505*
ＫＭ85－6　井戸ＳＥ01；*09311*

〔文　　献〕大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『加美遺跡現地説明会資料－大阪市平野区加美東6丁目所在－』1985年
永島暉臣慎・田中清美「大阪市加美遺跡の弥生時代中期墳丘墓」『月刊文化財』№266，文化庁文化財保護部1985年

9　長原遺跡（fig. 244）　ながはら

大阪市平野区長吉出戸・六反・長原東・長原・長原西・川辺に所在。北部の長吉出戸付近は城山遺跡とも呼ばれる。河内台地の東縁に立地する旧石器時代から中・近世に至る複合遺跡。集落・墳墓・水田をはじめとする各種の遺構が検出されている。1973年の(財)大阪文化財センターによる試掘調査で発見され，地下鉄谷町線の延長工事や近畿自動車道建設工事に伴い，長原遺跡調査会や(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。以後，大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会が調査を継続している。収録した木器は，1976年～1978年に(財)大阪文化財センターが行なった発掘調査，および1983年～1986年に大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会か行なった発掘調査で出土した。

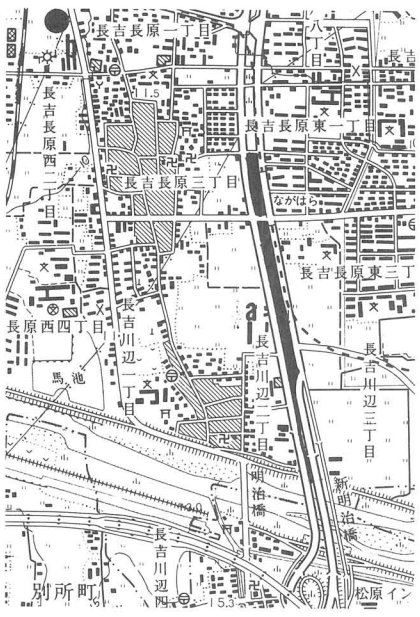


fig. 244　長原遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪東南部)

〔文　　献〕永島暉臣慎・他『長原遺跡発掘調査報告書』長原遺跡調査会・(財)大阪市文化財協会1982年（改訂版）
永島暉臣慎・他『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(財)大阪市文化財協会1982年
永島暉臣慎・他『長原遺跡発掘調査報告書Ⅲ』(財)大阪市文化財協会1983年
大阪市立博物館・(財)大阪市文化財協会『発掘された大阪－(財)大阪市文化財協会設立5周年記念－』1984年
藤沢真依・他『長原－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』(財)大阪文化財センター1978年

辻武・他『長原（その２）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』(財)大阪文化財センター 1985 年

a　長原遺跡　(財)大阪文化センター　調査

近畿自動車道の建設に伴い，(財)大阪文化財センターが 1976 年 7 月～1978 年 5 月に発掘調査を実施。旧石器時代から近世に至る遺構や遺物を検出した。主体となるのは，古墳時代中期の古墳群とそれに続く水田跡，および平安時代中期～鎌倉時代の集落跡である。古墳群は推定径 55m（東向きの前方後円墳とすれば，全長 100m 以上）の塚ノ本古墳を中心に分布する数十基の小型方墳群で，各種埴輪や須恵器・土師器が出土している。木器は塚ノ本古墳周濠内から，5 世紀前半代の円筒埴輪などとともに出土した。

〔木器番号〕*20018*

〔文　　献〕藤沢真依・他『長原－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』(財)大阪文化財センター 1978 年

b　長原遺跡　　大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会　調査

収録した木器は縄文時代晩期および古墳時代後期のもの。長原遺跡における縄文時代晩期の遺構や遺物は，長吉川辺 3 丁目付近に集中している。木器が出土したのは，ＮＧ82－41 次調査で検出した自然河道（Ｉ区河川)。幅 5 ～ 6 m，深さ約 2 mで，長原式土器・土偶・種子類などが共伴した。

古墳時代後期の木器は，長吉長原西など遺跡の西側を占める集落跡に伴うものが多い。ＮＧ84－25 次調査で検出した井戸は，掘立柱建物群に伴う大規模なもの。ＮＧ86－41 次調査の井戸は，長径 2.9m，短径 2.0m，深さ 3 mの楕円形の素掘りのもの。馬歯・須恵器を共伴。刀形・盤が出土したのも，ほぼ同時期の溝で，鎌柄は遺跡北部の自然流路から出土している。

〔木器番号〕ＮＧ82－41Ｉ区河川；*00602, 11014*

ＮＧ84－25　井戸；*19006, 19101*

ＮＧ86－41　井戸；*01009, 09007, 09008, 09426, 17112, 17117*

ＮＧ85－16　溝ＳＤ704；*13314, 16220*

ＤＤ85－1　Ｖ区自然流路；*07911*

〔文　　献〕大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『長原遺跡（ＮＧ82－41）現地説明会資料』1983 年

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査（ＮＧ84－25）現地説明会資料』1985 年

田中清美・趙哲済「長原遺跡（長吉川辺 3 丁目地区）出土の縄文時代の遺構・遺物について」『葦火』第 3 号，(財)大阪市文化財協会 1986 年

藤田幸夫「長原遺跡から出土した古墳時代の木製品について」『葦火』第 6 号，(財)大阪市文化財協会 1987年

10　瓜破遺跡 (fig. 245)　うりわり

大阪市平野区瓜破に所在する旧石器時代から室町時代に至る複合遺跡。東方は長原遺跡，西北方は瓜破北遺跡に接する。羽曳野丘陵から北方に派生した河内台地の末端に立地。1940 年

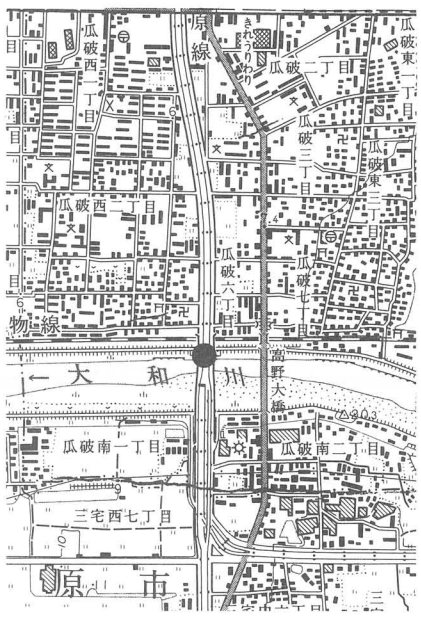


fig. 245　瓜破遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪東南部)

に山本博が現在の大和川河床に散布する貨泉など弥生時代の遺物を報告。以後，今里幾次・日本考古学協会などが調査を実施し，1976年以降は大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会(難波宮址顕彰会）が発掘調査を継続している。

収録した木器は，1953年に日本考古学協会が実施した現大和川の右岸河床部分の発掘調査時に出土したもの。「2号竪穴」と命名された溝状遺構から，畿内第Ⅰ様式の土器や石器とともに出土している。なお，斧直柄や泥除の未成品も共伴しているらしい。

〔木器番号〕*01701, 02807*

〔文　　献〕杉原荘介・神沢勇一「大阪府瓜破遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1961年

永島暉臣慎・他『瓜破遺跡』(財)大阪市文化財協会 1983年

大阪市立博物館・(財)大阪市文化財協会『発掘された大阪－(財)大阪市文化財協会設立5周年記念－』1984年

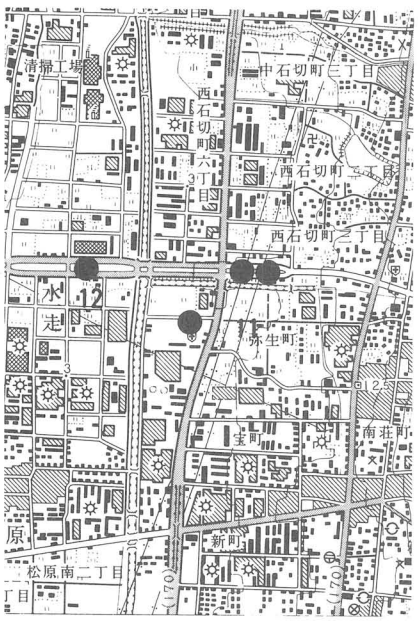


fig. 246　鬼虎川・鬼虎川（水走地区）遺跡木器出土地点（1:25,000　生駒山）

11　鬼虎川遺跡（fig. 246）　きとらがわ

東大阪市弥生町・西石切町5丁目に所在する弥生時代前期末～中期末（弥生Ⅰ期新段階～Ⅳ期）の集落遺跡。1975年2月から1989年3月までに，30次にわたる発掘調査を東大阪市遺跡保護調査会・国道308号線内遺跡調査会・(財)東大阪市文化財協会・大阪府教育委員会が実施している。生駒山西麓の扇状地末端から沖積平野にかけて位置し，東西約0.7km，南北約0.9kmの範囲と推定される。かつては河内潟湖の東南にひろがる湿地と山麓からのびる舌状微高地とに立地していたが，現在は水田下3～4mに埋れている。弥生Ⅰ（新）～Ⅱ期の溝・土坑や弥生Ⅱ～Ⅳ期の掘立柱建物・井戸・溝・土坑・壷棺墓などを微高地とその縁辺で，小規模な貝塚，水田に伴う杭列，南東から北西に蛇行して流れる自然流路などを微高地周辺の低地で検出している。また，建物群の北東約300mには方形周溝墓・土坑墓などから成る墓域があり，墓域と建物群とのあいだでは柵列を伴う防御用大溝を検出している。微高地とその周辺から多量の弥生土器・木器・石器が出土。鉄器（鋳鉄脱炭鋼の鑿・鏃）・骨角牙器・動植物遺体なども良好な状態で遺存する。数種類の青銅器鋳型（鐸・釧・鐓）が出土したことから，青銅器鋳造センターとしての性格も示唆される。

収録した木器は，4・5・7・12・19・29次調査で出土した。その大半は微高地縁辺に堆積した遺物包含層（基本層序の第13Ｕａ層～第15Ｌ層）と貝塚層（セタシジミを主体とする。7次調査区北部の低地に幅3～5m，東西に40m以上，層厚10～20cmで形成。一部は枝分れして微高地縁辺に凹入），一部は微高地上の土坑・溝から出土。水田跡がひろがる低地部では，微高地から離れるにつれ木器出土数は減少する。層位別にみると第13Ｕａ層出土品が多数を占めるが，これは下面を浸蝕しながら堆積が進行したため，古い時期の遺物が混入した結果である。

7次調査第15層下面の土坑3・4は木器未成品貯蔵穴。ともに円形で直径1.5m，深さ0.8m。土坑3では鍬身・竪杵・太型蛤刃石斧柄などの未成品が，弥生Ⅰ（新）～Ⅱ期の土器と共伴。土坑4では鍬身・舟形の未成品が弥生Ⅰ（新）期の高杯形土器完形品と共伴。同じ7次調査区の溝1（幅3m，深さ0.7mで北東から南西にはしる）では鍬・横槌・高杯・シカの線刻のある用途不明品など，第15Ｕ・Ｌ層からは鍬身・柱状片刃石斧などの斧柄・高杯・儀杖・背負子などが弥生Ⅰ（新）～Ⅱ期の土器と共伴した。4次調査区の溝3（鍬身出土）も同時期のも

の。

第14L層下面では，7次調査区の土坑5からドングリの入った弥生Ⅱ期の鉢とともに箕が出土。同じ7次調査区の溝4（鍬身）・溝6（建築材多数と櫂），12次調査区の溝9（一木鋤・鍬身）・溝15（黒漆塗り組合せ縦杓子），5次調査区の溝4（鍬身）などでも弥生Ⅱ期の土器との共伴を確認している。12次調査区の溝9は幅3.6m，深さ1.5m，溝15は幅3m，深さ2.1mで，ともに南東から北西にはしるV字溝。溝15は29次調査で矢が完形で出土したSD－20に続く可能性が大きい。12次調査区の溝11は19次調査区の溝16に続き，環濠の一部と推定される。幅5m・深さ1.2mの東西の大溝で，19次調査区では南肩部に柵列を伴う。大溝内から組合せ鋤・横鍬・橇・小型臼・梯子・高杯・二脚槽・弓・箍・編み籠などが，弥生Ⅱ期の土器とともに出土した。第14L層および第14L相当層からは，弥生Ⅱ期の土器と共伴して鍬身・小型臼・田下駄・アカ取り・鏝・太型蛤刃石斧柄・高杯・合子・蓋・縦杓子・盾・弓・箍・櫂・琴などが出土した。

第14U層下面では，7次調査区の土坑10よりモミの柾目材を割取った箍の未成品多数，12次調査区の溝16（溝15と同規模で5m東側を平行する）より鍬・鋤身などが弥生Ⅲ期の土器と共伴。第14U層および第14U相当層からは，弥生Ⅱ～Ⅲ期の土器とともに矢・石戈・弓・盾・鍬・曲柄鍬身・一木鋤・組合せ鋤・掘り棒・小型臼・田下駄・橇・鏝・斧膝柄・高杯・台付椀・刀形・箍・櫂などが出土した。

第13Uc層下面では，7次調査区の溝8から紡輪を装着した紡錘，第13Uc層から小型臼・田下駄・高杯・鞘・打製石剣などが弥生Ⅱ～Ⅳ期の土器と共伴。第13Ua層では，7次調査区の土坑19から盾と三子撚りの紐が，焼けたアワ粒多数とともに出土。第13Ua層からは弥生Ⅱ～Ⅳ期の土器と共伴して，鍬・鍬膝柄・横鍬・一木鋤・組合せ鋤・竪杵・大型臼・小型臼・穂摘具・アカ取り・橇・鏝・斧膝柄・横槌・腰掛・高杯・槽・合子・蓋・横杓子・鞘・弓・木鏃・盾・箍・網枠など多量の木器と筌が出土した。

貝塚層からは弥生Ⅰ（新）～Ⅲ期の土器や勾玉・打製石剣・磨製石剣・鉄鏃・銅鐓鋳型などと，鍬身・鏝・自在鉤・高杯・合子・蓋・縦杓子・弓・箍などの木器が共伴。木器細片も多数出土した。以上の他に，基本層序が未確立であったため，時期の細分ができない4次・5次調査包含層出土品として，弥生Ⅰ（新）～Ⅳ期の鍬・鍬身・曲柄鍬身・鍬膝柄・組合せ鋤・田下駄・橇・竪杵・横槌・アカ取り・弓・木鏃・箍・高杯・六脚合子・蓋・網枠・戈形・剣形・刀形などがあり，また15次調査区出土の箍（弥生Ⅱ～Ⅳ期）に装着用樺巻の残る例がある。

〔木器番号〕第15層と下面遺構；*00107, 00115, 00218, 00607, 01306, 01308, 01405, 01508, 02505, 02608, 02704, 02705, 03002, 03510, 07008, 08712, 09101, 09814, 10111, 12102, 12601, 13116, 13221, 16703, 18202, 18625, 19809*

第14L層と下面遺構；*00701, 00707, 01302, 01417, 01419, 01509, 01604, 01906, 02702, 03507, 06106, 07002, 07411, 07602, 08006, 08007, 08101, 08507, 09804, 10201, 10403, 11502, 11601, 12602, 12703, 12713, 13212, 15604, 16217, 17302, 18705, 18708, 19519, 19601, 19612, 19806,*

20008

第14Ｕ層と下面遺構；*00216, 01408, 01416, 01515, 01517, 01807, 02402, 02406, 04305, 05908, 06107, 07406, 08010, 08204, 08303, 08508, 08513, 09011, 09014, 09016, 09119, 10109, 10202, 10801, 10802, 10803, 11108, 11121, 11125, 11313, 11501, 11525, 12609, 12804, 12909, 12920, 13111, 16222, 16223, 18614, 18622, 18807, 18917, 20114, 20128*

第13Ｌ層と下面遺構；*03905, 11516, 12314*

第13Ｕｃ層と下面遺構；*07402, 07403, 08505, 09512, 11315, 14603*

第13Ｕａ層と下面遺構；*00214, 01206, 01514, 01908, 02409, 03602, 05305, 06102, 06401, 07801, 07802, 08003, 08004, 08008, 08013, 08102, 08103, 08104, 08105, 08106, 08205, 08301, 08304, 08305, 08402, 08702, 08703, 08705, 08706, 09216, 09704, 10707, 10708, 11314, 11703, 11704, 12409, 12817, 13112, 13121, 14503, 14706, 14803, 14807, 14809, 14906, 17707, 18520, 18612, 18715, 19501, 19502, 19503, 19609, 19611, 19615, 19617, 19719*

貝塚層；*02408, 08009, 08011, 11523, 12411, 12706, 12711, 13203, 14502, 17314, 18515, 19810*

4次・5次遺物包含層；*00215, 01406, 01411, 01503, 01504, 01506, 02308, 02311, 02607, 02707, 03003, 03508, 04415, 05309, 05405, 05806, 05903, 05904, 07005, 07504, 08202, 08607, 09203, 10405, 10412, 10704, 10805, 10809, 10817, 10818, 10830, 11013, 11112, 11117, 11517, 11520, 13214, 13216, 13218, 13806, 14602, 16006, 16012, 16216, 18619, 19605, 20115*

〔文　　献〕下村晴文・才原金弘・那須孝悌・樽野博幸『鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ』東大阪市遺跡保護調査会 1980 年

芋本隆裕・松田順一郎・那須孝悌・樽野博幸・他『鬼虎川遺跡第 7 次発掘調査報告 3 －遺構編－』(財)東大阪市文化財協会 1984 年

芋本隆裕・他『鬼虎川の木質遺物－第 7 次発掘調査報告書　第 4 冊－』(財)東大阪市文化財協会 1987 年

上野俊明・才原金弘・他『鬼虎川遺跡第 12 次発掘調査報告』(財)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1987 年

才原金弘「鬼虎川遺跡第 12 次調査出土の木製品樹種鑑定結果」『東大阪市文化財

協会ニュース』3-3,（財）東大阪市文化財協会 1988 年
福永信雄・他『鬼虎川遺跡第 19 次発掘調査報告』（財）東大阪市教育委員会・東大阪市教育委員会 1988 年
下村晴文・他『鬼虎川遺跡第 29・30 次発掘調査報告』（財）東大阪文化財協会・東大阪市教育委員会 1988 年
才原金弘・他『鬼虎川遺跡発掘調査概要Ⅰ　遺物編　木製品』（財）東大阪市文化財協会 1988 年
才原金弘・中村友博・他『鬼虎川遺跡第 1 ～ 3 次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会 1990 年

12　鬼虎川遺跡（水走地区）（fig. 246）　きとらがわ（みずはい）

東大阪市水走に所在。国道 308 号線内の調査において，縄文時代末～弥生時代初頭（長原式～弥生Ⅰ期中段階）の貝塚と弥生Ⅰ期中段階を主体とし新段階を混える遺物包含層を検出した。その範囲を従来の水走遺跡より区別して鬼虎川遺跡（水走地区）と呼称する。1984 年 5 月～1986 年 3 月に 27 次・28 次調査（従来水走 3 次・ 8 次と呼称）を(財)東大阪市文化財協会が実施。南東から北西にのびる自然の窪地の底で貝塚，その上層で弥生Ⅰ期の包含層を検出した。これらを覆って窪地に埋積する土層には弥生Ⅰ～Ⅲ期の遺物を含み，その上部を鬼虎川 5 次・7 次調査区からのびる弥生Ⅳ期の自然流路が侵食している。各層下面および周辺の微高地において，建物・井戸などの集落遺構は今のところ検出していない。

貝塚および弥生Ⅰ期の包含層は，浅い水辺への投棄物が堆積したものとみられる。おそらく河内潟の水域が満潮時に凹入していたのであろう。セタシジミを主体としてマガキなどの海棲貝類を混えた貝塚の構成，層厚 20cm ほどの規模，窪地への選地などは鬼虎川 7 次調査区の貝塚に類似する。貝塚の形成時期は 7 次調査区の貝塚より古く，長原式の時代にはじまり弥生Ⅰ期中段階には終了している。ただし，長原式と弥生Ⅰ期中段階とは時間を共有する可能性がある。

貝塚からは牙製・貝製の装身具・石錘などと共伴して太型蛤刃石斧柄，弥生Ⅰ期の包含層から石庖丁・鑿状石斧などと共伴して鍬身・鋤身・弓・網枠・木葉文を線刻した用途不明品・鮎の立簀の一部とみられる組合せ材などの木器が出土している。また，窪地を埋積する土層からは漆塗り弓が出土した。

〔木器番号〕貝塚；*00703*　　包含層；*19801, 19802*

13　新家遺跡（fig. 247）　しんけ

東大阪市荒本西 2 丁目・ 3 丁目ほかに所在する縄文時代後・晩期から近世にかけての複合遺跡。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い，（財）大阪文化財センターが 1979 年から 1983 年にかけて， 4 次にわたり発掘調査を実施した。遺跡は河内潟・河内湖の形成を考える上で重要な位置にある。すなわち，縄文時代晩期（滋賀里Ⅲ式）の包含層から淡水性のセタシジミ，縄文時代後・晩期よりも古い層から海水性のエドザクラが出土しており，海水が入り込んだ内湾から潟湖化していく様がうかがえる。

収録した木器は，弥生前期面で検出した土坑 1 ・自然河川 2，弥生Ⅰ～Ⅱ期の包含層，弥生Ⅴ期の包含層，弥生末～古墳初期の包含層から出土した。弥生前期面では柱列を検出しており，

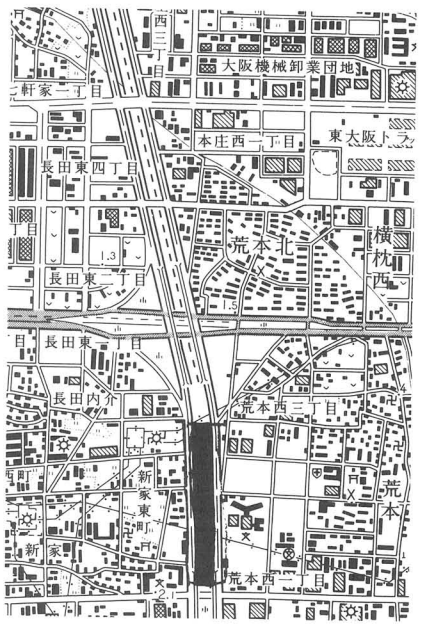


fig. 247　新家遺跡木器出土地点
（1:25,000　大阪東北部）

何らかの構造物が推定される。木器が大量に出土した弥生Ⅴ期の包含層は，青灰色系の粘土層で，河内湖の埋積過程で堆積したものと考えられる。農具・漁撈具・武器・容器・祭祀具・建築部材など，多種の木器が出土している。弥生末～古墳時代初頭の包含層は，流水堆積により形成された砂層で，庄内式甕・酒津式甕が共伴する。農具・漁撈具・容器などの木器が出土。

〔木器番号〕　土坑１；*12410*　自然河川２；*18916*

弥生Ⅰ～Ⅱ期包含層；*10513*

弥生Ⅴ期包含層；*04104, 08401, 08811, 09002, 12205, 13315, 13402, 13505, 14206, 15002, 15804, 16705, 16803, 17109, 17703, 18410, 18508, 18607, 18608, 18609, 18806, 18808, 19301, 19315, 19507, 19512, 19604, 19701, 19702, 19704, 19907*

弥生末～古墳初期包含層；*03504, 15001, 18805*

〔文　　献〕中西靖人・森屋美佐子・他『新家（その１）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987 年

中西靖人・村上年生・他『新家（その２）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984 年

中西靖人・国乗和雄・他『新家（その３）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984 年

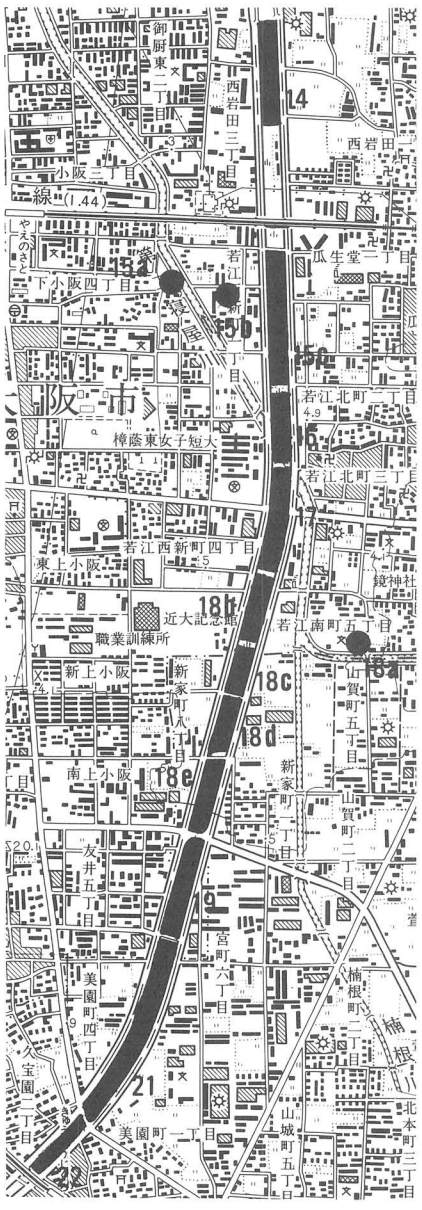


fig. 248　西岩田・瓜生堂・巨摩・若江北・山賀・友井東・美園・佐堂遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪東南部)

14　西岩田遺跡 (fig. 248)　にしいわた

東大阪市西岩田３丁目付近に所在する。1971 年の中央南幹線遺跡調査会による発掘調査に際し，庄内式土器と酒津式土器とが共伴したことで学史上著名になる。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い，(財)大阪文化財センターが 1979 年から 1981 年にかけて発掘調査を実施。旧河内湖南岸の低湿地に立地し，新家遺跡に南接する。下層において縄文時代後・晩期の遺物が出土しており，縄文時代晩期（滋賀里Ⅲ式）の包含層ではセタシジミが共伴している。

図版に収録した木器が出土したのは，弥生Ⅴ期最終末の包含層と弥生末～古墳時代初頭の溝１・河川・包含層などである。弥生Ⅴ期最終末の包含層は流水堆積により形成された砂層で，畿内第Ⅴ様式の甕とともに工具・農具・漁撈具・容器・祭祀具など多量の木器が出土。庄内式土器に対応する遺構面から切り込んだ溝１は幅 2.5m，深さ 0.6m で，平面隅丸方形状をなす。庄内式甕・酒津式甕とともに，小型の斧柄・網枠などの木器が出土している。河川Ⅰは幅約 50m，深さ 2.5m で，東から西へ流れる。川床では足跡や鋤による掘削痕を検出。庄内式・布留式土器とともに曲柄鍬・櫂・部材などの木器が出土した。

〔木器番号〕弥生Ⅴ期包含層；*00203, 00204, 00208, 00304, 02101, 03801, 04303, 04505, 04903, 05111, 06302, 07910, 08812, 09805, 09811, 09813, 09903, 10203, 10207, 10208, 10406, 10407, 10507, 11701,*

15503, 16805, 18001, 18503, 18606, 19304, 19308, 19313, 19513, 19514, 19714, 19804, 19909, 20011

Aトレンチ溝1；*10611, 12103, 16412, 19708, 20116*

Bトレンチ河川Ⅰ；*10204, 18306*

弥生末～古墳初期包含層；*09322, 16104, 18105, 18812*

〔文　献〕荻田昭次・藤井直正・他『中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡の調査』中央南幹線内遺跡調査会 1971 年

荻田昭次・北野保・田代克巳・他『西岩田遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 年

村上年生・石神幸子・他『西岩田－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983 年

15　瓜生堂遺跡（fig. 248）　うりゅうどう

東大阪市瓜生堂3丁目および若江西新町1丁目・2丁目に所在。南に隣接する巨摩遺跡を含めて，旧河内潟湖の南に立地する弥生時代の拠点的集落と考えられる。1965 年 2 月から 1989 年 3 月に至るまでに，大阪府教育委員会・東大阪市教育委員会・中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会（瓜生堂遺跡調査会）・(財)大阪文化財センター・河内歴史研究グループなどが，合せて37次に及ぶ発掘調査を実施している。収録した木器は，大阪府教育委員会・瓜生堂遺跡調査会・(財)大阪文化財センターの調査時に出土したもの。

〔文　献〕荻田昭次編『瓜生堂遺跡資料』1966 年

荻田昭次・藤井直正・他『瓜生堂遺跡』河内市教育委員会・瓜生堂遺跡調査グループ 1966 年

田代克己・他『瓜生堂遺跡の調査』河内歴史研究グループ 1967 年

大阪府教育委員会『東大阪市瓜生堂遺跡の調査』1967 年

花園高校地歴部「瓜生堂遺跡」『河内古代遺跡の研究』1970 年

田代克己・藤井直正・他『瓜生堂遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 年

田代克己・藤井直正・中西靖人・大西真由美・他『瓜生堂遺跡　資料編』瓜生堂遺跡調査会 1972 年

田代克己・藤井直正・中西靖人・他『瓜生堂遺跡Ⅱ』瓜生堂遺跡調査会 1973 年

田代克己・井藤徹・他『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会 1981 年

堀江門也・中西靖人・他『瓜生堂－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980 年

堀江門也・井藤暁子・他『巨摩・瓜生堂－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1981 年

a　瓜生堂遺跡　大阪府教育委員会・他　調査

1966年11月～1967年1月に，楠根川（第2寝屋川）改修工事に伴い，大阪府教育委員会などが発掘調査を実施。弥生時代前期から中期の溝・柱根・木棺墓・甕棺墓・貝塚などを検出した。木器が出土したのは，C地点トレンチで検出した溝。幅2.0m，深さ0.5mで，ほぼ南北に走る。畿内第Ⅰ様式を主体とし第Ⅱ様式を若干含む土器や石器・骨角器，植物・動物遺体とともに，鍬・竪杵・琴・高杯未成品・櫛などの木器が出土した。

〔木器番号〕*15404, 15904, 19402*

〔文　　献〕大阪府教育委員会『東大阪市瓜生堂遺跡の調査』1967年
花園高校地歴部「瓜生堂遺跡」『河内古代遺跡の研究』1970年

b　瓜生堂遺跡　瓜生堂遺跡調査会　調査

1971年2月～3月に中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会が実施した試掘調査を受けて，瓜生堂遺跡調査会が1971年12月～1972年に行なった下水管渠築造地（瓜生堂遺跡の地区割では3O～P区）の調査，1978年8月～1979年3月に行なった小阪ポンプ場拡張地（同じく5C～D区）およびマンション建設予定地（同じく4I区）の調査などで木器が出土している。検出した遺構には，弥生時代中期を主体とする方形周溝墓群や掘立柱建物群などがあり，木器が出土したのは井戸・溝・ピットおよび各期の遺物包含層である。

5C区の井戸SE02・SE04・溝SD09，5D区の溝，3O区の溝SD26，3P区の溝，4I区のピットSP165・溝SD124・SD134・SD136・SD138は，弥生Ⅲ～Ⅳ期の土器を共伴。井戸SE02は径1.8m，深さ0.8m，SE04は径2.0m，深さ0.8mの素掘りの円形井戸。井戸内の炭化物・灰混り埋土から，直柄又鍬身・組合せ鋤身・アカ取り（SE02）・曲柄又鍬身（SE04）などが出土。SE04と同様の曲柄又鍬身は，近くの木器溜SP24からも3点出土している（fig. 249)。溝SD09は幅4.6m，深さ1.0mで，南から北へ流れる。直柄鍬身が出土。5D区の溝は幅3.3m，深さ0.6mで，合子蓋が出土。溝SD26は肩の一部のみを検出。直柄鍬身と蔓製品が出土。3P区の溝は幅1.3m，深さ0.15mで，北西に流れる。一木鋤が出土。ピットSP165では，組合せ鋤身が出土。溝SD124は幅0.3～1.0m，深さ0.15mで，用途不明品が出土。SD134は幅2.0m，深さ0.6mで，盾が出土。田下駄07401はこの溝上部の包含層から出土し，この溝の遺物かもしれない。溝SD136は幅1.4m，深さ0.5mで，鋤身・鋤柄・高杯・刻みのある用途不明品が出土。溝SD138の木器は収録していないが，盾・鋤などが出土している。

このほか，3P区の大型ピット1では，斧直柄が弥生Ⅱ～Ⅳ期の土器と共伴。弥生Ⅰ期新段階を主体としⅡ期を混えた包含層から一木鋤・鍬・竪杵・横杓子・三脚盤など，弥生Ⅱ～Ⅳ期の包含層から斧直柄未成品・又鍬身・横鍬・腰掛など，弥生Ⅲ～Ⅳ期の包含層から鍬・組合せ鋤身・田下駄・橇・高杯・四脚合子などが出土している。

〔木器番号〕井戸SE02；*02314, 05505, 05702, 10409*　井戸SE04；*04403*
溝SD09；*01413*　5D区溝；*14806*
溝SD26；*20124*　3O区溝；*01513*
3P区溝；*06403*　ピットSP165；*05503*
溝SD124；*19618*　溝SD134；*11705*
溝SD136；*13219, 19716*　大型ピット1；*01005*

弥生Ⅰ期包含層；*01609, 06202, 12504, 14404*

弥生Ⅱ～Ⅳ期包含層；*00807, 02401, 03506, 17706*

弥生Ⅲ～Ⅳ期包含層；*01510, 01516, 03603, 05605, 05906, 07401, 07404, 07405, 08201, 13119, 13208, 14808, 19616, 20112*

〔文　　献〕田代克己・藤井直正・他『瓜生堂遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971 年

田代克己・藤井直正・中西靖人・大西真由美・他『瓜生堂遺跡　資料編』瓜生堂遺跡調査会 1972 年

田代克己・井藤徹・他『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会 1981 年

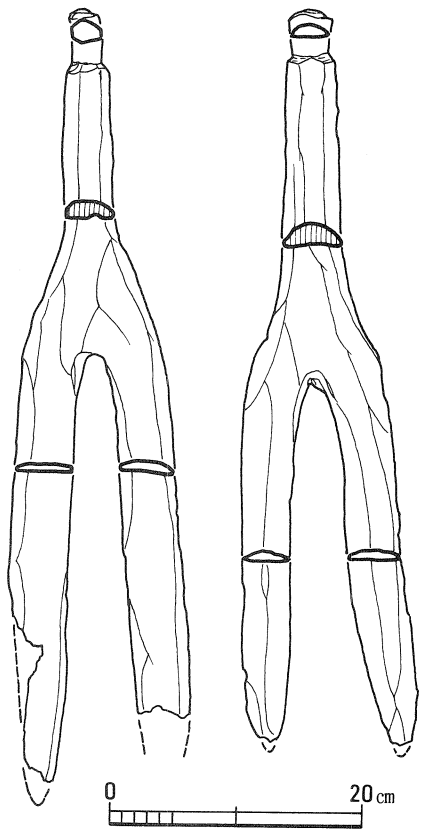


fig. 249　瓜生堂遺跡 SP24 出土
曲柄又鍬身（弥生Ⅳ期）

c　瓜生堂遺跡　(財)大阪文化財センター　調査

近畿自動車道天理～吹田線の建設工事に伴い，(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。道路予定地に沿って，北からA～Hのトレンチを設定した。なお，ほぼ平行して調査を進めた巨摩遺跡は，瓜生堂遺跡の南端をも含むが，この成果は『巨摩・瓜生堂』として別途報告した。木器は弥生時代中期を主体とする各種の遺構や包含層から出土している。

A地区の土坑 3 ・263，溝 15，第 1・2 号方形周溝墓間の溝，B地区の土坑 41・43・125・270，溝 19・29・31，第 9 号方形周溝墓盛土，C地区の溝 78，第 11 号方形周溝墓西裾の土坑 2，D地区の第21号方形周溝墓に伴う第 1 号土坑，第 21 号方形周溝墓の周溝，E地区の溝 115 は，弥生時代中期の遺構面で検出し，主に弥生Ⅲ～Ⅳ期の土器を共伴。土坑 3 は長径 1.3m，短径 1.2m で，竪杵が出土。土坑 263 は第 4 号方形周溝墓北裾にあり，長さ 1.6m，幅 0.75m，深さ 0.2m の隅丸方形を呈する。橇が出土した。溝 15 は幅 0.3m，深さ 0.2m で，横杓子が出土。第 1・2 号方形周溝墓間の溝は幅 3.5m，深さ 0.7m。A地区は 4 基の方形周溝墓があり，その周溝から一木鋤・組合せ鋤が計 6 本出土している。土坑41は径 1.0m の不整円形を呈し，鍬・又鍬が出土。土坑43は長さ 3 m以上で，用途不明品が出土。土坑 125 は長さ 2.1m，幅 1.5m，深さ 0.8m で，鍬が出土。井戸かもしれない。土坑 270 は長さ 4.5m，幅 4.0m，深さ 0.8m で鍬未成品・竪杵が出土。溝 19 は幅 6.0m，深さ 1.4m で，上層から又鋤が出土。溝 29 は幅 3.0m，深さ 0.4m で，高杯・建築部材が出土。溝 31 は第 5 号方形周溝墓の下層にあり，幅 3.0m，深さ 0.2m で，鍬が出土。溝 78 は幅 1.9m，深さ 0.35m で，小型臼が出土。第 11 号方形周溝墓西裾の土坑 2 は南北長 2.6m，東西幅 0.7m の長楕円形を呈する。一木鋤が出土。第 21 号方形周溝墓の東北周溝東端にある第 1 号土坑は径 2.5m，深さ 0.4m で，アカ取りが出土。第 22 号方形周溝墓の西南周溝（第 21 号方形周溝墓の東北周溝）からは，又鍬・織機・櫂・剣鞘・匙形木器・部材などが出土。溝 115 は幅 6.0m，深さ 1.4m のV字溝。横鍬・部材などが出土した。

弥生時代後期（V期）の木器が出土した遺構は，A区の河川 7，B区の河川 3 ・ 8 。河川 7 は中世に削平を受けているが幅 10m 以上。河川 3 は幅約 12m で，背負子・腰掛脚が出土。河川 8 は幅約 20m で，剣把が出土。このほか，弥生Ⅰ～Ⅱ期の包含層から弓，弥生Ⅲ～Ⅳの包含層から鍬・竪杵・鳥形など，弥生V期の包含層から斧膝柄・鍬・アカ取り・盤・鳥形など，弥生V期～古墳初期の包含層から鍬・横鍬・横槌・剣鞘・机脚などが出土している。

〔木器番号〕土坑 3 ；*08707*　　土坑263；*08203*　　溝15；*12401*

第 1・2 号方形周溝墓間の溝；*05707, 07012*　土坑41；*01806, 02312*

土坑43；*20103*　土坑125；*01512*　土坑270；*08801*
溝19；*07006*　溝29；*13210*　溝31；*02407, 07409*
9号方形周溝墓盛土内；*19711*　溝78；*08514*
第11号方形周溝墓西裾の土坑2；*06506*
第21号方形周溝墓の第1号土坑；*10411*
溝115；*03403, 09716, 19608*
第22号方形周溝墓の周溝；*02304, 09706, 10107, 11413, 12207, 18416*
河川7；*19903*　河川3；*09812, 17808*　河川8；*11307*
弥生Ⅰ～Ⅱ期包含層；*11106*
弥生Ⅲ～Ⅳ期包含層；*01809, 08708, 16606*
弥生Ⅴ期包含層；*00318, 01810, 05314, 10401, 14506, 16501, 19305*
弥生Ⅴ期～古墳初期包含層；*02008*
弥生末～古墳初期包含層；*03406, 09121, 11410, 14403, 17401*

〔文　献〕堀江門也・中西靖人・他『瓜生堂－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980年

16　巨摩遺跡（fig. 248）　こま

東大阪市若江西新町2丁目・3丁目に所在。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い，1978年11月～1980年12月に(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施した。瓜生堂遺跡の南に隣接する弥生時代中期から中世に至る集落遺跡。検出した主な遺跡には，弥生時代中期の建物跡・方形周溝墓6基（主体部は木棺と土器棺）・土坑・溝，弥生時代後期の河川・足跡・沼状遺構・方形周溝墓3基（主体部は木棺）・木棺墓，古墳時代前期の水田（上下2面）・河川，古墳時代中期の方墳（形象埴輪・円筒埴輪・埴輪棺が出土），中世の掘立柱建物10棟・井戸（曲物・羽釜組）・溝などがある。収録した木器は，弥生時代中期の溝33，中期～後期の沼状遺構，後期の包含層，古墳時代前期の水田Ⅰから出土したものである。

溝33は幅1.5m，深さ1.0mで，渦文を陰刻した四脚台が出土。沼状遺構は上下の2層に分かれ，下層は弥生Ⅳ期末，上層は弥生Ⅴ期初頭に属する。下層から斧膝柄・楔・田下駄・橇・簪・琴など，上層から斧直柄・穂摘具・竪杵・横槌・弓・横杓子・刀形・把手・部材などが出土した。弥生Ⅴ期の包含層からは竪杵・縦櫛・杓子形木器，水田面Ⅰ（庄内式土器を伴う）からは曲柄又鍬・自在鉤・腰掛脚が出土している。

〔木器番号〕溝33；*12819*　水田面Ⅰ；*04810, 17312, 18006*
沼状遺構下層；*00112, 01118, 07407, 08012, 12025, 15805, 18401, 19811*
沼状遺構上層；*01003, 07804, 07810, 09004, 09219, 09222, 09223, 11010, 11011, 12510, 16110, 17308, 18615, 19309, 19312*
弥生Ⅴ期包含層；*08802, 12006, 12213*

〔文　献〕堀江門也・井藤暁子・他『巨摩・瓜生堂－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1981年

17 若江北遺跡 (fig. 248) わかえきた

東大阪市若江西新町3丁目・4丁目に所在する弥生時代前期から近世に至る複合遺跡。巨摩遺跡に南接し，1979年6月～1982年7月に近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い，(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。その後，1982年7月～1983年4月にかけて，巨摩遺跡と合せて追加調査を行なった。検出した主な遺跡には，弥生時代前期の水田，中期の建物・井戸・土坑・溝，弥生時代後期および古墳時代前期の水田・河川・土坑などがある。

収録した木器は弥生時代中期（ⅡおよびⅣ期）の包含層，弥生Ⅳ期の溝ＳＤ550，弥生Ⅴ期の自然河川ＳＤ627・土坑ＳＫ611，庄内式土器併行期の水田畦畔ＳＣ701から出土した。溝ＳＤ550は幅2.2m，深さ0.6mで，斧膝柄などが出土。自然河川ＳＤ627は西あるいは北西に流れる。一木鋤・横槌・簪などが出土。土坑ＳＫ611からは木錘，畦畔ＳＣＣ701からは槽・腰掛脚などが出土している。

〔木器番号〕弥生Ⅱ期包含層；*10831*　弥生Ⅳ期包含層；*02001*
溝ＳＤ550；*00403*　土坑ＳＫ611；*09306*
自然河川ＳＤ627；*06507, 09003, 09105, 12022*
畦畔ＳＣ701；*14103, 17907*

〔文　献〕中井貞男・尾上実・他『若江北－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年
尾上実・岸本道昭・他『巨摩・若江北（その２）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年

18 山賀遺跡 (fig. 248) やまが

東大阪市若江南町4丁目・5丁目，八尾市新家町3丁目～5丁目に所在。1971年の楠根川（第2寝屋川）改修工事に際して発見され，1972年に大阪府教育委員会，1978年に東大阪市教育委員会，1979年～1985年に(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。縄文時代晩期から近現代に至る各種の遺物・遺構を検出した。主体となるのは弥生時代前期の集落・水田で，ほかに弥生時代中・後期の水田・集落・墓，古墳時代中・後期の古墳などがある。

収録した木器は，東大阪市教育委員会および(財)大阪文化財センターの調査時に出土したもの。(財)大阪文化財センター調査分に関しては，出土遺構が多岐にわたるため，報告書の分冊に従って，ＹＭＧ１（その１）～ＹＭＧ５・６（その５・６）に分けて記述する。

〔文　献〕杉本二郎・他『山賀（その１）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年
中西靖人・森井貞雄・他『山賀（その２）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年
西口陽一・上西美佐子・他『山賀（その３）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財セン

ター 1984 年
中西靖人・石神幸子・他『山賀（その４）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983 年
田中和弘・岸本道昭・他『山賀（その５・６）（河内平野における初期農耕遺跡の調査）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986 年

ａ　山賀遺跡　　東大阪市教育委員会　調査

東大阪市若江南町５丁目 337 番地において，市立若江中学校新設工事に伴い 1978 年 10 月～12 月に発掘調査を実施。1，500㎡の調査地の東南部で検出した遺物包含層から，弥生Ⅰ期新段階を主体とし中段階を混えた土器とともに木器が出土した。遺構は検出しておらず，地山が高まる部分（約 200㎡）にのみ遺物包含層が堆積。隣接地の調査では，この包含層を検出していないが，南東約 100m の地点で同様の小規模な堆積を認めた。出土した木器には，鍬身未成品・鍬身・腕輪・縦杓子・杓子未成品・網枠・箍などがある。なお，上層で弥生末～古墳初期および古墳前期の井戸（素掘りと板枠組の円形井戸）と土坑を検出している。

〔木器番号〕*02701, 10705, 10820, 12017, 12707, 15504, 20023*

ｂ　山賀遺跡　(財)大阪文化財センター　調査　（ＹＭＧ１）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い 1979 年～1983 年に実施した山賀遺跡の発掘は，道路予定地に沿った調査地を４地区に分け，北から各々ＹＭＧ１（その１），ＹＭＧ２（その２），ＹＭＧ３（その３），ＹＭＧ４（その４）とした。その後，山賀インター建設に伴い 1983 年～1985 年に追加調査を行なったのがＹＭＧ５・６（その５・６）である。

1979 年 12 月～1983 年１月に実施した（その１）調査区では，縄文時代晩期の河川，弥生時代前期～中期初頭の水田，弥生時代後期の河川とこれに伴う祭祀遺構や堰・橋，奈良・平安時代以降の畦畔やピット・土坑群・溝・井戸を検出した。収録した木器は，弥生Ⅰ期以前の包含層（Ｂトレンチ黒色粘土上面）から出土した楔と，弥生Ⅴ期に埋没した河川の上面（Ｂトレンチ粗砂上面）から出土した竪杵である。このほか弥生Ⅴ期の河川に伴う堰・橋に用いた部材や杭が大量に出土している。

〔木器番号〕黒色粘土上面；*01122*　　粗砂上面；*08903*

〔文　　献〕杉本二郎・他『山賀（その１）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983 年

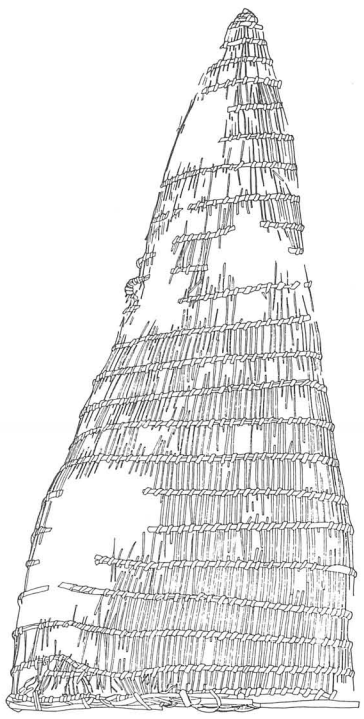


fig. 250　山賀遺跡（YMG３）筌出土状態（約８分の１）

ｃ　山賀遺跡　(財)大阪文化財センター　調査　（ＹＭＧ２）

1979 年 12 月～1982 年５月に実施した（その２）調査区では，縄文時代晩期の河川，弥生時代前期の環濠・溝・土坑・ピット群，弥生時代中期の水田・方形周溝墓，弥生時代後期の水田・溝・河川，古墳時代前期～奈良時代の掘立柱建物・古墳・土坑，中世の溝・土坑，近世～現代の水田・井戸を検出している。収録した木器は，弥生Ⅰ期の溝６・溝３，弥生Ⅱ期の第１号方形周溝墓北溝，弥生Ⅱ期の包含層，弥生Ⅴ期の溝２などから出土した。

溝６は弥生Ⅰ期中段階～新段階に属し，幅 4.5m，深さ 1.3m で，断面逆台形を呈する。木針・

鍬身・籍・鳥形・部材などが出土。溝3は環濠を構成する8条の南北溝のひとつで，籍が出土。北周溝から斧直柄が出土した第1号方形周溝墓は，南北7.6m，東西7.2mで，中央主体は木棺。弥生後期Ⅰ遺構面で検出した溝2は，幅1.6m，深さ0.35mのV字溝で泥除が出土した。

〔木器番号〕溝6；*01108, 01407, 16604*　　溝3；*10813, 10822*

溝2；*03816*　　第1号方形周溝墓北溝；*01002*

弥生Ⅱ期包含層；*11522, 12807, 20121*

〔文　　献〕中西靖人・森井貞雄・他『山賀（その2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年

d　山賀遺跡　(財)大阪文化財センター　調査　（YMG3）

1980年1月～1982年11月に実施した（その3）調査区では，縄文時代晩期の河川とその河床や浅瀬に残る足跡群，弥生Ⅰ期の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・河川，弥生Ⅱ期の方形周溝墓・木棺墓・土坑・溝・河川，弥生Ⅲ～Ⅳ期の掘立柱建物・木棺墓・壷棺墓・甕棺墓・井戸・土坑・溝，古墳時代後期～飛鳥時代の河川などを検出した。収録した木器は，縄文時代晩期の河川4，弥生Ⅰ期中段階の河川7・溝14・溝24・井戸2・井戸7・土坑11・土器群，弥生Ⅰ期新段階の溝51・溝52・溝57および包含層，弥生Ⅰ～Ⅱ期の溝42，弥生Ⅱ期の河川22および包含層，弥生Ⅲ～Ⅳ期の包含層，7世紀初頭の河川35から出土した。

河川4は幅10m以上，深さは完掘できず不明。木器（鉢・杭）と滋賀里Ⅰ式などの土器が共伴。河川7は幅約20m，深さ1.6mで，鍬未成品・弓・高杯などの木器が出土。ほかに筌（fig. 250・251）が完形で出土したが消失。溝14は掘立柱建物群内を走り，幅2.4m，深さ0.15m。縦杓子未成品が出土。溝24は幅3.2m，深さ0.4mで，朱塗りの竪杵が出土。井戸2は長径2.0m，短径1.4m，深さ1.3mの楕円形を呈し，鍬・高杯が出土。井戸7は2.2×2.4mの隅丸方形を呈し，泥除が出土。土坑11は径2.0×1.6mの不整楕円形で，鍬未成品が出土。溝51は幅2.4m，深さ0.6mで，籍が出土。溝52は幅3.0m，深さ0.6mで，鍬が出土。溝57は幅3.3m，深さ0.7mで，完形の高杯が出土。溝42は幅2.5m，深さ0.3mで，籍が出土。河川22は幅22m，深さ1.0mで，弓が出土。河川35は幅4.5m，深さ0.8mで，鋤・斎串・槽が須恵器・土師器とともに出土している。

〔木器番号〕河川4；*12903, 19311*

河川7；*03001, 11103, 11107, 13003, 13217*

溝14；*12701*　　溝24；*08609*

井戸2；*13009*　　井戸7；*03708*

土坑11；*02703*　　土器群；*00704, 00709, 08521*

溝51；*10824*　　溝52；*01414*

溝57；*13101*　　溝42；*10832*

弥生Ⅰ期包含層；*01501, 06103, 10804, 10829, 10833, 12021, 14911*

弥生Ⅱ期包含層；*14709, 14904, 18802*

弥生Ⅲ～Ⅳ期包含層；*11119*

河川22；*10910*　　河川35；*16409*

〔文　　献〕西口陽一・上西美佐子・他『山賀（その3）－近畿自動車道天理～吹田線建設に

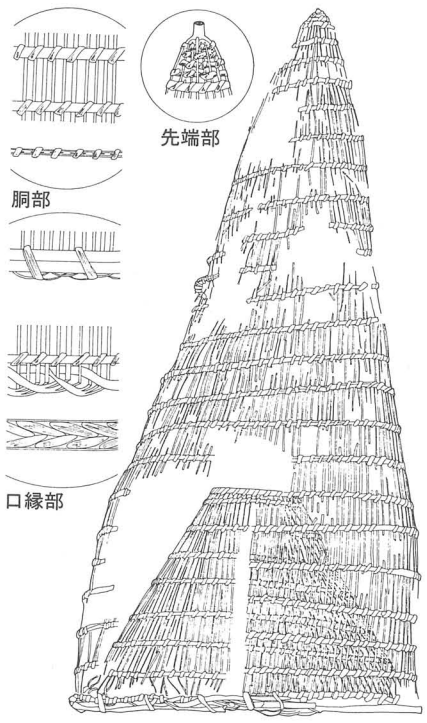


fig. 251　山賀遺跡（YMG3）筌構造模式図（約8分の1）

伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984 年

e　山賀遺跡　(財)大阪文化財センター　調査　（ＹＭＧ４）

1980 年 2 月～1982 年 6 月に実施した（その４）調査区では，縄文時代晩期の河川，弥生時代前期の溝・河川，弥生時代中期および後期の水田・河川，古墳時代後期の河川，平安時代の土坑，中世の水田，近世・近代の水田・井戸などを検出した。収録した木器が出土したのは，縄文時代晩期の河川３，弥生Ⅱ期の水田耕土およびその上を覆う流水堆積層，弥生Ⅴ期の水田面を覆う流水堆積層である。

〔木器番号〕　河川３；*19306*　　弥生Ⅱ期水田耕土層；*10828*

弥生Ⅱ期流水堆積層；*12708*　　弥生Ⅴ期流水堆積層；*01008*

〔文　　献〕中西靖人・石神幸子・他『山賀（その４）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983 年

f　山賀遺跡　(財)大阪文化財センター　調査　（ＹＭＧ５・６）

1983 年 6 月～1985 年 6 月に実施した（その５・６）調査は，（その１）～（その４）調査区の周囲に大小の調査区38ヶ所を設け，従前の調査成果を再確認するとともに，遺構のひろがりなどに関する新知見をもたらした。収録した木器は，弥生Ⅰ期の溝２，弥生Ⅰ～Ⅱ期の溝６・道状遺構・包含層などから出土したもの。溝２は幅 2.0m，深さ 0.5m で，一木鋤が出土。溝６は幅２m，深さ 0.7m で，箆が出土。道状遺構は幅 4.0m，高さ 0.4m の帯状の土盛りで，箆が出土した。

〔木器番号〕溝２；*06105*　　溝６；*10819*

道状遺構；*10821*　　弥生Ⅰ～Ⅱ期包含層；*10826, 10827*

〔文　　献〕田中和弘・岸本道昭・他『山賀（その５・６）（河内平野における初期農耕遺跡の調査）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986 年

19　友井東遺跡（fig. 248）　ともいひがし

東大阪市友井，八尾市新家町７丁目に所在。山賀遺跡の南，美園遺跡の北に位置する弥生時代から近代に至る複合遺跡。1963 年の金物団地造成工事中に発見され，1973 年に範囲確認などを目的に(財)大阪文化財センターが試掘調査を実施。さらに，近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い，1979 年 6 月～1981 年 12 月に（その１）調査，1982 年 6 月～1983 年 5 月に（その２）調査を行なった。検出した遺構には，弥生時代前期の河川・大溝，中期初頭の水田，中期～後期の河川と小規模な溝，古墳時代の柱穴や溝，古墳時代後期の水田，奈良～平安時代の条里遺構などがある。

収録した木器は，（その２）調査で検出した弥生時代前期の大溝および古墳時代前期の自然堆積層から出土。弥生時代前期の大溝（Ｂトレンチ第16層溝）は幅 3.4m，深さ 0.6m で，一木鋤・箆などの木器が弥生Ⅰ期の壷・石器と共伴。田下駄（大足）が出土した自然堆積層（１Ａトレンチ第９層）では，庄内～布留期初頭の土師器小片が共伴した。

〔木器番号〕第16層溝；*06104*　　第9層；*07601*

〔文　　献〕中井貞夫・井藤暁子・他『友井東（その1）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984年

中西靖人・上西美佐子・他『友井東（その2）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年

20　池島遺跡（fig. 252）　いけしま

東大阪市池島町，八尾市福万寺町に所在。恩智川治水緑地建設に伴い，大阪府教育委員会が1982年より発掘調査を継続している。河内平野を北流する玉櫛川が形成した自然堤防と生駒山地からの扇状地とにはさまれた低湿地に立地。周辺には条里地割が良好に遺存し，その中央部を条里地割に沿って恩智川が北流する。土地条件図によれば，調査区の南西に北西方向にのびる自然堤防が見られる。既往の調査では，洪水砂層の上につくられた弥生前期末以降の小区画水田とこれを切って流れる弥生中期の大溝，6世紀代の玉造り関係遺物，中近世の条里遺構などを検出している。

収録した木器は1983年3月に実施した試掘調査のAトレンチ，現地表下の4.5mの砂層（流路？）から出土。砂層からは弥生土器片40点が出土。後期の土器は1点も含まず，櫛描文をもつ壷体部の破片数点を含む。この砂層は上記の弥生中期の大溝につながると思われる。

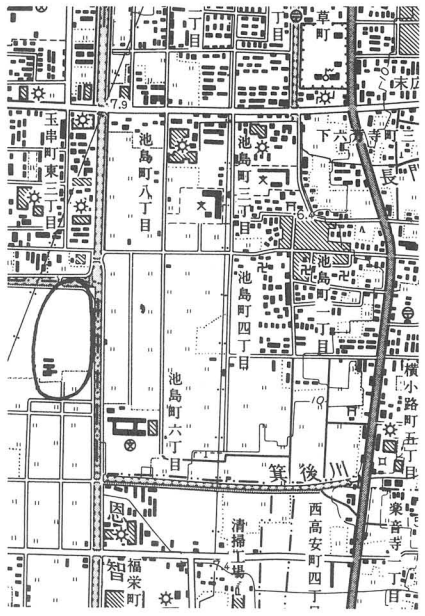


fig. 252　池島遺跡木器出土地点
(1:25,000　信貴山)

〔木器番号〕*05501*

〔文　　献〕大野薫・阪田育功『池島遺跡試掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会 1983年

21　美園遺跡（fig. 248）　みその

八尾市美園町1丁目から4丁目にかけて所在。1975年に発見され，1980年9月に(財)大阪文化財センターが試掘調査を実施。南北約600mの範囲で，弥生時代から近世に至る各期の包含層を確認。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い，1980年12月～1984年3月に本格的調査を行なった。検出した主な遺構には，弥生Ⅰ～Ⅱ期の竪穴住居・掘立柱建物・水田・土坑・溝・河川，弥生Ⅲ期の木棺墓・土坑・溝，庄内式期の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・水田・土坑・溝，布留式期の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土器棺墓・方形周溝墓・水田・畠，家形・壷形埴輪を伴う4世期末の古墳，5世紀の水田などがある。

収録した木器は弥生Ⅰ～Ⅱ期の土坑ＢＳＫ218・溝ＢＳＤ220，庄内期の井戸ＤＳＥ201・土坑ＤＳＫ306，古墳時代中期の落ち込みＧＳＸ307などから出土。ＢＳＫ218は南北幅3.0m，深さ0.3m。鍬身および広葉樹の樹皮を引伸ばして楕円形に切り抜いた用途不明品が出土している。ＢＳＤ220は幅3.5m，深さ0.35mの南北溝で，弓などが出土。ＤＳＥ201は径1.4×1.2m，深さ0.8mの不整円形を呈し，斧膝柄などが出土。ＤＳＫ306は径3.9×3.2m，深さ0.8mの楕円形を呈し，鍬・曲柄鍬・木錘などが出土した。

〔木器番号〕土坑ＢＳＫ218；*01404*　　溝ＢＳＤ220；*11012*

井戸ＤＳＥ201；*00410*　　土坑ＤＳＫ306；*02106, 04503, 09321*

落ち込みＧＳＸ307；*16304*　　弥生包含層；*19904*

〔文　　献〕渡辺昌宏・井藤暁子・他『美園－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化

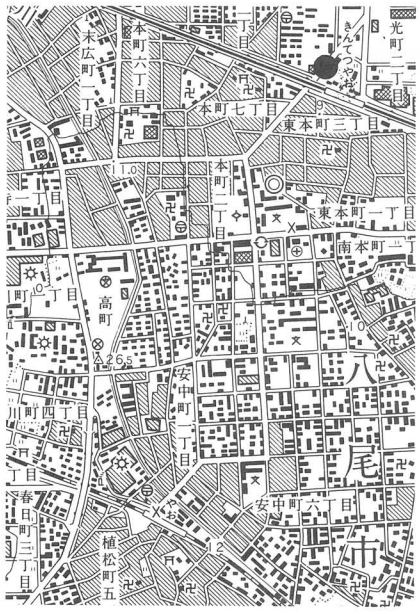


fig. 253　東郷遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪東南部)

財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1985 年

22　佐堂遺跡 (fig. 248)　さどう

東大阪市金岡 4 丁目から八尾市佐堂町 3 丁目にかけて所在。近畿自動車道天理～吹田線の建設に伴い，(財)大阪文化財センターが 1981 年 3 月～1984 年 3 月に（その 1 ）調査区，1981 年 3 月～1983 年 5 月に（その 2 ）－Ⅰ調査区の発掘調査を実施し，後者に関しては 1983 年 4 月～1984 年 10 月に橋脚部を（その 2 ）－Ⅱ調査区として追加調査した。検出した主な遺構には，縄文時代晩期の河川，弥生時代中期の水田・溝，後期の河川，古墳時代前期の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・溝・土坑，古墳時代中・後期の水田，飛鳥・奈良・平安時代の土器棺・水田・溝・河川，中世の掘立柱建物・井戸・土坑・水田・溝・河川などがある。収録した木器（横槌）は，（その 1 ）調査区の水田面上の古墳時代中期の包含層から出土した。

〔木器番号〕*09217*

〔文　　献〕三宅正浩・他『佐堂（その 1 ）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984 年
中井貞夫・阪田育功・他『佐堂（その 2 ）－Ⅰ　－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1984 年
中西靖人・森尾直樹・他『佐堂（その 2 ）－Ⅱ・他　－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1985 年

23　東郷遺跡 (fig. 253)　とうごう

八尾市光町・北本町を中心に所在。1981 年に北本町 2 丁目のビル建設に伴い八尾市教育委員会が発掘調査を実施。旧大和川流域の河内平野沖積地に立地する。弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑や方形周溝墓を検出した。南には中田遺跡・小阪合遺跡，北には萱振遺跡など同時期の集落遺跡が密集して存在する。

収録した木器は弥生時代末～古墳時代初頭の井戸ＳＥ03から出土した。径 3 m，深さ 0.9m の素堀りの井戸で，木錘はその下層から 3 個体出土している。庄内式甕や複合口縁壷が共伴。

〔木器番号〕*09318*

〔文　　献〕高萩千秋・高木真光・他「東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981 年度』八尾市教育委員会 1983 年

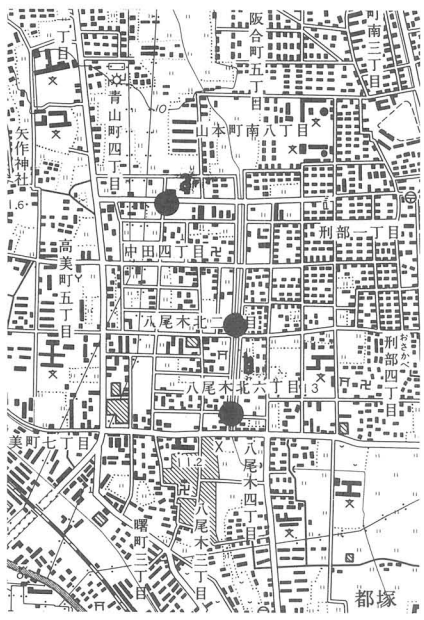


fig. 254　中田遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪東南部)

24　中田遺跡 (fig. 254)　なかだ

八尾市中田・八尾木・刑部にひろがる弥生時代中期から中世に至る集落遺跡。1970 年の区画整理事業で発見され，以後，中田遺跡調査会・大阪府教育委員会などが発掘調査を実施。旧大和川水系の長瀬川と玉串川にはさまれた河内平野沖積地に立地する。検出した遺構には，弥生時代中・後期の土坑・自然流路，古墳時代初頭の堰，古墳～平安時代の建物・井戸・土坑などがある。南には弓削宮跡に推定されている東弓削遺跡がある。収録した木器は中田遺跡調査会および大阪府教育委員会の調査時に出土したもの。

a　中田遺跡　中田遺跡調査会　調査

八尾市中田１丁目～４丁目に所在。1972年～1973年の土地区画整理に伴い発掘調査を実施。収録した木器は古墳時代中期の２号井戸から出土。この井戸は板材を矩形に組合せて井戸枠にしており，把手付槽はその枠材の一部に転用されていた。

〔木器番号〕*14003*

〔文　　献〕吉岡哲「市内の弥生遺跡とそれ以降の遺跡（14）中田遺跡」『八尾市史（前近代）本文編』八尾市役所 1988年

山本昭・米田敏幸「中田遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回研究会資料 1983年

b　中田遺跡　大阪府教育委員会　調査

柏原・八尾幹線下水管渠築造に伴い，1985年７月～８月に八尾市中田１丁目から八尾木北５丁目において発掘調査を実施。収録した木鍬は，弥生時代末期から古墳時代初頭の土坑ＳＸ01から出土。ＳＸ01は長さ2.5m，幅1.5m，深さ0.45m。北東壁を杭と矢板で土留めしており，井戸のような性格も想定できる。約50個体におよぶ土器，横杓子・朱塗り盤などの木器が共伴。木鍬は最下層から３つに折れて出土した。

〔木器番号〕*07914*

〔文　　献〕福田英人『中田遺跡発掘調査概要－柏原・八尾幹線下水管渠築造工事に伴う調査－』大阪府教育委員会 1986年

25　久宝寺遺跡（fig. 255）　きゅうほうじ

八尾市西久宝寺を中心として，北は東大阪市大蓮東，南は大阪市加美東から八尾市神武町におよぶ広大な地域にまたがる。西に接する大阪市域は加美遺跡として調査され，共通性の強い遺構群が明らかになっている。1935年の道路工事中に発見され，近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施。調査区域が長大なため南北２地区に分けて，北地区は1980年12月～1984年８月，南地区の（その１）調査区は1982年７月～1985年３月，（その２）調査区は1982年７月～1985年６月の間に調査を行ない，さらに南（その２）調査区における未調査部分を1985年７月～1986年１月に（その３）として追加調査した。検出した主な遺構には，縄文時代の河川，弥生時代前期の土坑・溝・河川，中期の掘立柱建物・方形周溝墓・土坑・溝・水田・河川，後期の建物・木棺墓・土坑・溝・水田・河川，弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居・掘立柱建物・周溝墓・壺棺墓・土坑・溝・水田・河川，飛鳥～平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑・溝・水田・河川などがある。

図版に収録した木器は，南（その２）調査区における弥生末～古墳初期の溝ＳＤ46および北地区における古墳時代前期の水田畦畔ST4001から出土した。溝ＳＤ46は溝ＳＤ45から分岐した小溝で，船材が出土。溝ＳＤ45は幅6.4m，深さ1.5mの大規模な溝で，人為的な運河と思われる。層位的対応から船材は庄内期新段階に相当する。水田畦畔ST4001からは腰掛が出土。巨摩遺跡出土の椅子形埴輪に似ている。

〔木器番号〕溝ＳＤ46；*10002, 10004*　　畦畔ＳＴ4001；*17803*

〔文　　献〕赤木克視・松岡良憲・今村道雄・他『久宝寺南（その１）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大

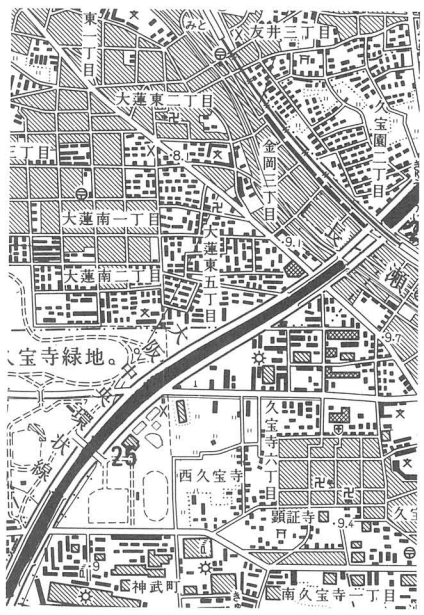


fig. 255　久宝寺遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪東南部)

阪文化財センター 1987 年
一瀬和夫・赤木克視・他『久宝寺南（その２）－久宝寺・加美遺跡の調査－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987 年
枡本哲・赤木克視『久宝寺南（その３）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986 年
中西靖人・寺川史郎・金光正裕・山口誠治・他『久宝寺北（その１～３）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987 年

26　亀井北遺跡（fig. 256）　かめいきた

大阪市平野区加美南から八尾市北亀井町にかけて所在。近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い(財)大阪文化財センターが1984年３月～1986 年に発掘調査を実施。北に久宝寺遺跡・加美遺跡，南に亀井遺跡が隣接し，当遺跡の範囲は南北約600mをはかる。調査は北から（その１）（その２）（その３）調査区に３分し，ほぼ併行して進めた。検出した主な遺構には，縄文時代後期の河川，弥生時代前期の土坑・ピット・溝，中期の溝・河川，後期の水田・溝・河川と土堤，古墳時代前期の建物・方形周溝墓・土器集積・土坑・溝・水田，古墳時代中・後期の水田・溝などがある。

収録した木器は，（その１）調査区における古墳時代前期の土坑ＳＫ8014および包含層，（その２）調査区の弥生時代中期の溝（第ⅩⅦ層ＳＤ01）・弥生時代後期の河川（第ⅩＶ層自然流路01）・古墳時代前期の土坑ＳＫ10とＳＫ13および溝（第ⅩⅠ層溝ＳＫ01），（その３）調査区の弥生時代後期の河川（自然流路ＮＲ3201）から出土した。土坑ＳＫ8014は推定径 0.6m 以上，深さ 0.6m で，糸巻き状の用途不明品が出土。第ⅩⅦ層溝ＳＫ01は幅 3.5m，深さ 0.3m の南北溝で，鍬未成品・竪杵が出土。第ＸＶ層自然流路 01 は推定幅約 19m で，南から北へ流れ，西に土堤を設けている。穂摘具・竪杵・高杯未成品などが出土。土坑ＳＫ10・ＳＫ13は，いずれも径 1.1m 以上の円形を呈し，部材が出土。第ⅩⅠ層溝ＳＤ01は幅 2.0m，深さ 0.65m で，直柄横鍬が出土。自然流路ＮＲ3201は幅約 20m で，南東から北西に流れる。きわめて写実的な鳥形が出土。

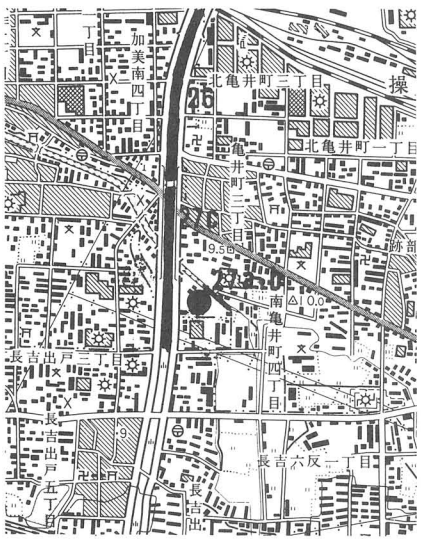


fig. 256　亀井北・亀井遺跡木器出土地点

〔木器番号〕土坑ＳＫ8014；*20127*　　（その１）調査区包含層；*06402*
第ⅩⅦ層溝ＳＤ01；*02604*　　第ＸＶ層自然流路01；*07817, 15408*
土坑ＳＫ10；*18721*　　土坑ＳＫ13；*18920*
第ⅩⅠ層溝ＳＤ01；*03502*　　自然流路ＮＲ3201；*16516*

〔文　　献〕小野久隆・服部文章・他『亀井北（その１）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986 年
奥和之・山上弘・他『亀井北（その２）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986 年
大楽康宏・竹原伸次・他『亀井北（その３）－近畿自動車道天理～吹田線建設に

伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986年

27 亀井遺跡（fig. 256） かめい

八尾市亀井町・南亀井町・竹渕町にかけて所在する弥生時代中・後期を中心とした集落遺跡。1968年の平野川改修工事で発見され，大阪府教育委員会などが数次の範囲確認調査を行ない，東西・南北とも500mほどの広がりを推定。河内平野の南端，かつての「古平野川」と「古東除川」が形成した埋没自然堤防上とその後背湿地に立地する。収録した木器は(財)大阪文化財センターが行なった長吉ポンプ場築造工事・平野川河川改修工事・近畿自動車道建設工事に伴う発掘調査で出土したもの。出土した遺構が各期・各種にわたるので，以下報告書に従って3項目に分けて記述する。

〔文　献〕大阪府教育委員会『八尾市亀井遺跡発掘調査概要』1971年
大阪府教育委員会『亀井遺跡発掘調査概要Ⅱ』1972年
大阪府教育委員会『亀井遺跡発掘調査概要Ⅲ』1973年
(財)大阪文化財センター『近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書』1974年

a 亀井遺跡 長吉ポンプ場築造工事関連 調査（KM－P区）

寝屋川南部流域下水道事業の一環である八尾市南亀井町3丁目における長吉ポンプ場築造工事に伴い，(財)大阪文化財センターが1977年に試掘調査，1978年5月～1980年3月に発掘調査を実施。弥生時代前期の溝，中期の柱穴・井戸・土坑・溝や甕棺・木棺・土坑墓，後期の井戸・土坑・溝・河川，古墳時代中期の古墳・堤・水田およびそれ以降に形成された沼沢地などを検出した。収録した木器は弥生時代中期の溝ＳＤ3001・ＳＤ3004・ＳＤ3023・ＳＤ3031・ＳＤ3040，井戸ＳＥ3001，土坑ＳＫ3041，弥生時代後期の溝ＳＤ3033，古墳時代中期の古墳（亀井古墳）の2号主体，堤西側の杭列と沼沢地ＳＸ4001から出土した。

弥生Ⅲ期新段階～Ⅳ期の溝ＳＤ3001は幅3.5m，深さ0.8mの南北溝で，鍬身・弓・梯子が出土。弥生Ⅲ期古段階の溝ＳＤ3004は幅1.0m，深さ0.6mの2段掘りの東西溝で，鍬身・籠が出土。弥生Ⅲ期新段階～Ⅳ期の溝ＳＤ3023は幅4.2m，深さ1.7mで，竪杵・弓・有孔円板・蓋・腰掛座板・梯子などが出土。弥生Ⅲ期の溝ＳＤ3031は幅2.2m，深さ0.6mで，一木鋤が出土。弥生Ⅲ～Ⅳ期の溝ＳＤ3040は幅2.0m，深さ0.6mで，一木又鋤・四脚合子が出土。弥生Ⅳ期の井戸ＳＥ3001は長径3.0m，短径2.4m，深さ1.0mの楕円形を呈し，内部長軸線上に杭を打ち込み横木をそえている。匙未成品が出土。弥生Ⅲ期新段階～Ⅳ期の土坑ＳＫ3041は3.7×1.0m，深さ1.0mの隅丸方形を呈し，土器・炭化玄米・藁などとともに横杓子未成品が出土。溝ＳＤ3033は幅5.4m，深さ2.4mの東西溝で，鍬身・一木鋤・横槌が出土。亀井古墳は一辺7mの方墳で，2基の木棺を直葬。2号主体の棺内には刀・短甲・草摺・肩甲・頚甲・冑など，棺外には靫が副葬され，収録した縦櫛は棺上にあった。亀井古墳の南にある堤は自然木・転用材・草などで補強した大規模なもの。その西側の旧河川を掘り込んだ窪地ＳＸ4001は，後に沼沢地化して平安時代まで残る。堤を補強した杭列内の転用材として琴が，ＳＸ4001から田下駄縦枠・部材が出土している。

〔木器番号〕溝ＳＤ3001；*01708*　　溝ＳＤ3004；*01907*

溝ＳＤ3031；*07104*

溝ＳＤ3023；*08709, 10911, 10912, 12020, 15003*

溝ＳＤ3040；*07007, 14708*　井戸ＳＥ3001；*12308*

土坑ＳＫ3041；*12503*　溝ＳＤ3033；*06301*

亀井古墳２号主体；*12009*　堤西側杭列；*15902*

沼沢地ＳＸ4001；*07605, 18605*

〔文　献〕高島徹・広瀬雅信・他『亀井・城山－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980年

ｂ　亀井遺跡　平野川河川改修工事関連　調査（ＫＭ－Ｈ区）

前述した長吉ポンプ場の付属施設築造工事および平野川河川改修工事に伴い，(財)大阪文化財センターが1980年６月～1981年10月に発掘調査を実施。弥生時代中期の柱穴・溝・土坑・井戸・方形周溝墓，後期の溝・土坑・井戸・河川，古墳時代前期・奈良時代の河川などを検出した。収録した木器は，弥生時代中期の溝ＳＤ03・ＳＤ19・ＳＤ20・ＳＤ27，井戸ＳＫ21・ＳＫ22・ＳＫ25，弥生時代後期の溝ＳＤ02・ＳＤ06・ＳＤ12・ＳＤ14，井戸ＳＫ17，河川ＳＤ11から出土した。

溝ＳＤ03は幅2.8m，深さ1.5mで，緩やかにカーブしながら西北西から東南東へ流れる。東地区（ＳＤ03Ｅ）と西地区（ＳＤ03Ｗ）とに分けて調査を実施。弥生Ⅲ・Ⅳ期の土器が共伴するが，前者は溝掘削時の混入と考えられる。したがって，斧膝柄・直柄横鍬身・匙・槽・槍形などの木器は弥生Ⅳ期に属する。

溝ＳＤ19は幅4.5m，深さ1.5mで，埋土はⅠ～Ⅲ層に大別できる。Ⅰ層は溝の埋没過程，Ⅱ層は溝が機能した時，Ⅲ層は溝掘削直後の堆積土で，木器はⅡ・Ⅲ層から弥生Ⅱ～Ⅲ期古段階の土器・石器・動物遺存体とともに出土。なお，ＫＭ－Ｈ７区ではⅢ層が弥生Ⅱ期，Ⅰ層が弥生Ⅲ期を主体としてⅡ期を含むという所見を得ているが，本図録所収の木器は一括して弥生Ⅱ～Ⅲ期古段階と表示した。斧直柄・鍬身・木錘・弓・匙・横杓子・釣瓶などがある。

溝ＳＤ20はＫＭ－Ｐ調査区における溝ＳＤ3004に連なる。幅2.7m，深さ1.1mで，埋土はⅠ～Ⅴ層に大別できる。木器は溝が機能した時の堆積土Ⅰ・Ⅱ層から，弥生Ⅲ期の土器・石器・動物遺存体などと共伴。泥除・横杓子・槽・梯子などがある。

溝ＳＤ27は幅3.5m，深さ1.2mで，ＫＭ－Ｐ調査区の溝ＳＤ3001に連なる。埋土はⅠ～Ⅲ層に大別でき，木器は主にⅡ層から弥生Ⅲ～Ⅳ期の土器などど共に出土。竪杵・弓・蓋などがある。ＳＫ21は径１m弱，深さ1.4m，ＳＫ22は推定径1.1m，深さ0.7m，ＳＫ25は径2.4m，深さ1.4mの円形素掘りの井戸。ＳＫ21・ＳＫ22から斧膝柄が，ＳＫ25から弥生Ⅳ期の土器とともに腰掛が出土している。

ＳＤ02は幅4.7m，深さ1.0mの南北溝で，埋土は上下２層に大別できる。弥生Ⅴ期の土器・石器とともに，盾・片口が出土。ＳＤ06は幅6.0m以上，深さ1.3mで，埋土は２層に分かれる。一木鋤は弥生Ⅴ期初頭の土器などと一緒に上層で出土した。ＳＤ12・ＳＤ14は一連の東西溝で，幅3.5m，深さ1.5m。埋土はⅠ～Ⅳ層に大別でき，臼・木錘・織機・櫂・高杯などの木器はⅠ～Ⅲ層から弥生Ⅴ期初頭の土器と共伴。ＳＫ17は径1.0m，深さ1.3mの円形素掘りの井戸。弥生Ⅴ期末の土器とともに曲柄又鍬・鋤柄・木錘が出土。ＳＤ11は東から西へ流れる自然河川で，

高杯・槽が弥生時代中期～後期の土器と共伴した。

〔木器番号〕溝ＳＤ03；*00511, 03402, 12310, 15401, 16205*

溝ＳＤ19；*00702, 01006, 01415, 09305, 10907, 12014, 12309, 12405, 14601, 14701, 15306*

溝ＳＤ20；*04007, 12402, 13306, 19108*

溝ＳＤ27；*08911, 11102, 11110, 11111, 15004, 19207*

井戸ＳＫ21；*00210*　井戸ＳＫ22；*00207*　井戸ＳＫ25；*17806*

溝ＳＤ02；*11603, 12710*　溝ＳＤ06；*06304*

溝ＳＤ12（ＳＤ14）；*08406, 09308, 09702, 10112, 13205, 18516, 18918*

井戸ＳＫ17；*04809, 06303, 09307*

河ＳＤ11；*13107, 14204*

〔文　　献〕宮崎泰史・広瀬雅信・他『亀井遺跡－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』(財)大阪文化財センター 1982 年

宮崎泰史・他『亀井遺跡Ⅱ－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』(財)大阪文化財センター 1984 年

c　亀井遺跡　近畿自動車道建設工事関連　調査（ＫＭ－Ｋ区）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴い(財)大阪文化財センターが 1979 年 6 月～1982 年 3 月に（その１）調査区，1982 年 6 月～1983 年 8 月に（その２）調査区，1985 年 6 月～1986 年に（その３）調査区の発掘調査を実施。（その１）調査区は南北に縦貫するトレンチ，（その２）調査区は橋脚設定のための掘りひろげ部，（その３）調査区は掘りひろげ部の追加である。調査の結果，ＫＭ－Ｐ区・ＫＭ－Ｈ区を合せて，亀井遺跡における集落景観の変遷がほぼ明らかになった。すなわち，弥生時代前期の中頃に成立した集落は南北 50m ほどの範囲で，前期末には居住域の南に方形周溝墓が築かれる。中期中葉に集落は著しく拡大し，南北約 150m におよぶ。この集落はＫＭ－Ｐ・Ｈ区における径 100m を占める集落と併存した可能性が強い。中期後葉には墓域が移動・拡大し，居住域の南，城山遺跡の北部を含む南北 560m に及ぶ範囲で，方形周溝墓が次々と築かれる。この集落は後期初頭まで存続し，後期中葉に一時的に復活するが，以後は生活痕跡はなく，５世紀後葉に至って古墳が築造される。

収録したＫＭ－Ｋ区における木器は，弥生時代中期の溝ＳＤ1801・ＳＤ2301～3・ＳＤ2401・ＳＤ3011・ＳＤ3012，土坑ＳＫ1901・ＳＫ3060，井戸ＳＥ2401・ＳＥ2402，弥生時代後期の溝ＳＤ2303・ＳＤ2304・ＳＤ3008，河ＮＲ3003から出土。なお，遺構番号 2000 番代までは（その２）調査区，3000 番代以上は（その１）調査区の遺構である。

弥生Ⅱ期の溝ＳＤ1801は幅 3.2m，深さ 1.0m で，把手が出土。弥生Ⅲ期の溝ＳＤ2401は幅 4.4m，深さ 1.3m で，杓子形木器・高杯などが出土。弥生Ⅲ期新段階～Ⅳ期の溝ＳＤ3011は幅 3.8m，深さ 1.3m のＶ字溝で，横杓子未成品が出土。弥生Ⅲ期の溝ＳＤ3012は幅 4.7m，深さ 1.5m で，鍬身・竪杵・弓が出土。弥生Ⅲ期前半の土坑ＳＫ1901は東西 2.5m，南北 1.5m 以上，深さ 1.0m で，斧膝柄・横杓子が出土。弥生Ⅲ期の土坑ＳＫ3060は径 4.6m，深さ 1.6m。埋土は６層に分かれ，２～５層から多量の土器・動物遺存体とともに，斧膝柄・斧直柄・鍬身・組合せ鋤などが出土。弥生Ⅳ期のＳＥ2401は径 1.5m，深さ 2.0m，ＳＥ2402は径 2.8m，深さ 2.1m の円形素掘りの井戸で，前者から刳物桶，後者から鍬身・高杯などが出土。

溝ＳＤ2304は幅4.3m，深さ1.2mで，溝ＳＤ2303の北肩を切る。前者から鍬身・横槌・盾，後者から竪杵が出土。溝ＳＤ3008は幅10m前後で，上層から弥生Ⅴ期後半，下層から前半の土器が出土する。木器には斧直柄・鍬・泥除・一木鋤・横槌・穂摘具・背負子などがある。河ＮＲ3003は推定幅10m以上で，漢式鏃を模した木鏃が出土した。

〔木器番号〕溝ＳＤ1801；*17301*　　溝ＳＤ2301～3；*19911*
溝ＳＤ2401；*12209, 13109, 18415, 19709*
溝ＳＤ3011；*12502*　　溝ＳＤ3012；*01412, 08804, 10909*
土坑ＳＫ1901；*00219, 00501, 12412*
土坑ＳＫ3060；*00212, 00314, 00705, 01909, 02904, 04510, 05602, 05804, 12105*
井戸ＳＥ2401；*15203*　　井戸ＳＥ2402；*13110*
溝ＳＤ2303；*08809*　　溝ＳＤ2304；*02004, 09108, 11805*
溝ＳＤ3008；*00416, 01007, 02003, 03811, 07822, 09104, 09218, 09809, 15302, 17001*
河ＮＲ3003；*11503*

〔文　　献〕高島徹・広瀬雅信・他『亀井－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1983年
広瀬和雄・石神幸子・他『亀井（その２）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986年
藤永正明・阿部幸一・他『亀井（その３）－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987年

28　恩智遺跡（fig. 257）　おんじ

八尾市恩智中町２丁目・３丁目に所在する縄文時代前期から古墳時代中期に至る集落遺跡。恩智川改修に伴い，1975年10月～1976年４月，1976年10月～1977年３月，1978年１月～６月に瓜生堂遺跡調査会が発掘調査を実施。生駒連峰に連なる高安山西麓の扇状地端部に立地する。調査地点は集落遺跡の西端部分で，現恩智川河床敷にあたる。弥生時代を中心とする溝・土坑・小穴・木棺墓などを検出している。西には中田遺跡などの集落遺跡，東の山麓には高安山古墳群が存在する。

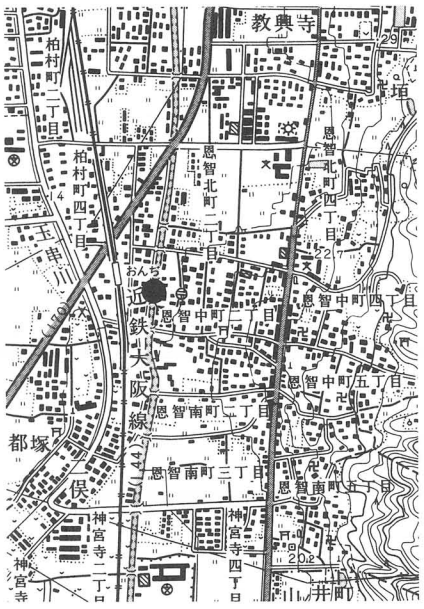


fig. 257　恩智遺跡木器出土地点
(1:25,000　信貴山)

収録した木器は主として弥生時代前～中期の溝や自然河道から出土した。溝ＳＤ02は幅2.5m，深さ0.5mで，下層から弥生Ⅰ期新段階～Ⅱ期，上層から弥生Ⅱ～Ⅲ期の土器が出土。木器は上層から鍬・鋤が出土している。弥生Ⅱ期の溝ＳＤ04は幅3.5m，深さ1.4mで，鍬・鋤・小型臼などが出土。弥生Ⅰ期の自然河道ＳＤ06は深さ1.5mで，田下駄・箆・容器などが出土。溝ＳＤ07は幅２m，深さ0.8mで，弥生Ⅱ期を主体とするⅠ～Ⅲ期の土器とともに斧膝柄などが出土。溝ＳＤ10では弥生Ⅱ～Ⅲ期の土器とともに木鏃などが出土。溝ＳＤ11は幅3.0m，深さ1.3mで，弥生Ⅲ期を主体とする土器とともに鍬・鋤・容器などが出土。溝ＳＤ13は幅2.8m，深さ0.9mで，南肩に沿って弥生Ⅴ期の土器が整然と並ぶ。溝内から竪杵が出土。自然河道ＳＤ15は幅5.5m，深さ1.2mで，弥生Ⅱ～Ⅲ期の土器に部材が共伴。ＳＤ18は自然河道ＳＤ21か

ら分岐する幅3.5m，深さ1.2mの溝で，底から容器が出土。共伴土器は弥生Ⅰ～Ⅲ期であるが，ＳＤ21との関係から弥生Ⅱ～Ⅲ期とした。ＳＤ21は幅7.5m，深さ1.3mで，上層で古墳時代，中層で弥生Ⅳ～Ⅴ期，下層で弥生Ⅱ～Ⅲ期の土器が出土。木器は中・下層から鍬・弓・戈形などが出土した。溝ＳＤ22は幅2.5m，深さ0.9mで，弥生Ⅰ～Ⅲ期の土器と木製高杯の杯部が出土した。自然河道ＳＤ24は幅20m以上，深さ2m以上で，弥生Ⅱ～Ⅲ期の土器とともに，小型臼・横槌・容器などが出土。ＳＤ30は幅約7m，深さ0.5m，ＳＤ33は幅9.8m以上，深さ0.7mの自然河道で，弥生Ⅱ～Ⅲ期。鍬身・四脚合子などが出土。

〔木器番号〕溝ＳＤ02；*01802*
溝ＳＤ04；*08510, 08520, 10701, 14903, 16007, 19509*
自然河道ＳＤ06；*07408, 10834, 14604, 14908, 15407, 19807*
溝ＳＤ07；*00102, 01004, 13310, 16107*
溝ＳＤ08～ＳＤ12；*00708*　溝ＳＤ10；*11515, 18212*
溝ＳＤ11；*02411, 10605, 12815, 14804*
溝ＳＤ13；*09005*　自然河道ＳＤ15；*18904*
溝ＳＤ18；*12910*　溝ＳＤ22；*13115, 19614*
自然河道ＳＤ21；*00110, 01409, 06201, 07102, 08509, 08518, 11124, 14907, 16003, 19603, 19808*
自然河道ＳＤ24；*08502, 09202, 12812, 14705, 18512, 19607, 20022*
自然河道ＳＤ30；*19803*　自然河道ＳＤ33；*01610, 14703*
ピットＳＰ04；*16001, 19613*
弥生Ⅱ～Ⅲ期包含層；*00206, 01801, 02903, 02908, 05704, 08506, 09006, 11702, 12906, 13106, 18020, 19516*

〔文　献〕田代克己・毛利光用子・他『恩智遺跡Ⅰ・Ⅱ』瓜生堂遺跡調査会1980年
曾我恭子・成海佳子・毛利光用子『恩智遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会1981年

29　八尾南遺跡（fig. 258）　やおみなみ

八尾市若林町1丁目付近に所在。1978年7月～1979年12月に八尾南遺跡調査会が発掘調査を実施。羽曳野丘陵の北縁辺部に立地する。縄文時代～弥生時代の水路・河川，古墳時代の集落・墓・水田，中世の条里制水路などを検出している。周辺には津堂城山古墳や長原古墳群がある。

収録した木器は，いずれも古墳時代の井戸から出土した。ＳＥ９は4世紀の井戸で，径1.2m，深さ1.4mをはかる。木器は準構造船の転用材で組んだ井戸枠に付随して出土。ＳＥ13は素掘りの井戸で，上層から布留式の小型丸底形土器片が出土している。儀杖形木製品は最下層より出土した。

〔木器番号〕井戸ＳＥ９；*18517*　井戸ＳＥ13；*12101*

〔文　献〕山本昭・米田敏幸・他『八尾南遺跡－大阪市高速電気軌道2号線建設に伴なう発掘調査報告書－』八尾南遺跡調査会1981年

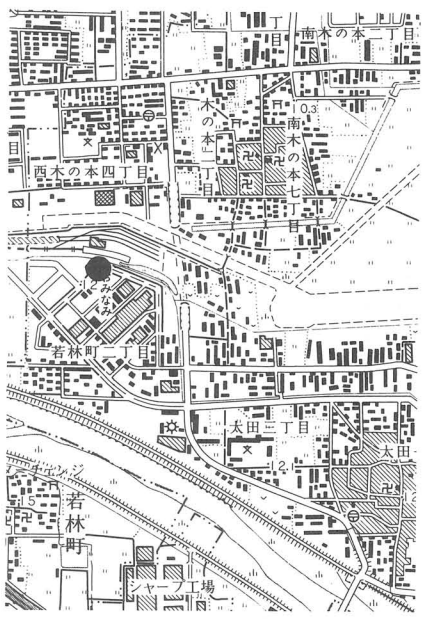


fig. 258　八尾南遺跡木器出土地点
（1:25,000　大阪東南部）

30　船橋遺跡（fig. 259）　ふなはし

柏原市古町，藤井寺市北条町・船橋町付近に所在する縄文時代～室町時代の複合遺跡。江戸

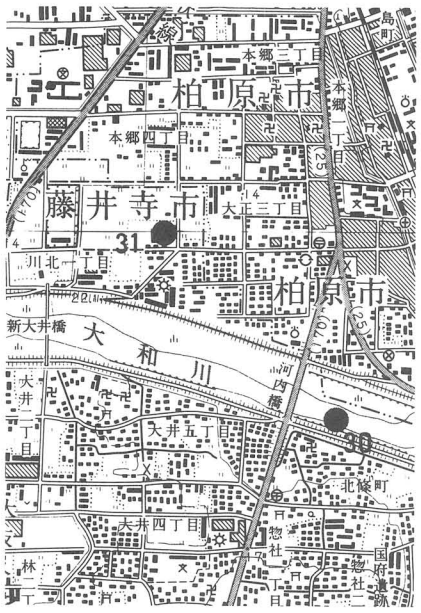


fig. 259　船橋・川北遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪東南部・古市)

時代に大和川を付け替えたため，中枢部は新大和川の河床となって流失しつつある。1940年代の後半に発見され，1956～58年に大阪府教育委員会などが河床部分を発掘調査を実施。弥生時代の墓，古墳時代の溝，飛鳥時代創建の寺院，奈良時代の柵や掘立柱建物，中世の井戸などを検出した。古墳時代～奈良時代における土器編年の基礎を構築し，後に縄文時代晩期「船橋式」の基準となったことで著名。発掘調査でも各種の木器が若干量出土しているが，図版に収録した刀装具は表採品である。

〔木器番号〕*11320*

〔文　　献〕辻合喜代太郎「古代・中世の工芸」『柏原市史』第2巻 本編1，柏原市役所1973年

原口正三『河内府船橋遺跡出土遺物の研究』大阪府文化財調査報告書第8輯，大阪府教育委員会1958年

31　川北遺跡（fig. 259）　かわきた

藤井寺市川北2丁目に所在。船橋遺跡の北に隣接する。府立藤井寺養護学校建設工事に伴い，大阪府教育委員会が1980年2月～3月（第1次），1981年7月～11月（第2次）に発掘調査を実施。弥生時代中期の土器溜，後期の方形周溝墓，古墳時代前・中期の竪穴住居・井戸・溝，後期の溝，中世の水田などを検出した。

収録した木器は第1次調査区の第1号井戸（井戸1），第2次調査第1区の溝ＳＤ１から出土した。井戸1は径1.45m，深さ1.51mの円形素掘りの井戸で，布留式後半の土器とともに斧膝柄・木錘・田下駄横木・剣鞘などが出土。溝ＳＤ１は幅7m，深さ0.3mの自然流路。南東から北西へ流れ，一部を杭と矢板で護岸する。古墳時代後期の土師器・須恵器とともに，田下駄が出土している。

〔木器番号〕第1次調査区　井戸1；*00312, 07709, 09313, 11412*

第2次調査区　自然流路ＳＤ１；*07502*

〔文　　献〕岩崎二郎・岩瀬透『川北遺跡発掘調査概要－府立藤井寺養護学校用地内埋蔵文化財調査－』大阪府教育委員会1981年

松村隆文・館邦典『川北遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会1982年

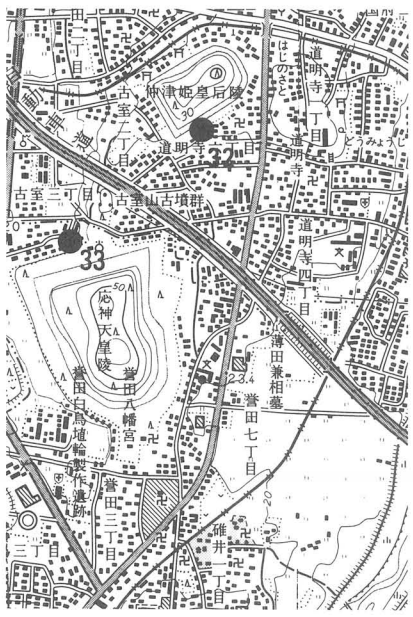


fig. 260　三つ塚古墳・応神陵古墳木器出土地点(1:25,000　古市)

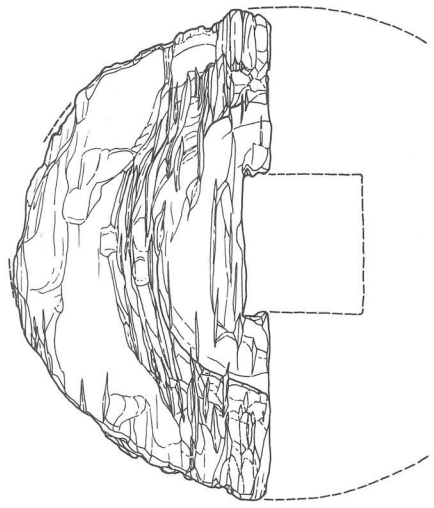
32　三つ塚古墳（fig. 260）　みつづかこふん

藤井寺市道明寺6丁目に所在。仲津山古墳の南側，洪積段丘縁辺部に東西に並ぶ3基の方墳の総称。東から順に八島塚古墳，中山塚古墳，助太山古墳とよぶ。八島塚・中山塚古墳はともに一辺約50m，高さ約8m，助太山古墳は一辺約35mをはかる。3基の古墳は南辺が揃い，互いに周濠を共有する。1978年1月～5月に大阪府教育委員会が八島塚古墳と中山塚古墳との間で発掘調査を実施。2つの古墳に挟まれた周濠を検出した。周濠は上部幅約15m，底部幅約5.6m，深さ約1.8m。濠内には腐植土が厚く堆積しており，濠底北端部の最下層では周濠北側にある埴輪窯の灰層が堆積し，周濠掘削時期と埴輪窯操業時期とが近接していたことを示す。南寄りの濠底中央部を南北11m，東西7m以上の規模で土坑状に掘りくぼめており，大小2つの木製槌「修羅」はテコ棒とともにこの土坑状部分から出土した。中央に頭部を北へ向けた大形「修羅」，大形「修羅」の南端に頭部を東へ向けた小形「修羅」，大形「修羅」の東側に添うようにテコ棒があった。そのほかに埴輪，土師器，須恵器が濠内から出土している。古墳の築

造時期は5世紀中葉から後半頃と考えられ，「修羅」およびテコ棒も古墳築造時に埋納されたと推定される。

〔木器番号〕*09901, 09902*

〔文　　献〕高島徹「修羅の発掘」大阪府教育委員会月報第31巻第1号，1978年
高島徹「三つ塚出土の修羅」『高校通信　東書　日本史・世界史№57』東京書籍 1980年
高島徹「三ッ塚古墳周濠内出土の「修羅」の発掘調査について」現地説明会パンフレット，大阪府教育委員会 1978年（『大阪府史』第1巻古代編 1978年に再録）



33　応神陵古墳（fig. 260）　おうじんりょうこふん

羽曳野市誉田に所在する前方後円墳。誉田山古墳・誉田御廟山古墳とも言う。藤井寺市と羽曳野市にまたがる古市古墳群のなかで最大規模を誇る。三段築成で墳丘全長約420m。二重に周濠がめぐる。

図版に収録した笠形木器は応神天皇の宗廟と称する誉田八幡宮の所蔵品で，同古墳の内濠から出土したと言う。1881年の周濠浚渫時にも同種の木器が出土したことを若林勝邦が報じているが，法量からみて別個体のものである。その後，同古墳の外堤西半部を囲むように流れる大水川改修工事に伴い，1987年度から大阪府教育委員会が同古墳周辺部の発掘調査を実施している。fig. 261に転載した笠形木器は1988年度の調査時に同古墳前面（北側）外堤の外側をめぐる溝から出土したもので，1881年発見の笠形木器の法量にほぼ等しい。

〔木器番号〕*16907*

〔文　　献〕若林勝邦「古墳より発見せる木片に就て」『考古学会雑誌』第11号，1897年
土生田純之「誉田八幡宮所蔵の有孔木製品」『網干善教先生華甲記念考古学論文集』1988年
一瀬和夫「大阪府羽曳野市応神陵古墳外堤」『日本考古学年報41（1988年度版）』日本考古学協会 1990年

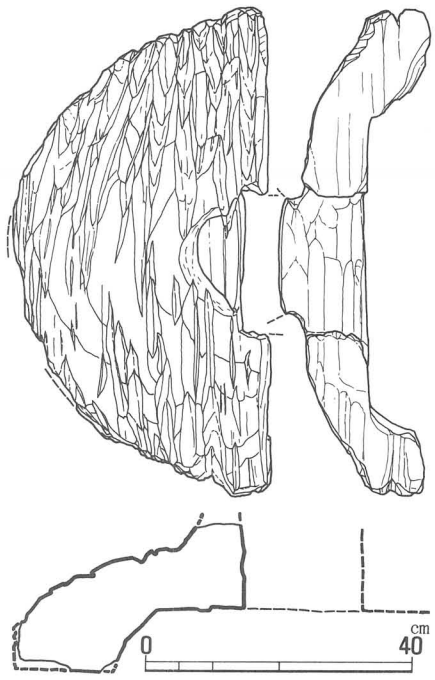


fig. 261　応神陵古墳外堤溝 SD01 出土笠形木製品（大阪府教育委員会『大水川改修にともなう発掘調査概要・Ⅳ』1989年）

34　陵南北遺跡（fig. 262）　りょうなんきた

堺市百舌鳥西之町に所在。百舌鳥古墳群中の東南部，いたすけ・御廟山の両古墳とニサンザイ古墳との間を西流する百舌鳥川（百済川）の左岸に沿う低位段丘裾部に立地する。おおよそ東西300m，南北40mの範囲で，標高は12m前後をはかる。1973年の団地建設を契機に，堺市教育委員会が発掘調査を実施。初期土師器や古式須恵器を伴う土坑などを検出した。翌1974年，東に隣接する市立小学校新設工事に伴う発掘調査では，百済川の蛇行によって形成されたよどみ状遺構から多種多様の木器が出土。そのほか鉄精錬に関わる炉，多量の鉄滓を含む方形土坑などの遺構を検出し，製塩土器や漆が入った須恵器なども出土していることから，百舌鳥古墳群造営に関わる集団の工房跡と推定できる。

よどみ状遺構から出土した木器には，臼・竪杵・杵・刀装具・鞍・刀形・把手・建築部材などがあり，5世紀後半代の須恵器・土師器が多数共伴している。特に，前輪・後輪が揃って出土した馬鞍は注目すべき遺物である。なお，当遺跡の南側を東方にのびる丘陵には5世紀後半～6世紀初頭の掘立柱建物群が想定でき，その丘陵端には6世紀前半の赤山古墳（径20mの

円墳）がある。さらに谷をはさんだ南側にも6世紀前半の竪穴住居・掘立柱建物群があり，地理的・歴史的に一連の遺跡として把握できる。

〔木器番号〕*08404, 09507, 11214, 11321, 11403, 11420, 11801, 11802, 13302, 16115, 16309, 16313, 17306, 19204, 19208, 19209*

〔文　　献〕堺市教育委員会『陵南遺跡現地説明会要旨』1974年
森村健一・北野俊明「陵南遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回研究集会資料1983年
神谷正弘「大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復原」『考古学雑誌』第72巻第3号，日本考古学会1987年

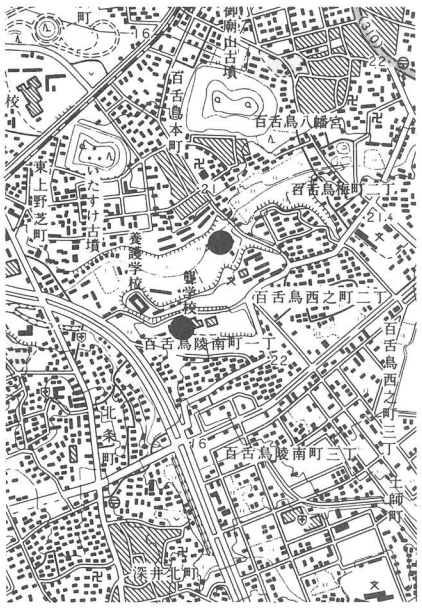


fig. 262　陵南北・百舌鳥陵南遺跡木器出土地点（1:25,000　堺）

35　百舌鳥陵南遺跡（fig. 262）　もずりょうなん

堺市百舌鳥陵南町に所在。1974年5月～7月，同年7月～12月，1975年1月の3次にわたって大阪府教育委員会が発掘調査を実施。百舌鳥古墳群の中にあって，泉ヶ丘丘陵から派生した舌状台地のうち，石津川の支流である百済川と美濃川によって区分された台地上とその間の谷部に立地する。古墳時代中期の掘立柱建物・竪穴住居・土坑・溝や井堰と考えられる杭列を伴う河川状遺構を検出。旧石器，縄文土器，古墳時代前期の土師器，中～後期の須恵器・土師器・埴輪，奈良時代の須恵器・土師器・皇朝銭，中世の瓦・陶磁器などが出土した。

収録した木器は河川状遺構から出土。古墳時代のものと考えられるが，共伴した土器の時期にばらつきがあり，出土層位も安定していなかったため，詳細な時期は特定できない。

〔木器番号〕*00401, 06701*

〔文　　献〕中村浩『百舌鳥陵南遺跡発掘調査概要』大阪府文化財調査概要1974－13，大阪府教育委員会1975年

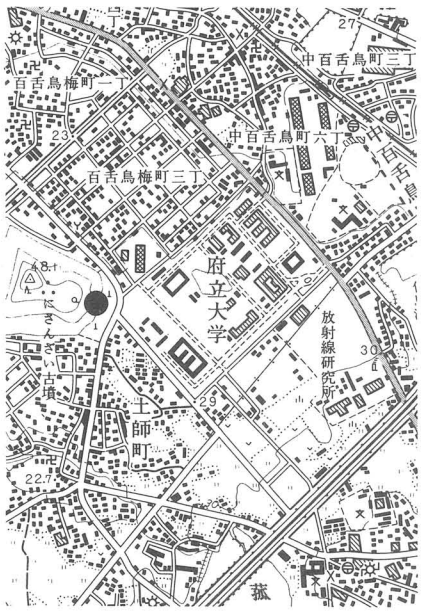


fig. 263　ニサンザイ古墳木器出土地点（1:25,000　古市）

36　ニサンザイ古墳（fig. 263）

堺市百舌鳥西之町・百舌鳥陵南町・土師町にまたがって所在する前方後円墳。墳丘全長290mで，2重の周濠をもつ。百舌鳥古墳群のなかにあっては，大山古墳（仁徳陵），ミサンザイ古墳（履中陵）についで3番目，日本全国でも7番目の規模を誇る。1976・1977年に堺市教育委員会が実施した内・外濠の状況および範囲確認調査に際して木器が出土。収録した木器は，1976年に後円部前面の一重周濠部（内濠）に設定した第2トレンチから出土したもの。出土層位の状況および共伴遺物から6世紀前半代に比定され，本古墳に所属すると考えてさしつかえない。

〔木器番号〕*16402, 16901*

〔文　　献〕森村健一・北野俊明『ニサンザイ古墳一重堀及び二重堀範囲確認調査概要』堺市教育委員会1987年

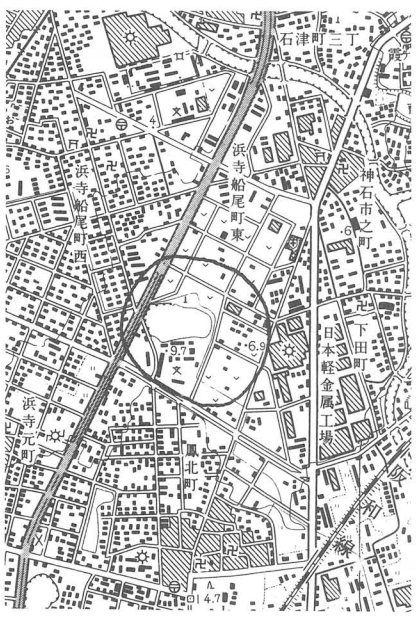


fig. 264　四ッ池遺跡木器出土地点（1:25,000　堺）

37　四ッ池遺跡（fig. 264）　よついけ

堺市浜寺船尾町を中心に所在。1948年の浜寺中学校建設工事を契機とする発掘調査，1967・1968年の大阪府教育委員会による範囲確認調査，1969年～1971年の第2阪和国道内遺跡調査会による発掘調査，1973年～1980年の四ッ池遺跡調査会による発掘調査などを経て，現在は堺市教育委員会が調査を継続している。和泉山脈から北にのびる丘陵の一支脈の先端に立地し，

標高10m前後の丘陵端平坦部およびその周囲の標高5m前後の水田地帯を含めて，遺跡の範囲は東西500m，南北1，000m近くにおよぶ。縄文時代中期末から古墳時代全搬を通じての遺構・遺物，およびそれ以降の断片的な遺構・遺物を検出している。とくに，和泉における数少ない縄文後・晩期の集落が弥生時代の拠点集落に発展する過程，池上遺跡とならぶ和泉北部における弥生時代の拠点集落が形成・発展・解体・再編に至る過程，百舌鳥古墳群や陶邑という古墳時代の中核となる遺跡群に隣接する集落遺跡としての動向など，四ッ池遺跡が提起する問題は多く，かつ重要である。以下，収録した木器を，第2阪和国道内遺跡調査会による調査分と，四ッ池遺跡調査会・堺市教育委員会による調査分とに分けて記述する。

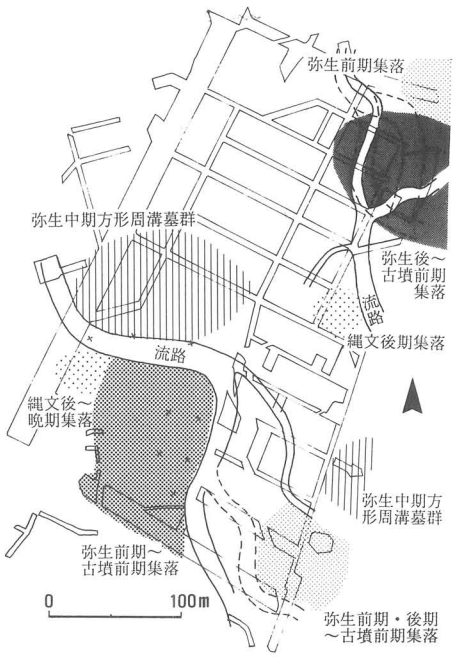


fig. 265 四ッ池遺跡概念図

a 四ッ池遺跡 第2阪和国道内遺跡調査会 調査

1969年4月～1971年9月に，第2阪和国道路線予定地の幅40m，長さ550mに関して発掘調査を実施。縄文時代の土坑やピット，弥生時代の溝・土坑・方形周溝墓・壷棺墓・河川，古墳時代の溝・河川などを検出した。収録した木器は，弥生時代前期の包含層，弥生時代中期の溝ＳＦ005（Ｅ溝）・ＳＦ006（Ｇ溝），古墳時代前期～中期の自然流路ＳＦ017（Ｎ溝），古墳時代中期のＬ溝南溝，年代不詳の大溝などから出土した。

弥生Ⅰ期の包含層はＦ地区試掘坑で検出したもので容器が出土。Ｅ溝・Ｇ溝は2～5mの間隔を置いて南東から北西に走る2条のＶ字溝。Ｅ溝は幅2.6m，深さ0.9mで，埋土は上下2層に大別でき，下層から弥生Ⅱ～Ⅳ期の土器と用途不明品（儀杖？）・高杯などの木器，上層からⅣ～Ⅴ期も混えて弥生Ⅲ期の土器が出土している。Ｇ溝は幅3.0m，深さ0.9mで，埋土は上下2層に大別でき，下層で弥生Ⅰ期新段階の土器が少量，上層で弥生Ⅲ期を主体とする土器が出土。木器には容器・用途不明品がある。

Ｎ溝は幅7m，深さ1.5mの自然流路で，埋土は10層に分かれ，最上層から第8層までは弥生土器・土師器・須恵器，第9・10層から若干量の土師器が出土している。4世紀後半にはじまり5世紀には機能を終えた溝で，東肩の傾斜面から曲柄鍬・同未成品・曲柄又鍬が3枚重なって出土した。Ｌ溝は東西に走る2条の溝で，南を南溝，北を北溝とする。一木鋤が出土した南溝は幅1.2m，深さ0.4mで，溝底から須恵器杯が出土している。

なお，第2阪和国道内遺跡調査会が行った発掘調査で出土した遺物整理事業は(財)大阪文化財センターが引き継いでいるが，四ッ池遺跡に関しては正式報告書は未刊である。

〔木器番号〕Ｆ地区試掘坑；*14505, 15406*　Ｅ溝；*12110, 13105, 14302*
Ｇ溝；*12912, 13206, 18104, 19713*
Ｌ溝南溝；*06204*　Ｎ溝；*04611, 04708, 04805, 19721*
ＧＡ57区大溝；*11602*

〔文　献〕第2阪和国道内遺跡調査会『昭和43年度第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書1』1969年
第2阪和国道内遺跡調査会『昭和44年度第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書2』1970年
石神怡・伊藤久嗣・他『池上・四ッ池1970』第2阪和国道内遺跡調査会1970年
第2阪和国道内遺跡調査会『昭和45年度第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書3』1971年
第2阪和国道内遺跡調査会『昭和46年度第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書4』

1971年

b　四ッ池遺跡　四ッ池遺跡調査会・堺市教育委員会　調査

第2阪和国道内遺跡調査会による発掘調査終了後，国道沿いの地域整備（浜寺船尾土地区画整理）に伴い，1973年3月～1980年9月に四ッ池遺跡調査会が道路部分約5万㎡の発掘調査を実施。その後，堺市教育委員会が主体となって街区部分の調査を継続している。

第2阪和国道内遺跡調査会の成果も含めて，四ッ池遺跡における遺構のひろがりはfig. 265のように概念化できる。すなわち，縄文時代の遺構群が2ヶ所（縄文A・B集落），弥生時代および古墳時代の集落地域が3ヶ所（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ集落），弥生時代の方形周溝墓群が2ヶ所（第Ⅰ・Ⅱ方形周溝墓群）の計7ヶ所のまとまりがあり，その間を自然河川が流路を変えつつ貫流する。

収録した弥生時代の木器は，第Ⅰ集落が立地する三光台地の東・西・北の三方を囲むように流れる自然河川（旧三光川）から出土したものが主体をなす。そのほか，三光台地の東側低地にある弥生時代中期の方形周溝墓の周溝から，多量の木屑・枝葉と一緒に出土した組合せ鋤身・容器がある。古墳時代の木器は，三光台地の縁辺を流れる自然河川および第Ⅲ集落の中央を流れる自然河川から出土したもので，いずれも5世紀代の土器と共伴している。

〔木器番号〕第35地区自然河川；*00604, 00803, 02413, 09201*
第32地区自然河川；*08904*　恵瑞池1G区第1砂層；*12919*
恵瑞池内自然河川；*05603*　第81地区方形周溝墓；*05606, 14405*
第31地区自然河川；*06609*　第83地区自然河川；*14203*
第86地区自然河川；*09403*

〔文　献〕四ッ池遺跡調査会『四ッ池遺跡－昭和49年度調査概要　その2－』1974年
樋口吉文『四ッ池遺跡－第80地区・第81地区－』昭和55年度国庫補助事業発掘調査報告，堺市教育委員会1981年
樋口吉文「四ッ池遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回研究集会資料1983年
樋口吉文・土山健史『四ッ池遺跡』堺市文化財調査報告第16集，堺市教育委員会1984年
樋口吉文『四ッ池遺跡発掘調査報告－YOC第86地区の調査－』堺市文化財調査報告第22集，堺市教育委員会1985年

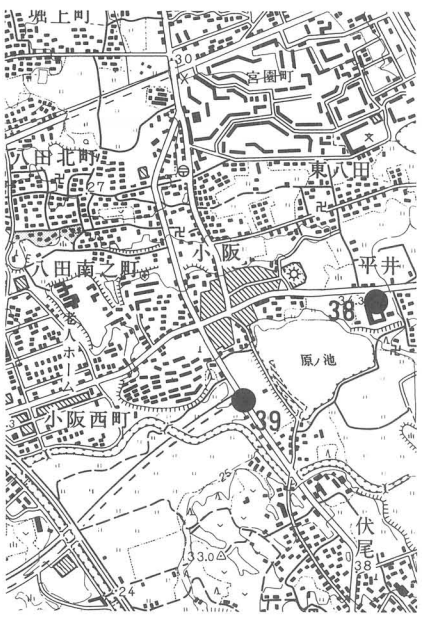


fig. 266　平井・小阪遺跡木器出土地点
(1:25,000　堺)

38　平井遺跡（fig. 266）　ひらい

堺市平井に所在。1980年の試掘調査で発見され，堺市教育委員会・(財)大阪文化財センターが，堺市立平井中学校・近畿自動車道和歌山線・府道松原～泉大津線などの建設工事に伴う発掘調査を実施。遺跡は丘陵部と谷部とに分かれ，丘陵部では建物群・瓦器焼成窯・粘土採掘坑など，谷部では自然河川・溝，間の傾斜地では須恵器窯を検出している。収録した木器は，1983年度に堺市教育委員会が実施した発掘調査において，4－2工区の南河川と呼んだ自然河川から，5～6世紀の須恵器とともに出土したものである。

〔木器番号〕*15112*

〔文　献〕白神典之『平井遺跡』堺市文化財調査報告第25集，堺市教育委員会1986年

39 小阪遺跡（fig. 266） こさか

堺市平井・小阪に所在。近畿自動車道和歌山線・府道松原～泉大津線の建設工事に伴い，(財)大阪文化財センターが1985年から発掘調査に着手。路線予定地に沿って1985年度に（その１）調査区，1986年度に（その２）（その３）（その４）調査区，1987年度に（その５）（その６，６－２）（その７，７－２）調査区と調査を進めた。泉北丘陵の北西部，石津川とその支流の陶器川とが形成した低位段丘および氾濫原に立地し，陶邑古窯跡群に隣接する。検出した遺構には，縄文時代・弥生時代の河川や土坑，古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・溝・河川，中世以降の水田などがある。

収録した木器は（その３）調査区の河川から出土。（その３）調査区は陶器川の南の低位段丘と一部氾濫原とを含み，５世紀後半を中心とする集落跡とその南西で南東から北西へ流れる河川などを検出。河川は幅20～26mで，その右岸や左岸の窪みに遺物が集中していた。木器には横鍬・木鎌・臼・木錘・浮子・梯子などがある。河川は長期間存続しているが，木器の堆積時期は５世紀後半から６世紀初めと考えられる。

〔木器番号〕*07906, 08403, 09416, 10524, 18407, 19212*

〔文　　献〕村上年生・三宮昌弘・他『小阪遺跡（その３）－調査の概要－』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987年

40 西浦橋遺跡（fig. 267） にしうらばし

堺市菱木に所在。西は鶴田池東遺跡，東は菱木下遺跡に接する。府道松原～泉大津線建設工事に伴い，1978年～1980年に大阪府教育委員会が，1981年～1982年に(財)大阪文化財センターが発掘調査を実施した。泉北丘陵内の栂丘陵の西北端にある洪積段丘の縁辺に位置し，遺跡の西部を南から北へ流れる和田川が形成した沖積地・氾濫原とその東にある洪積段丘中位面にまたがって立地する。東部段丘面では弥生時代の溝・方形周溝墓・土坑，古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・溝，奈良時代および中・近世の掘立柱建物・溝・土坑などを検出し，沖積地部分では縄文時代晩期から中・近世に至る包含層や弥生時代中期の河川，奈良時代の溝，中世の建物跡などを検出している。

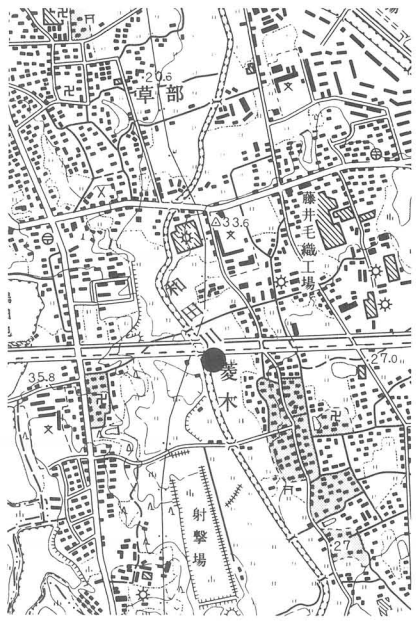


fig. 267 西浦橋遺跡木器出土地点
(1:25,000 堺)

収録した木器（腰掛）は，沖積地部分を検出した弥生時代中期の自然河川ＳＤＮ１から出土。ＳＤＮ１は幅10～15mで，蛇行地点では約20m。その蛇行地点では，流れに直交して川幅いっぱいに杭列群ＳＸ01を打ち込み，その東端から北西に向けて人工の溝ＳＤＡ１がのびる。木器はＳＤＮ１およびＳＸ01付近から，多量の植物遺体とともに出土。ほかに鍬身がある。

〔木器番号〕*17601*

〔文　　献〕石神怡・橋本高明・他「西浦橋遺跡」『府道松原大津線関連遺跡発掘調査報告書Ｉ』(財)大阪文化財センター 1984年

41 池上遺跡（fig. 268） いけがみ

和泉市池上町，泉大津市曽根に所在する弥生時代の拠点的集落遺跡。池上曽根遺跡とも呼ぶ。大阪湾南の沿岸部，海岸線から約２kmの標高10m前後の段丘上に立地する。1900年代の初めに発見され，1958年以降，和泉市教育委員会や泉大津高校地歴部が小規模な発掘・立会調査を行なってきた。第２阪和国道建設計画に伴い，1967年に大阪府教育委員会が範囲確認調査，

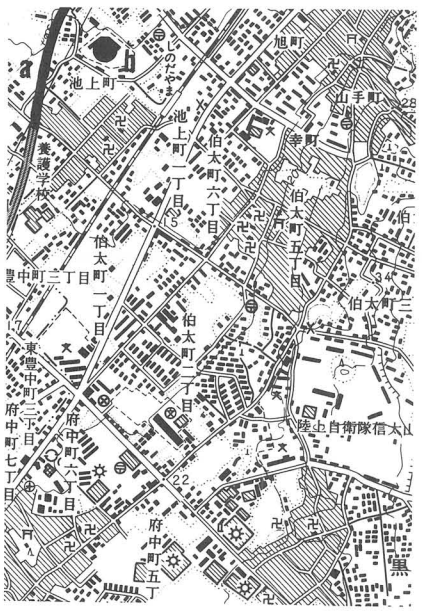


fig. 268　池上遺跡木器出土地点
(1:25,000　岸和田東部)

1969年～1971年に第2阪和国道内遺跡調査会が路線予定地幅40m，長さ600mにわたり発掘調査を実施。その後も，大阪府・和泉市・泉大津市の各教育委員会が調査を継続しており，総面積50万㎡以上と推定される遺跡全体の20分の1程度が明らかになり，1986年・1988年には約11万㎡が国指定史跡となった。収録した木器は，第2阪和国道内遺跡調査会の発掘調査，および和泉市教育委員会の発掘調査において出土したものである。

a　池上遺跡　第2阪和国道内遺跡調査会　調査

第2阪和国道内遺跡調査会が行なった発掘調査で出土した遺物の整理事業は，(財)大阪文化財センターが受託・実施している。

収録した木器は，弥生Ⅰ期の溝ＳＦ081（Ｇ溝）・ＳＦ082（ＧＡ溝）・ＳＦ083（ＧＢ溝），弥生Ⅱ期の溝ＳＦ075（Ｂ－Ⅱ溝）・ＳＦ079（Ｅ溝），弥生Ⅱ～Ⅲ期の溝ＳＦ077（Ｂ－Ⅲ溝），弥生Ⅲ～Ⅳ期の溝ＳＦ074（Ａ溝）・ＳＦ078（Ｃ溝），弥生Ⅴ期の溝ＳＦ084（ＮＡ溝）・井戸ＳＧ118（第5号井戸）・ＳＧ119（第6号井戸），弥生Ⅴ期～古墳時代の溝ＳＦ087（ＮＥ溝），弥生末～古墳初期の井戸ＳＧ109（Ｊ－1号井戸）およびＧＳ58区の弥生時代ピットから出土したものである。

ＳＦ081（Ｇ溝）は南西から北東へ流れる幅2.5m，深さ0.6mの溝で，鍬身未成品が出土。ＳＦ082（ＧＡ溝）は幅8mの東西溝で，組合せ鋤が出土。ＳＦ083（ＧＢ溝）は幅約20mで，ＳＦ082の北に並行する。斧膝柄未成品・鍬身未成品・組合せ鋤身・縦杓子・高杯などが出土。ＳＦ075（Ｂ－Ⅱ溝）は南北に走る三条の溝（Ｂ－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ溝）のひとつで，Ｂ－Ⅰ溝（弥生Ⅰ～Ⅱ期）を再掘開したもの。幅2.5m，深さ0.9mで，各種斧柄・鍬身とその未成品・鋤・小型臼・竪杵・紡織具・攪網枠・弓・杓子・各種容器・戈形・剣形・陽物形・鳥形など多種多様の木器が出土。ＳＦ079（Ｅ溝）は幅5m，深さ1mのＵ字溝。埋土は上下2層に大別でき，上層は弥生Ⅲ期，下層は弥生Ⅱ期に属する。下層から鍬身・泥除が出土。ＳＦ077（Ｂ－Ⅲ溝）はＳＦ075の東肩を切って掘開された幅3m，深さ0.6mの南北溝で，斧膝柄・組合せ鋤身・紡織具・籍などが出土。ＳＦ074（Ａ溝）はＢ－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ溝の東に並行する南北溝で，幅6.5m，深さ2.0m。斧膝柄・木針・鍬身・膝柄又鍬身・一木鋤・小型臼・籍・弓・簪・匙・高杯などが出土。ＳＦ078（Ｃ溝）はＳＦ074の東に並行する幅3.5m，深さ0.8mの南北溝で，膝柄又鍬身・鋤柄・掘り棒・匙・容器・鳥形などが出土。ＳＦ084（ＮＡ溝）は南東から北西へ流れる幅5m，深さ0.3mの溝で，掘り棒・攪網枠が出土。ＳＧ118（第5号井戸）は径0.86m，深さ1.05m，ＳＧ119（第6号井戸）は径1.5m，深さ1.1mの円形素掘りの井戸で，一木鋤と腰当てが出土。ＳＦ087（ＮＥ溝）は幅2mで，ＳＦ084内を流れる。斧膝柄が出土。ＳＧ109（Ｊ－1号井戸）は径1.3m，深さ2.25mの円形素掘りの井戸で，庄内式土器と共に竪杵が出土した。

〔木器番号〕ＳＦ081；*02706, 02907*　　ＳＦ082；*05403*

ＳＦ083；*00513, 03106, 05406, 12607, 13207, 20009*

ＳＦ075；*00109, 00201, 00202, 00209, 00211, 00302, 00308, 00313, 00402, 00504, 00802, 00904, 01902, 02905, 03006, 03103, 03107, 03108, 03204, 03205, 03206, 03301, 04302, 04304, 05306, 05407, 05502, 05701, 05708, 05909, 08501, 08504, 08515, 08601, 08605, 09103, 09520, 09615, 09803, 10105, 10603, 10604,*

10607, 11001, 11003, 12026, 12109, 12511, 12603, 12604, 12608, 12705, 12714, 12801, 12808, 12814, 12904, 12905, 12907, 12911, 12915, 12918, 13118, 13201, 13204, 13209, 13211, 14304, 14509, 14702, 14707, 15405, 16004, 16005, 16419, 16515, 16602, 16605, 17102, 18404, 18504, 18913, 20021, 20108, 20109

ＳＦ079；*02405, 03901*　　ＳＦ080；*01505*

ＳＦ077；*00108, 06004, 09715, 10812, 20102*

ＳＦ074；*00306, 01112, 02606, 03101, 03104, 03105, 04401, 06203, 07103, 08503, 10808, 11109, 12027, 12028, 12305, 13117, 18914*

ＳＦ078；*04406, 04413, 05404, 07110, 12304, 12809, 12813, 16603, 16607, 19610*

ＳＦ084；*07108, 10608*　　ＳＧ118；*07106*

ＳＧ119；*09705*　　ＳＦ087；*00111*

ＳＧ109；*08803*　　ＧＳ58区ピット；*04203*

出土地点不明；*03102, 03408, 12816*

〔文　献〕第２阪和国道内遺跡調査会『昭和43年度第２阪和国道内遺跡調査報告書１』1969年

第２阪和国道内遺跡調査会『昭和44年度第２阪和国道内遺跡調査報告書２』1970年

石神怡・伊藤久嗣・他『池上・四ッ池1970』第２阪和国道内遺跡調査会1970年

第２阪和国道内遺跡調査会『昭和45年度第２阪和国道内遺跡発掘調査報告書３』1971年

第２阪和国道内遺跡調査会『昭和46年度第２阪和国道内遺跡発掘調査報告書４』1971年

小野久隆・奥野都『池上遺跡』第４分冊の１・２　木器編，(財)大阪文化財センター1978年

松田隆嗣「木製遺物の樹種について」『池上・四ッ池遺跡』第６分冊　自然遺物編，(財)大阪文化財センター1980年

ｂ　池上遺跡　和泉市教育委員会　調査

1968年２月～1969年１月に，和泉市教育委員会が和泉市池上町393－１番地の仮称池上小学校予定地内で発掘調査を実施。当該地は池上遺跡の北東端にあたり，調査前は「千草池」という溜池であった。検出した遺構には，溝・土坑・ピット・落ち込み・杭列などがある。

収録した木器は溝２・溝８・落ち込み１・落ち込み３から出土。溝２は幅約９ｍ，深さ1.4ｍの東西に流れる自然河川で，溝内に堰や杭列を設けている。弥生Ⅰ期～Ⅴ期の土器が出土しているが，弥生Ⅱ期に始まり，古墳時代前期には完全に埋没していたと考えられる。最下層の暗灰色泥土から弓が出土。溝８は幅約３ｍ，深さ0.3ｍの南北溝で，埋土は上下２層に大別で

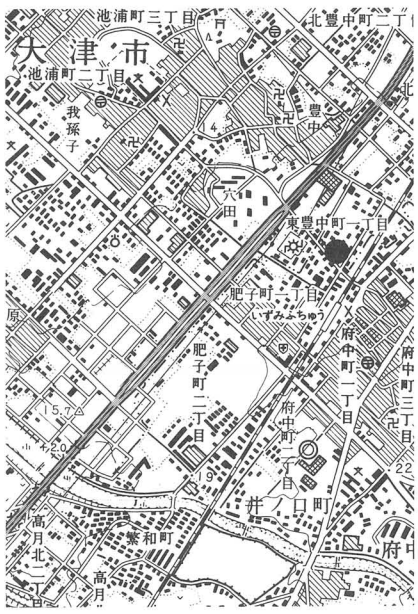


fig. 269　豊中遺跡木器出土地点
(1:25,000　岸和田東部)

きる。下層から弥生Ⅰ期，上層からⅡ～Ⅴ期の土器が出土しており，木器（又鍬・把手）は下層の暗灰色泥土から出土。落ち込み１は径約２m，深さ0.3mで，弥生Ⅰ・Ⅱ期の土器に伴い円板が出土。遺構の切り合いから，弥生Ⅱ期に限定できる。落ち込み３は長径2.75m，短径2.0m，深さ0.6mで，弥生Ⅴ期の土器とともに斧直柄・自在鉤が出土。

〔木器番号〕溝２；*11118*　　溝８；*02303, 17304*

落ち込み１；*14917*　　落ち込み３；*00905, 17307*

〔文　　献〕灰掛薫『池上遺跡－仮称池上小学校建設に伴う発掘調査概要－』仮称池上小学校予定地内遺跡調査会 1980 年

42　豊中遺跡（fig. 269）　とよなか

泉大津市豊中に所在。豊中地区・古池地区・上池地区の３地区に分かれる。かつては豊中遺跡と古池遺跡の２遺跡を区別していたが，現在は全体を豊中遺跡としている。1972 年～1973 年に古池の池底を大阪府教育委員会が調査し，古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・河川を検出。その後，1973 年 10 月～12 月，1974 年３月，1974 年 11 月～1975 年２月，1975 年４月～５月に豊中地区を，1974 年 10 月～11 月，1975 年２月～３月に上池地区を，それぞれ豊中・古池遺跡調査会が調査し，古墳時代の竪穴住居・河川，中世の井戸などを検出した。

収録した木器は主として上池地区の河川跡から，多量の古墳時代の土師器・須恵器（古式須恵器を含む）とともに出土した。５世紀代と考えられる木器は，直柄横鍬・鍬・鋤・田下駄・竪杵・木錘などの農具，紡輪・糸巻などの紡織具，刀把，容器，琴柱，刀形・剣形・船形などの祭祀具，叩板，腰掛や机脚，扉板，用途不明品など多種に及ぶ。また，６世紀代と考えられる木器には下駄がある。

〔木器番号〕上池地区河川；*06508, 07711, 08907, 09402, 09524, 09606, 09607, 09608, 11306, 11903, 11906, 13304, 13309, 13503, 15619, 16201, 16301, 16303, 16706, 17116, 17908, 18011, 18208, 18210, 18707, 19005, 19007*

上池地区包含層；*03505, 04607, 16208, 16707, 19523, 20024*

〔文　　献〕酒井龍一・正富博行・他『豊中・古池遺跡発掘調査概報（その３）』豊中・古池遺跡調査会 1976 年

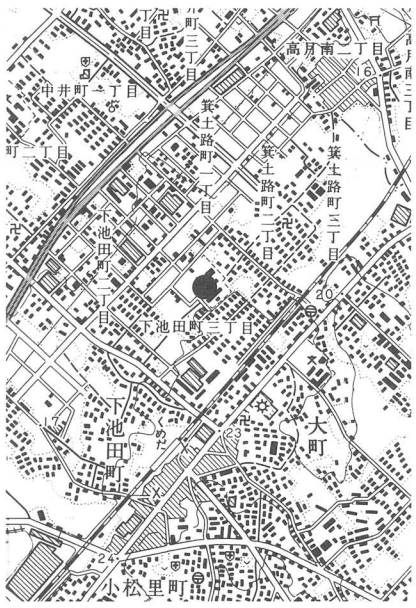


fig. 270　下池田遺跡木器出土地点
(1:25,000　岸和田東部)

43　下池田遺跡（fig. 270）　しもいけだ

岸和田市下池田町に所在。1976 年 10 月～1977 年５月に岸和田遺跡調査会が発掘調査を実施。標高 17m 前後の低・中位段丘上に立地する。弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居・井戸・溝・自然流路を検出。中心となる時期は弥生時代中期から後期である。収録した木器は自然流路から弥生時代中・後期の土器に伴って出土した。

〔木器番号〕*01903*

〔文　　献〕近藤利由「下池田遺跡」『木製農具について』埋蔵文化研究会第 14 回研究集会資料 1983 年

44 脇浜遺跡（fig. 271） わきはま

貝塚市脇浜に所在。1985年6月～1986年3月に(財)大阪府埋蔵文化財協会が発掘調査を実施。海岸線に近い近木川右岸の中位段丘上から段丘下の低位部にかけて立地する。古墳時代の掘立柱建物群・土器溜り，中世の性格不明のピット群などを検出。古墳時代前～後期の須恵器・土師器・製塩土器・蛸壺形土器・土錘，中世の瓦器・青磁・土釜，近世の瓦・陶磁器などが出土した。収録した木器（舵？）は古墳時代の自然流路の中州付近から古墳時代前期の土器とともに出土。

〔木器番号〕*09904*

〔文　　献〕藤田憲司・黒田慶一・他『脇浜遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第6輯，(財)大阪府埋蔵文化財協会1986年

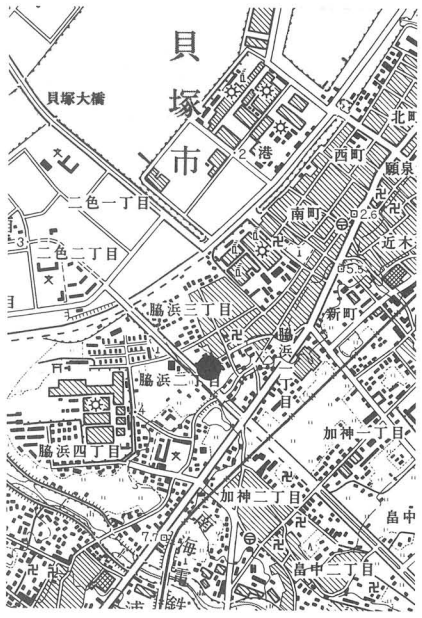


fig. 271 脇浜遺跡木器出土地点
(1:25,000 岸和田西部)

45 三軒屋遺跡（fig. 272） さんげんや

泉佐野市長滝に所在。1970年の府道工事で発見され，翌年に三軒家遺跡調査グループが発掘調査を実施。以後，継続的に調査を行なっている。樫井川右岸の標高20m前後の中位段丘上に立地し，東西約1,250m，南北約800mの範囲を占めると考えられる。縄文時代から中世に至る複合遺跡で，現在までに縄文晩期から弥生時代・古墳時代の竪穴住居，弥生時代中期の土器棺墓をはじめとする多くの土坑・溝などを検出している。

木器が出土したのは，1979年度の泉佐野市教育委員会による発掘調査で，弥生時代前期の鍬・組合せ鋤身・一木鋤未成品，古墳時代前期の曲柄又鍬・一木鋤が地点を異にする溝から出土。収録した組合せ鋤身は弥生Ⅰ期新段階の土器と共伴した。

〔木器番号〕*06006*

〔文　　献〕山本彰『三軒屋遺跡－昭和54年度の調査－』泉佐野市教育委員会1980年

fig. 272 三軒屋遺跡木器出土地点
(1:25,000 樽井)

E 兵 庫 県

1 広井遺跡（fig. 274） ひろい

城崎郡日高町広井字八幡田に所在する。1978年9月から1979年3月にかけて日高町教育委員会が発掘調査を実施。円山川の支流である田口川と阿瀬川とが合流する付近で，これら2つの河川が形成した北西向きの小さな谷のほぼ中央部に立地する。標高は100m弱。谷地形の内部で，ほぼ東西に伸びる旧河道を検出した。旧河道内から古墳時代前期の土器とともに，少量の木器が出土。製品となるものはごくわずかで，多くは自然木である。

〔木器番号〕*17903*

2 筒江片引遺跡（fig. 275） つつえかたびき

朝来郡和田山町筒江に所在。1979年4月から7月にかけて兵庫県教育委員会が発掘調査を実施。円山川の形成した狭い谷合平野に面する山の西裾に立地する。標高は約95m。調査地点は支流である黒川のために谷地形になっており，その谷（旧流路）内より弥生時代前期から中世にかけての土器とともに木器が出土している。木器は無頸壷など弥生時代前期のものも含む

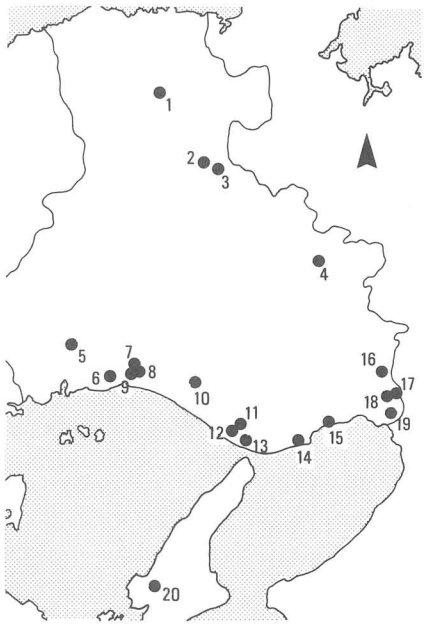


fig. 273 兵庫県の木器出土遺跡

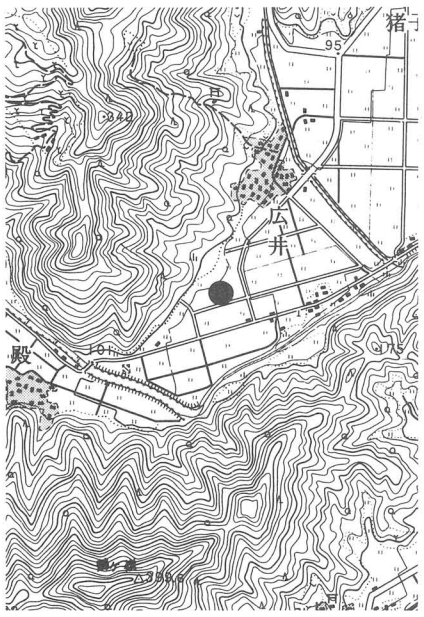


fig. 274　広井遺跡木器出土地点
(1:25,000　栃本)

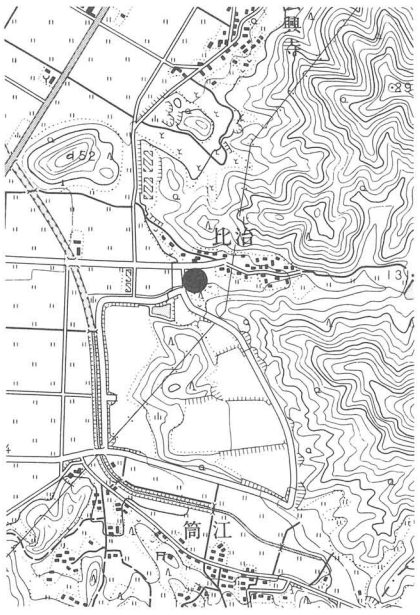


fig. 275　筒江片引遺跡木器出土地点
(1:25,000　但馬竹田)

fig. 276　宮浦遺跡木器出土地点
(1:25,000　矢名瀬)

が，多くは古墳時代前期に属する。東側につづく山頂には，古墳時代前期・中期の古墳群（筒江中山古墳群）がある。

〔木器番号〕D地区旧流路；*12806*

A地区旧流路；*03407, 04811, 07708, 09302, 10510, 10511, 10515, 13807, 14205, 14919, 15013, 16801, 17217, 17904, 17905, 19712, 19902*

〔文　　献〕渡辺昇「片引遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回研究会資料 1983年

3　宮浦遺跡（fig. 276）　みやうら

朝来郡山東町粟鹿字宮浦に所在。1977年6月から7月にかけて山東町教育委員会が発掘調査を実施した。円山川の支流である柴川と粟鹿川とが形成した北西向きの狭い谷の中央部に立地する。扇状地の下方にあたり，標高は約130m。調査区内は谷地形のため顕著な遺構がなく，東西方向に伸びるかなり広い旧河道の一部を検出した。その埋土の腐植土層から，古墳時代前期の土器とともに少数の木器が出土した。多くは自然木で，製品はごくわずかである。

〔木器番号〕*05104*

4　葭池北遺跡（fig. 277）　よしいけきた

多紀郡篠山町黒岡字八の坪・九の坪に所在。1977年11月から12月にかけて篠山町教育委員会が発掘調査を実施。篠山川の支流である黒岡川と藤岡川とにはさまれ，両河川が形成した広い谷部に立地する。篠山盆地の中央にある篠山城のすぐ北にあたる。標高は約210m。谷地形のため覆流水が多く湿潤で，顕著な遺構はなく，東から西に流れる大溝（旧河道）を検出したにとどまる。この大溝内から古墳時代前期の土器とともに多くの木器が出土した。

〔木器番号〕*15608*

〔文　　献〕篠山町教育委員会『古代　祖先のあゆみ』1980年

5　小犬丸遺跡（fig. 278）　こいぬまる

竜野市揖西町小犬丸に所在。1982年10月から1986年3月にかけて，兵庫県教育委員会が継続的に発掘調査を実施。南東に開いた東西に細長い谷あいの東端にあたり，南向きの扇状地上に立地する。標高は40～45m。推定古代山陽道のルート上にあり，「布施驛…」の木簡・「驛」銘墨書土器・播磨国府系瓦などの遺物，掘立柱建物・礎石立瓦葺建物・築地塀や古代山陽道と考えられる幅7mほどの道路状遺構などを検出しており，古代布施駅家跡と確定した。木器は南東部谷地形の湿地から，弥生時代後期～平安時代前期の多量の土器とともに出土。木器の多くは奈良時代～平安時代のもので，収録した鳥形に関しても，駅家に関連する遺物と評価する説がある。

〔木器番号〕*16601*

〔文　　献〕森内秀造・別府洋二・他『小犬丸遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告書第47冊，兵庫県教育委員会1987年

兵庫県教育委員会「よみがえる古代山陽道と布勢駅家－小犬丸遺跡（竜野市揖西町小犬丸）－」『ひょうごの遺跡』10号，1986年

山下史朗・山上雅弘『小犬丸遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告書第66冊，兵庫県教育委員会1989年
高橋美久二「駅家の門」『京都府埋蔵文化財論集　第1集－創立五周年記念誌－』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1987年

6　丁・柳ヶ瀬遺跡（fig. 279）　よろ・やながせ

姫路市勝原区丁に所在する。1979年10月から1981年1月にかけて，兵庫県教育委員会が継続的に発掘調査を実施した。大津茂川の形成した扇状地に立地し，標高は約5mをはかる。周囲には明確な条里制地割がみられる。調査区を南から北に2本の自然流路が流れ，その間の微高地上に弥生時代前期から平安時代の遺構がある。古墳時代前期の竪穴住居2棟のほかはほとんどが溝状遺構で，遺跡の南辺部分にあたると考えられる。自然流路からは縄文時代中期から晩期にかけての土器も含め，遺存状態の非常に良い各時代の土器が大量に出土した。木器も多く出土しており，弥生時代前期の彩文高杯（鉢？）・槽・鍬・弓，古墳時代前期の鍬・鋤・紡織具，奈良時代の人形などがある。

〔木器番号〕自然流路ＳＸ10；*01502, 01602, 11101, 13001, 15010, 16701*
自然流路ＳＸ03；*03703, 06405, 09506, 18506*
自然流路ＳＸ04；*02203*　赤褐色砂礫層；*09502*

〔文　献〕岡崎正雄・深井明比古・他『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第30冊，兵庫県教育委員会1985年

7　八反長遺跡（fig. 280）　はったんちょう

姫路市岡田字八反長に所在。1982年4月～10月に兵庫県教育委員会が発掘調査を実施した。標高約8mの沖積平野にある弥生時代前期から平安時代前半にかけての複合遺跡である。微高地を横切るように掘削された幅約2mの弥生時代前期の溝からは，遺存状態の良好な土器とともに丸木舟状木器が出土した。弥生時代前期～平安時代前期の自然流路からも，田下駄・部材をはじめとして古墳時代末に属する多量の木器が出土している。そのほか，弥生時代後期の方形周溝墓と土坑墓，平安時代の掘立柱建物などの遺構を検出した。

〔木器番号〕南地区Ｈ－１下層溝；*07503, 07509, 07703*
北地区Ｈ－２上層溝；*17906, 18207*

〔文　献〕平田博幸「八反長遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和57年度』兵庫県教育委員会1985年

8　播磨・長越遺跡（fig. 281）　はりま・ながこし

姫路市飯田字長越に所在する。1971年9月から1976年1月にかけて，兵庫県教育委員会が数次にわたる発掘調査を実施した。姫路城の南西にある手柄山の南，標高約5.0mの沖積平野部を流れる舟場川右岸の微高地上に立地する。集落遺跡の南端部分を調査しており，弥生時代終末から古墳時代前半にかけての竪穴住居20棟弱と，橋状構造物・井堰を伴った自然流路（大溝）を検出した。木器はこの自然流路から出土したもので，多くは井堰に絡まっていた。時期的にも竪穴住居群に伴うものである。また，自然流路の肩部からは，青銅製の鏡・鏃，滑石製の双孔円板・有孔円板・剣形品・勾玉などの祭祀関連遺物が出土している。

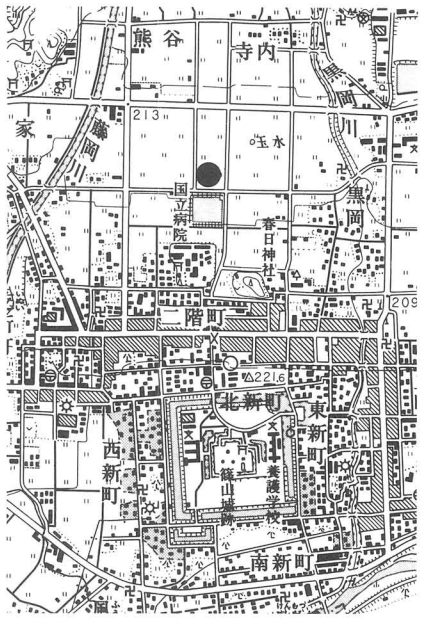


fig. 277　葭池北遺跡木器出土地点
(1:25,000　篠山)

fig. 278　小犬丸遺跡木器出土地点
(1:25,000　二木)

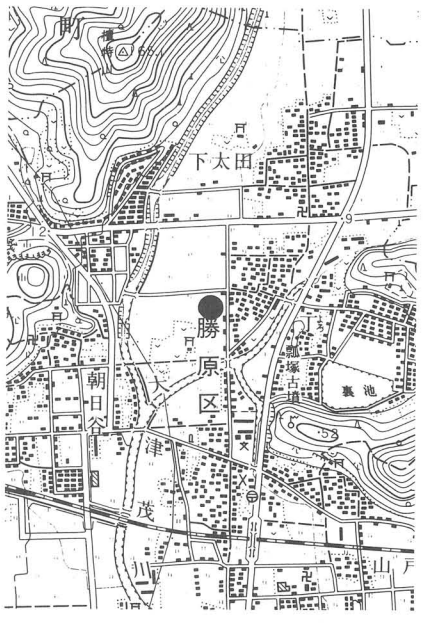


fig. 279　丁・柳ヶ瀬遺跡木器出土地点
(1:25,000　網干)

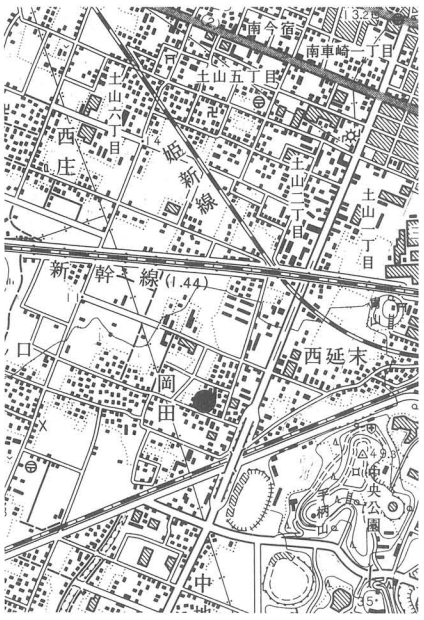


fig. 280　八反長遺跡木器出土地点
(1:25,000　姫路南部)

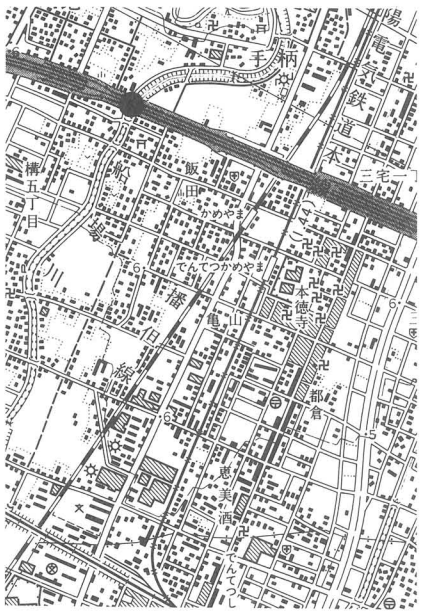


fig. 281　播磨・長越遺跡木器出土地点
(1:25,000　姫路南部)

fig. 282　播磨・権現遺跡木器出土地点
(1:25,000　姫路南部)

〔木器番号〕大溝；*00311, 01111, 02306, 03501, 04601, 04706, 07710, 08910, 09107, 09401, 09612, 09616, 09618, 11409, 11416, 12208, 13701, 13805, 14902, 16114, 16503, 17702, 17902, 17909, 17910, 18013, 18018, 18509, 19910, 20111*

包含層；*04702, 10003*

〔文　　献〕松下勝・渡辺昇・岡崎正雄・他『播磨・長越遺跡』兵庫県文化財調査報告書第12冊，兵庫県教育委員会1978年

9　播磨・権現遺跡（fig. 282）　はりま・ごんげん

姫路市飾磨区構字権現に所在。1971年8月から9月にかけて，兵庫県教育委員会が発掘調査を行なった。舟場川の右岸，市川が形成した標高約3mの沖積平野内の谷地形部に立地する。南北に走る幅約5mの旧流路一条を検出。その中から弥生時代後期の土器とともに鍬・鋤・田下駄など若干の木器が出土している。

〔木器番号〕*07412*

〔文　　献〕山本三郎・松下勝・他『播磨・権現遺跡－兵庫県姫路市権現遺跡調査概報－』兵庫県文化財調査報告書第6冊，兵庫県教育委員会1972年

10　東神吉遺跡（fig. 283）　ひがしかんき

加古川市東神吉町字砂部・土江・荒木・西井ノ口にまたがって所在する。1967年1月から8月にかけて，兵庫県教育委員会と加古川市教育委員会が発掘調査を行なった。加古川の右岸にあり，扇状地状地の微高地上に立地する。標高約5mをはかり，周囲には条里制地割の痕跡が若干ある。検出した遺構は弥生時代前期と後期の土坑と溝のみで，その多くは弥生時代前期に属する。木器は調査区南端の谷部低湿地より鍬が6点出土している。いずれも未成品で，その製作工程を追うことができる。

〔木器番号〕南端低湿地；*02602, 02802, 03005*

〔文　　献〕石野博信・松下勝『兵庫県加古川市東神吉遺跡第2次発掘調査略報』兵庫県教育委員会・加古川市教育委員会1968年

11　玉津田中遺跡（fig. 284）　たまつたなか

神戸市西区玉津町田中に所在する。1982年から現在（1990年）に至るまで，兵庫県教育委員会が発掘調査を継続している。条里制地割が明確に遺存する明石川の右岸，標高約19mの段丘上とその下の沖積地に立地する弥生時代～古墳時代・中世の複合遺跡である。住居・水田・墓がセットで確認されており，弥生時代における明石川中流域の拠点的集落である。住居群は弥生時代の全時期と古墳時代前・中期のものを確認しており，周溝墓は弥生時代前・中期に築かれている。いずれも微高地上に立地するが，弥生時代前期には住居群と墓域が別の微高地上に立地し，弥生時代中期になると同じ微高地上に立地するようになる。水田は微高地間の窪地を利用し，弥生時代前・中期，古墳時代前・中期の各時期のものがある。出土木器は質・量とも卓越し，その遺存状態もきわめて良好である。その多くは弥生時代中期に属し，主として住居群東側の旧河道から出土している。なかには未成品も多く含まれているので，生産工房も遺

跡の中にあったと思われる。

〔木器番号〕　竹添区旧河道；*00317, 02404, 04405, 07806, 07811, 07813, 07816, 07828, 07829, 09707, 09717, 10823, 10825, 12313, 16002, 16016, 16502, 17303, 17309, 19606, 19805, 19815, 20019, 20105*

竹添１トレンチ７区土坑１；*05506*　竹添１トレンチ６区土坑１；*05807*

竹添１トレンチ２区土坑２；*11521*　竹添１トレンチ７区溝３；*12403, 16011*

竹添１トレンチ弥生Ⅲ期包含層；*12204, 12315, 16010, 16013*

Ｃ６－１トレンチ水路Ⅰ；*00103, 03813, 07821, 19404*

ＫＭトレンチ水路Ⅲ；*07807*

〔文　献〕山本三郎・山本雅和・岸本一宏・他『玉津田中遺跡調査概報Ⅰ－昭和57・58年度確認調査概報－』兵庫県教育委員会1984年

深井明比古「掘り出された弥生の“むら”－神戸市玉津田中遺跡－」『季刊　考古学』第19号，1987年

兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡現地説明会資料１』1986年

兵庫県教育委員会『玉津田中遺跡現地説明会資料２』1986年

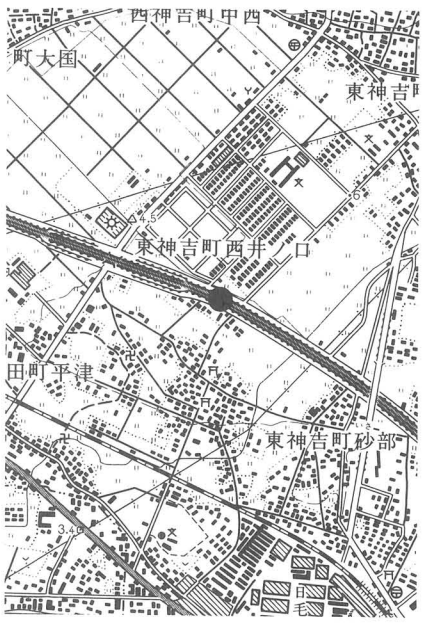


fig. 283　東神吉遺跡木器出土地点
(1:25,000　加古川)

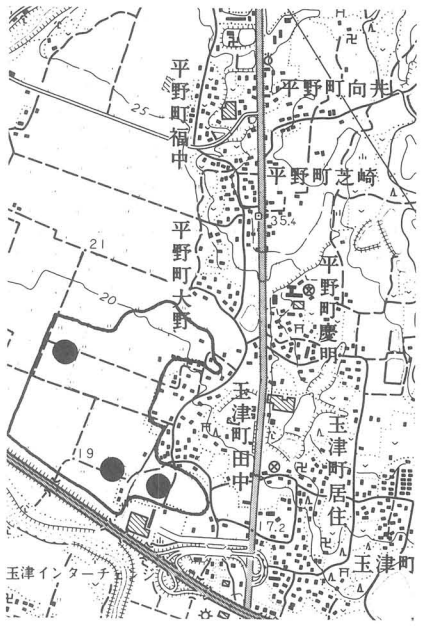


fig. 284　玉津田中遺跡木器出土地点
(1:25,000　東二見)

12　吉田南遺跡（fig. 285）　よしだみなみ

神戸市西区玉津町に所在。吉田・片山遺跡調査団が1976年から1980年まで11次にわたって発掘調査を実施した。明石平野の西方を限る吉田・片山丘陵と明石川との間にひらけた沖積平野部に立地する。弥生時代から奈良・平安時代，中世におよぶ複合遺跡で，弥生・古墳時代の竪穴住居100棟以上，真南北を基軸に整然と並んだ奈良時代後半から平安時代初期にいたる掘立柱建物34棟以上を検出した。遺跡の北東部で東南方向に流れる幅約40mの河川（旧河道）から，多量の土器とともに木器が出土。とくに河川を横断する木橋付近での木器が多い。共伴した土器などから８世紀後半～９世紀のものと考えられる（『木器集成図録　近畿古代篇』参照）。河川の西方にある溝11や溝１からも多くの木器が出土した。

本書に収録した木器は溝１から出土した。溝１は幅２～３m，深さ約１mで，埋土は４層に大別できる。弥生時代後期に開削され，須恵器出現前後には埋没したと考えられる。他の溝と複雑に重複し，切り合いがなかったのは北部のわずか35mほどである。木器の多くは古墳時代前期の土器類とともに粘土層から出土しており，斧膝柄・掛矢・紡輪・円板などがある。また，径10cm程の杭を１m前後の間隔で打ち込んでおり，同期に護岸を行なったとみられる。

〔木器番号〕溝ＳＤ１；*00413, 01202, 09523, 14913, 14916*

〔文　献〕吉田片山遺跡調査団『吉田南遺跡現地説明会資料』１～４，神戸市教育委員会1977～1980年

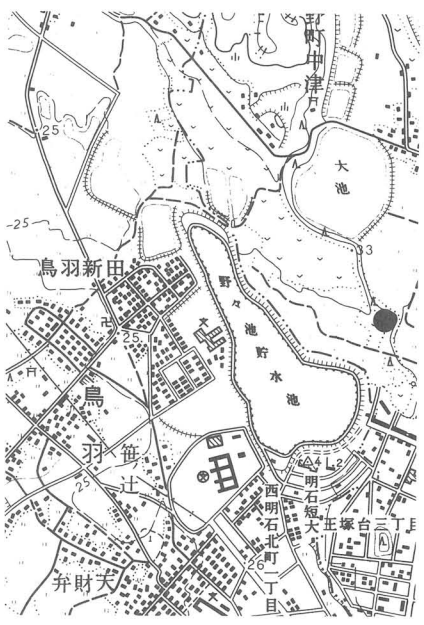


fig. 285　吉田南遺跡木器出土地点
(1:25,000　東二見)

13　新方遺跡（東方地点）（fig. 286）　しんぽう（とうほうちてん）

神戸市西区玉津町新方に所在。1984年８月～10月，同年11月～12月，1985年８月～10月にわたる３次の発掘調査を神戸市教育委員会が実施。明石平野の下流域，明石川と伊川とにはさまれた沖積地上に立地する。東西1.5km，南北約１kmの範囲を占める弥生時代から鎌倉時代に至る複合遺跡で，1970年の発見以降，弥生時代の円形周溝墓や竪穴住居，古墳時代の玉造

工房，鎌倉時代の掘立柱建物などの遺構を検出している。吉田南遺跡は明石川をはさんだ対岸にある。多数の木製品が出土した東方地点は新方遺跡の南端にあり，弥生時代中期の河道を検出した。河道は幅5～8.5m，深さ1.4mで北から南へ流れ，調査区の南端で二方向に分流する。収録した木器は，弥生土器・石器・碧玉原石・自然遺物とともにすべてこの河道内から出土した。木器には，鍬・鋤・又鍬・小型臼・弓・刀形・台付椀・合子・高杯・杓子・織機・環状木製品（腕輪？）・建築部材・箸などがある。共伴する弥生土器はすべて畿内第Ⅱ様式なので，これらの木器も同時期のものと考えられる。

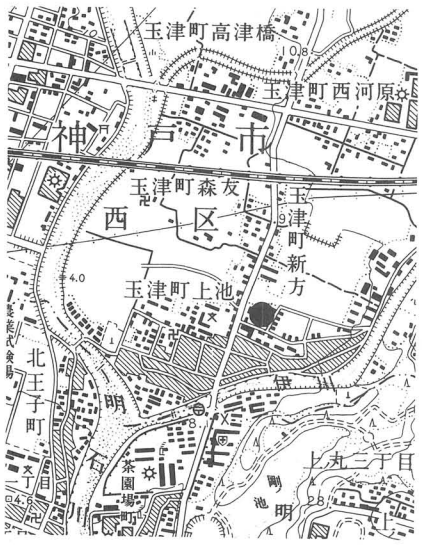


fig. 286　新方遺跡（東方地点）木器出土地点（1:25,000　明石）

〔木器番号〕河道；*01107, 01901, 01905, 02305, 03303, 06007, 08512, 09701, 09713, 09721, 10835, 12018, 12921, 14704, 16221*

〔文　　献〕渡辺伸行「新方遺跡（東方地点）－第1次調査－」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987年
渡辺伸行「新方遺跡（東方地点）－第2次調査－」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987年
渡辺伸行「新方遺跡（東方地点）－第3次調査－」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1988年

14　戎町遺跡（fig. 287）　えびすちょう

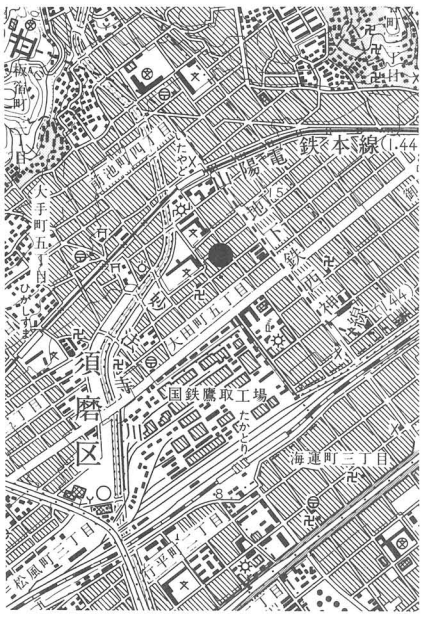


fig. 287　戎町遺跡木器出土地点（1:25,000　神戸南部）

神戸市須磨区戎町3丁目に所在。1987年6～9月に神戸市教育委員会が発掘調査を実施（第1次調査）。妙法寺川の左岸，同川が形成した扇状地末端から沖積地への変換点に立地する。弥生時代前期後半以前の水田，前期後半の土坑や旧河道，中期の竪穴住居や溝，弥生時代末期～古墳時代初頭の土坑など4時期にわたる遺構面を検出している。

収録した木器は，弥生時代前期後半の旧河道内から，完形品を含む多量の弥生土器（畿内第Ⅰ様式新段階に併行）とともに出土している。河道の埋土は上下2層に大別でき，下層の黄色砂から鍬と編み物，上層から鍬未成品・原木などが出土。下層上面では杭を円形に打ち込んだ施設（円形杭列遺構）を6基検出しており，うち1基には鍬未成品を立てかけていたことから，木器生産に関わる施設と考えられる。

〔木器番号〕旧河道下層；*01707*

〔文　　献〕山本雅和・千種浩・他『神戸市須磨区戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会1989年

15　北青木遺跡（fig. 288）　きたおおぎ

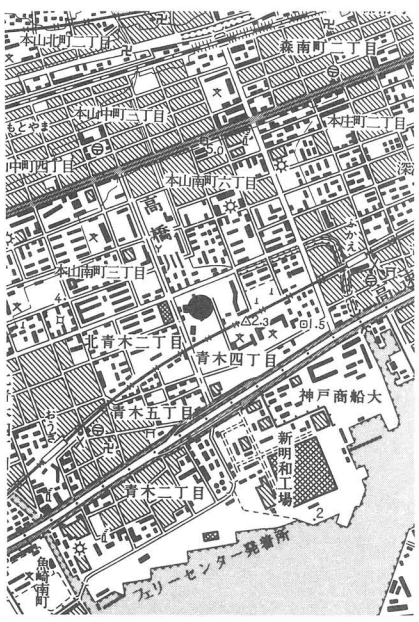


fig. 288　北青木遺跡木器出土地点（1:25,000　西宮）

神戸市東灘区北青木1丁目に所在する。1984年6月～7月に兵庫県教育委員会が発掘調査を実施。縄文海進後の海退時に形成された3条の砂帯のうちの最北部にある砂帯上に立地する。海岸線に近く，標高は約2mと低い。砂帯上では北東方向に走る弥生時代前期の溝と，その北側にある時期不明の柱穴群を確認したのみで，遺跡の中心はさらに北側にあると思われる。砂帯間は後背湿地となっており，水田に利用されていた。収録した木器は，砂帯の南を東西に伸びる旧河道（水路）から多量の弥生時代前期の土器や石器とともに出土した。

〔木器番号〕*15006, 18601*

〔文　　献〕小川良太・山下史朗・他『北青木遺跡』兵庫県文化財調査報告書第36冊，（財）

兵庫県文化協会 1986 年
山下史朗「北青木遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和 59 年度』兵庫県教育委員会 1987 年

16　栄根遺跡（fig. 289）　さかね

川西市栄根 2 丁目・栄町に所在する。1979 年 1 ～ 2 月の第 1 次調査以降，1987 年 12 月までに兵庫県教育委員会・川西市教育委員会・川西市遺跡調査会が22次におよぶ発掘調査を継続している。猪名川が形成した標高 26m 前後の沖積地に立地する弥生～古墳時代，平安～鎌倉時代にまたがる複合遺跡である。古墳時代以前には，東西両微高地の間を自然河川が南流していた。西部微高地には弥生時代前期の溝や中期の方形周溝墓があり，後期には竪穴住居からなる集落を形成し，古墳時代後期まで継続する。東部微高地でも弥生時代後期の溝や古墳時代中期の竪穴住居を検出している。奈良時代には両微高地間の低地は埋没し，河川も流路を変えて北西にある台地緑辺に沿って流れ，かつての東西微高地部は水田化する。平安時代を中心とする掘立柱建物群は，主として水田の北側に分布する。

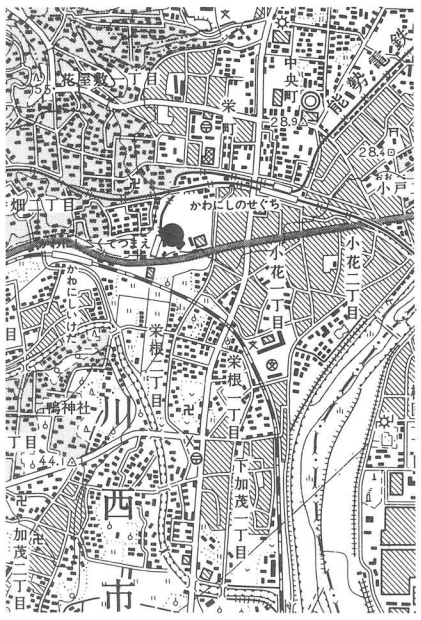


fig. 289　栄根遺跡木器出土地点
（1:25,000　伊丹）

収録した紡錘は，1986 年 5 月～1987 年 12 月に実施した第 19 次調査の出土品。東西微高地の間を南流する弥生時代後期の自然河川 4 の下層から出土したもので，ほかに曲柄又鍬・梯子などの木器もある。自然河川 4 は幅 9 ～15m で，東部微高地の緑辺に沿って流れていたが，古墳時代前期までに埋没し水田化する。

〔木器番号〕*09514*

〔文　　献〕岡野慶隆『川西市栄根遺跡－第19次発掘調査報告－』川西市遺跡調査会 1989 年

17　原田西遺跡（fig. 290）　はらだにし

伊丹市岩屋と大阪府豊中市にまたがって所在する。1975 年 11 月より 1983 年 9 月にかけて，兵庫県教育委員会が継続的に発掘調査を実施した。猪名川の左岸に形成された沖積地内の，南北に伸びる微高地上に立地する。広義的には次項で述べる田能遺跡もこの微高地の南端に立地することになる。標高は約 6 m で，周囲には条里制地割が見られる。弥生時代中期の方形周溝墓11基と古墳時代前期・中世・近世の溝を検出した。木器は遺跡の北西部にある弥生時代中期の溝（Y－1 溝）内と，周溝墓群の西側を南北に流れる弥生時代から古墳時代にかけての自然流路（Y－18溝）内から出土している。Y－18溝は一部を杭で護岸している。

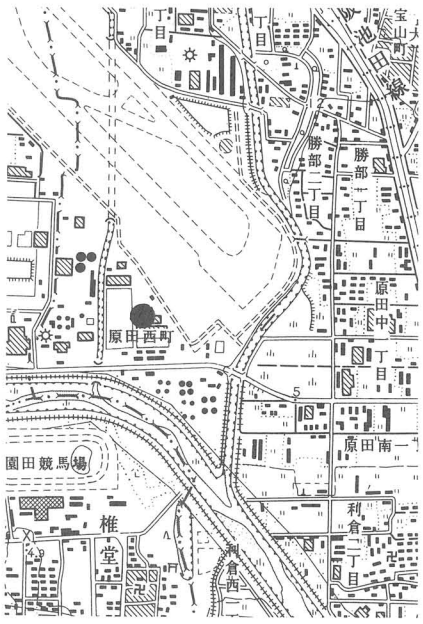


fig. 290　原田西遺跡木器出土地点
（1:25,000　伊丹）

〔木器番号〕Y－1 溝；*04404*　　Y－18溝；*05705, 07809*

〔文　　献〕森内秀造「原田西遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第 14 回研究集会資料 1983 年
加古千恵子「原田西遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和 56 年度』兵庫県教育委員会 1984 年
森内秀造「原田西遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報　昭和 58 年度』兵庫県教育委員会 1986 年

17　田能遺跡（fig. 291）　たのう

尼崎市田能字中ノ坪に所在する。1965 年 10 月より 1966 年 9 月にかけて，尼崎市教育委員会と尼崎市田能遺跡発掘調査委員会が発掘調査を行なった。標高約 7 m をはかる沖積平野内の微

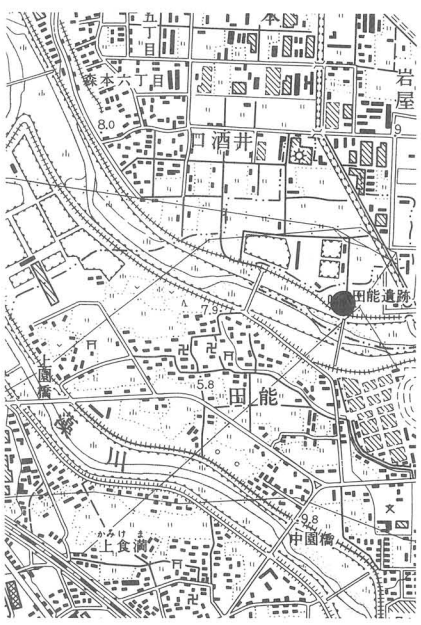


fig. 291　田能遺跡木器出土地点
（1:25,000　伊丹）

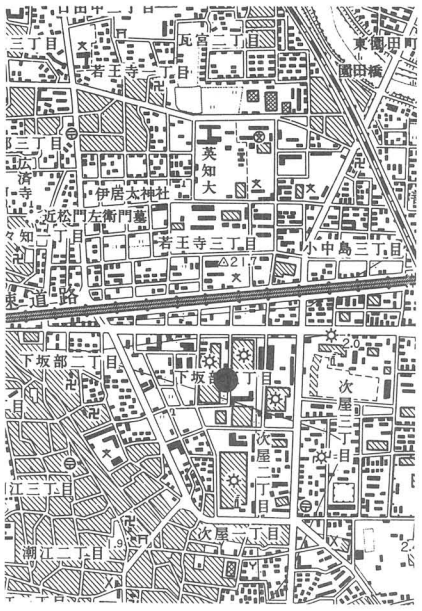


fig. 292　下坂部遺跡木器出土地点
(1:25,000　大阪西北部)

高地上にあり，猪名川の左岸に位置する。弥生時代前期から古墳時代前期にまたがる複合遺跡である。竪穴住居は弥生時代中期のものが3基のみであるが，弥生時代中期から後期の土器棺墓，同後期の木棺墓，弥生時代中期と古墳時代前期の方形周溝墓，古墳時代前期の木蓋土坑墓，多量の土器を包含する各時代の溝や土坑などを検出した。木棺墓などには遺存状態が非常に良い人骨もみられ，その一部では多数の管玉，銅釧などを副葬していた。また，弥生時代中期の土坑の一つからは，銅剣の鋳型の破片も出土した。木器の匙および片口未成品（？）は，弥生時代後期の溝（第6Ｙ調査区第2溝）から出土した。

〔木器番号〕*12311, 12712*

〔文　　献〕須崎元一・村川行弘・他『田能遺跡概報』尼崎市文化財調査報告第5集，尼崎市教育委員会・尼崎市田能遺跡発掘調査委員会 1967年
福井英治・岡田務・村川行弘・他『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告第15集，尼崎市教育委員会 1982年

19　下坂部遺跡（fig. 292）　しもさかべ

尼崎市下坂部字溝手に所在。1950年から1973年にかけて尼崎市教育委員会が継続的に発掘調査を行なった。猪名川（藻川）の形成した沖積平野内の微高地南端に立地する。標高は約4mをはかり，周囲に条里制地割がみられる。顕著な遺構は確認されていないが，弥生時代後期から古墳時代前半の土器とともに，滑石製の勾玉，重圏素文鏡などが出土している。木製の扉板は古墳時代前半の井戸枠に転用したものである。この井戸は祭祀的な性格をもつが，周辺の遺構は未確認である。

〔木器番号〕*19009*

〔文　　献〕村川行弘「考古学からみた尼崎」『尼崎市史』第1巻，尼崎市役所 1966年

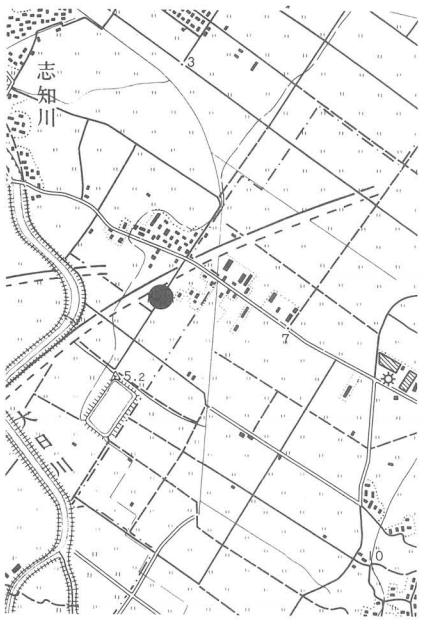


fig. 293　淡路・志知川沖田南遺跡木器出土地点 (1:25,000　広田)

20　志知川沖田南遺跡（fig. 293）　しちがわおきたみなみ

三原郡西淡町志知川に所在する。1978年7月より1982年9月まで継続的に兵庫県教育委員会が発掘調査を行なった。遺跡は三原川の形成した沖積平野にあるが，微地形でみるとその支流である大日川右岸の谷状地形の中に立地する。河口に近いため，標高は約10cm以下である。弥生時代終末から古墳時代前半にまたがる3面の水田跡と溜め池状遺構，旧河道などを確認した。北東に隣接する微高地上には，この水田に対応する集落と思われる雨流遺跡がある。木器は北側の旧河道から出土しており，水田跡と同時期のものと思われる。

〔木器番号〕*04902, 09120*

〔文　　献〕松下勝・別府洋二・水口富雄・他『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県文化財報告書第40冊，兵庫県教育委員会 1987年

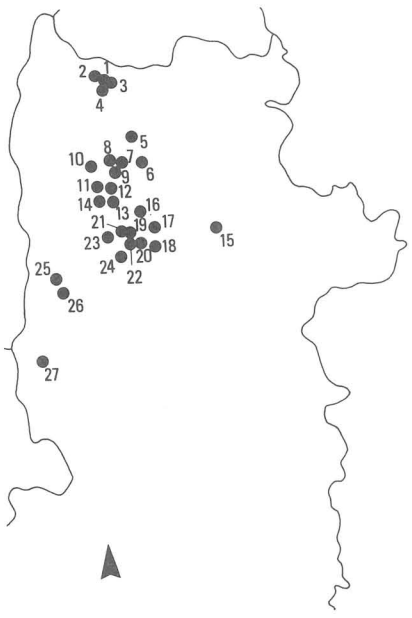


fig. 294　奈良県の木器出土遺跡

F　奈　良　県

1　平城宮下層遺跡（fig. 295）　へいじょうきゅうかそう

奈良市佐紀町を中心に所在。1959年以降，奈良国立文化財研究所が発掘調査と保存整備を継続している「特別史跡・平城宮跡」内にある宮造営以前の遺跡群の総称。弥生～古墳時代の

集落や自然流路，削平された古墳，７世紀の寺院や下ッ道側溝などがある。その多くは平城宮造営時に削平を受けたり，整地土下に埋没しており，主として奈良時代の遺構が稀薄な部分のみで完掘しているため，全貌は必ずしも明らかではない。

平城宮跡は奈良盆地の北端，京都府との境界をなす奈良山丘陵から東南に伸びる支丘の南麓に立地する。宮造営以前には，宮域北部で西・中央・東の３つの小支丘が南にのび，その間は浅い谷となり，南に平野がひろがっていた。中央小支丘の尾根上には５世紀の前方後円墳である市庭古墳（平城陵古墳）・神明野古墳，丘陵先端には７世紀後半の佐紀廃寺，宮域西南隅の微高地上には弥生Ｖ期の集落や墓地，南の平野部には古墳時代の集落が存在した。収録した木器は，谷から平野部を流れる旧流路や，集落にともなう人工水路から出土している。

〔文　　献〕佐藤興治・町田章・他『平城宮発掘調査報告Ｘ』奈良国立文化財研究所学報第39冊，奈良国立文化財研究所 1981 年

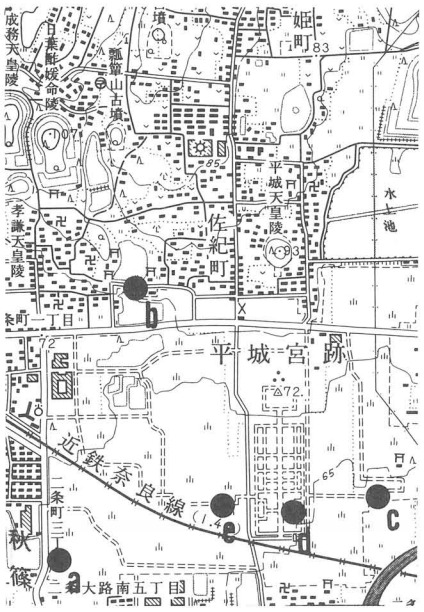


fig. 295　平城宮下層遺跡木器出土地点
(1:25,000　奈良)

ａ　宮域西南隅の下層溝ＳＤ1579（６ＡＤＨ－Ｊ区）

1963 年度に実施した平城宮西南隅の発掘調査（第 14 次調査）において，弥生Ｖ期の集落・墓地を検出した。遺構には竪穴住居 10 棟，溝数条，方形周溝墓 10 基，壷棺墓２基，土坑多数などがある。収録した木器は，西南から北東にのびる２条の斜行溝のうちの北溝ＳＤ1579から出土した。溝の幅は 3.5m，深さ 1.5m で，流路方向は旧秋篠川に直交し，居住区や墓域を画す境界溝のひとつと考えられる。弥生Ｖ期の土器とともに，鍬身・泥除・杓子形木器などが出土。

〔木器番号〕*01805, 03807, 12202*

〔文　　献〕横山浩一・工楽善通「昭和 39 年度平城宮跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報 1965』1965 年

ｂ　佐紀池の下層河川ＳＤ8520（６ＡＣＡ－Ｗ区）

平城宮跡の西北部，佐紀西町と佐紀中町との間にある佐紀池は，明治17年に築堤し，狭い谷筋に湛水した潅漑用溜池であるが，1974 年度の第 92 次調査において奈良時代の池汀を検出し，前身が平城宮内園池ＳＧ8500であることが判明した。1976 年度の第101次調査では，現佐紀池の北岸を発掘調査し，奈良時代園池の堆積土を除去した地山面で，古墳時代の流路２条と堰２ヶ所を検出した。宮造営以前の旧地形では，西と中央の小支丘の谷間にあたる。収録した木器は，調査区中央を北から南へ流れる河川ＳＤ8520から出土。河幅は約５ｍ，深さ 1.0m で，途中で２つに分流する。分流地点には堰ＳＸ8524を設ける。埋土は３層に大別でき，各層から４世紀の土師器・木器・自然木・種子・昆虫遺体が出土している。

〔木器番号〕*05003, 06406, 06908, 09102, 09113, 09714, 12219, 18519, 19210, 20001*

〔文　　献〕佐藤興治・町田章・他『平城宮発掘調査報告Ｘ』奈良国立文化財研究所学報第39冊，奈良国立文化財研究所 1981 年

ｃ　東院地区南端の下層河川ＳＤ4992（６ＡＡＧ－Ｇ，６ＡＡＨ－Ｒ，６ＡＬＳ－Ｉ区）

東院地区は，宮造営以前の旧地形では，東小支丘およびその西側の谷間を含む。1966・1967 年度に実施した第 39・43 次調査では，この東小支丘の南端において，削平された一辺 10m の方墳ＳＸ5700，掘立柱建物ＳＢ5755，土坑，河川ＳＤ4992などの下層遺構を検出した。木器が

出土したＳＤ4992は，北西から南に向けて「く」の字形に屈曲して流れ，小子門の東を通って宮域外へとのびる。幅３～４ｍ，深さ 0.6m で，５世紀初頭の土師器とともに斧膝柄・一木鋤・鋤柄・横槌・刀形などの木器が出土している。

〔木器番号〕*00407, 05312, 06504, 06602, 06702, 06707, 06910, 09123, 09521, 14912, 15113, 16202, 16218, 17105, 19901, 20110*

〔文　　献〕猪熊兼勝・森郁夫「昭和 41 年度平城宮発掘調査概報」『奈良国立文化財研究所年報 1967』1967 年
阿部義平「奈良国立文化財研究所要項」『奈良国立文化財研究所年報 1968』1968 年

ｄ　第２次朝堂院地区東朝集殿の下層河川ＳＤ6030（６ＡＡＷ－Ｂ，６ＡＡＸ－Ａ区）

1968 年度に実施した第48次調査では，第２次朝堂院の東朝集殿ＳＢ6000の下層において，北西から南東に向けて蛇行して流れる河川ＳＤ6030を検出した。宮造営以前の旧地形では，中央小支丘の南端裾にあたる。河幅は４～６ｍ，深さ 0.9～1.3m で，埋土は上下２層に大別できる。木器は両層から出土しているが，これに伴う土器群には明瞭な時期差がある。

〔木器番号〕ＳＤ6030下層；*00404, 02104, 02202, 04507, 05303, 05315, 07901, 10610, 14201, 15304, 18910, 19106, 19107, 19602*

ＳＤ6030間層；*00406*

ＳＤ6030上層；*00309, 01207, 03610, 04907, 05809, 06404, 07415, 07701, 07905, 09215, 09808, 09810, 11511, 11512, 17106, 17202, 17311, 17812, 18023, 18408, 19710, 19720*

出土層位不詳；*01120, 01121, 12203, 13801, 15303, 15905, 17104*

〔文　　献〕佐藤興治・町田章・他『平城宮発掘調査報告Ⅹ』奈良国立文化財研究所学報第 39 冊，奈良国立文化財研究所 1981 年

ｅ　第１次朝堂院地区南方の下層河川ＳＤ11000と堰11005（６ＡＢＨ・Ｊ・Ｗ－Ａ・Ｂ地区）

第１次朝堂院の南方には竪穴住居・掘立柱建物から成る古墳時代の集落が存在した。1982 年度の第 146 次調査，1985 年度の第 171 次調査では，この集落を東端を蛇行しながら北から南へ貫流する河川ＳＤ11000を検出し，多量の土師器，少量の須恵器とともに多数の木器が出土した。河幅は４～６ｍ，深さ 1.5m で，その埋没後，小規模な河川ＳＤ11001がやや東にずれて南流するが，両者の出土木器を弁別するに至っておらず，本書ではＳＤ11000出土品として一括している。第 146 次調査区では，ＳＤ11000の底で横木を組んだ堰状遺構を検出しており，この周辺で出土した木器は，堰ＳＸ11005出土として別記した。

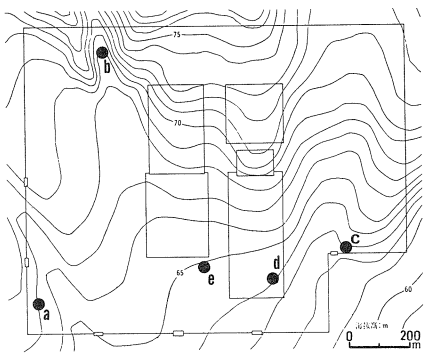


fig. 296　平城宮の旧地形と下層遺構の関係

〔木器番号〕ＳＤ11000；*00303, 00315, 00411, 00412, 00512, 01102, 01109, 01117, 01201, 01511, 03607, 03810, 04307, 04504, 04605, 04808, 04904, 04905, 05209, 06906, 06907, 06909, 07902, 08005, 08519, 08906, 09017, 09315,*

09316, 09404, 09712, 10840, 10841, 11310, 11316, 11401, 11408, 11524, 11529, 11706, 13305, 13501, 13601, 13603, 14406, 14918, 15803, 16113, 16203, 17115, 17802, 17807, 17810, 17811, 18016, 18017, 18204, 18211, 18310, 18313, 18505, 18610, 18617, 18618, 18712, 18809, 18906, 19104, 19203, 19316, 20006, 20113

堰ＳＸ11005；*00409, 00414, 05107, 05208, 09317, 09522, 18719, 20003, 20015*

〔文　　献〕杉山洋「第一次朝集殿推定地の調査　第146次」『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所1983年

花谷浩「推定第一次朝堂院東朝集殿地区の調査」『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所1986年

2　西隆寺下層遺跡（fig. 297）　さいりゅうじかそう

奈良市西大寺東町に所在。西隆寺は8世紀後半に称徳女帝が建立した官営の尼寺で，寺地は平城京右京一条二坊九・十・十五・十六坪の4町を占める。1971～1973年に西隆寺調査委員会，1982年に奈良大学文化財学科，1989～1990年に奈良国立文化財研究所が計10次にわたる発掘調査を実施し，金堂・塔・東面回廊・東門および西隆寺造営以前の各期の遺構を検出している。

西隆寺下層遺跡は寺造営以前の遺構の総称で，縄文晩期の溝，古墳時代の土器溜，8世紀前半～中頃の平城京条坊や宅地に関連する遺構がある。収録した刀の木製把頭は，西隆寺東門の西北方で検出した古墳時代の土器溜と考えられる包含層ＳＸ037から出土した。須恵器・土師器・少量の製塩土器と糸巻腕木が共伴している。なお，糸巻腕木は『木器集成図録　近畿古代篇』に収録した。

〔木器番号〕*11305*

〔文　　献〕黒崎直・他『西隆寺発掘調査報告書』西隆寺跡調査委員会1976年

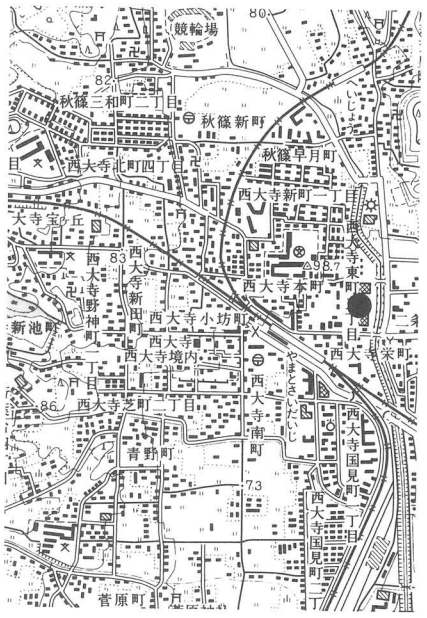


fig. 297　西隆寺下層遺跡木器出土地点
(1:25,000　奈良)

3　平城京下層遺跡（fig. 298）　へいじょうきょうかそう

平城京内における条坊制施行以前の遺構群をさす一般名称であるが，本図録では奈良市二条大路南一丁目に所在する奈良市庁舎建設工事に伴う発掘調査で検出した遺構をさす。正確には，平城京左京三条二坊十・十五坪下層遺跡である。1972年の予備調査成果を踏まえ，1973年8～10月，1974年2～6月に奈良国立文化財研究所が発掘調査を実施（６ＡＦＩ－Ｈ・Ｇ区第83・86次調査）。平城京条坊・宅地に関する遺構と古墳時代の河川2条，中世河川の氾濫跡を検出した。収録した木器は，調査区の東から西南西に向って流れる2条の河川のうちの南側の河川ＳＤ881から出土した。幅3～7.5m，深さ1.2mで，埋土は3層に大別できる。大量の土師器，少量の須恵器とともに，農具・祭祀具・雑具の各種木器が出土した。

〔木器番号〕*01203, 03503, 03701, 05005, 05006, 05007, 05313, 06607, 06703, 06710, 07009, 08813, 09114, 09405, 09406, 09501, 11414, 11417, 13311, 13702, 14901, 15108, 16112, 16417, 16504, 16713, 17005, 17006, 17007, 17009, 17219, 17505,*

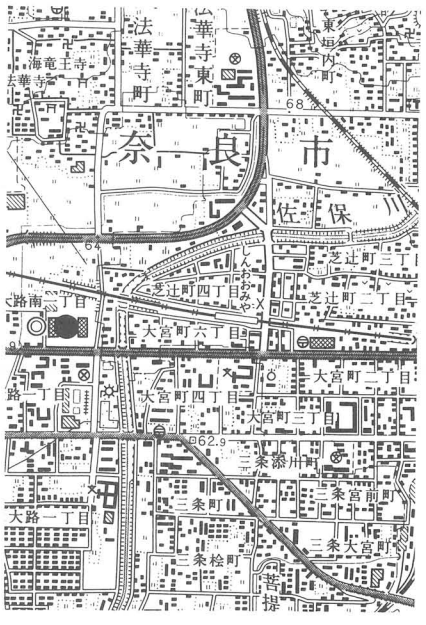


fig. 298　平城京下層遺跡木器出土地点
(1:25,000　奈良)

17705, 18002, 18005, 18008, 18012, 18019, 18021, 18024, 18209, 18213, 18309, 18406, 18409, 19407

〔文　　献〕町田章・他『平城京左京三条二坊』奈良国立文化財研究所学報第25冊，奈良国立文化財研究所1975年

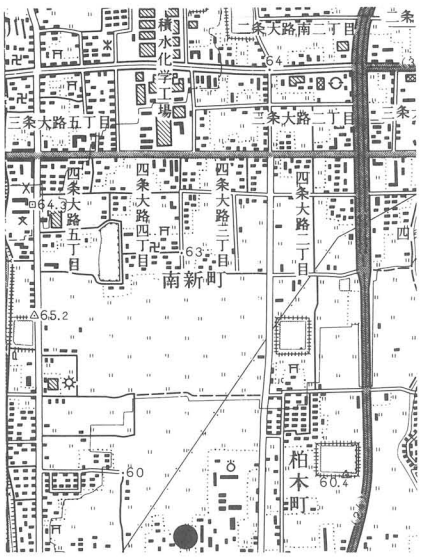


fig. 299　平城京朱雀大路下層遺跡木器出土地点（1:25,000　奈良）

4　平城京朱雀大路下層遺跡（fig. 299）　へいじょうきょうすざくおおじかそう

奈良盆地を南北に縦貫する下ッ道の北端，平城京の羅城門から朱雀門に至る京の中心街路。1974年2～3月に奈良国立文化財研究所が奈良市柏木町・六条町に所在する五条・六条の条間路との交差点において発掘調査を実施。朱雀大路の東西両側溝およびこれに先行する下ッ道の東西両側溝と古墳時代の河川を検出した。収録した木器は，調査区西端の右京六条一坊二坪（6ＡＩＡ区）下層で検出した古墳時代の河川から出土。幅3～4m，深さ約1.5mで，北西から南東に向かって流れる。埋土は3層に大別でき，下層（砂質土）から土師器と組合せ鋤身・曲柄鍬身・田下駄枠木・竪杵未成品などの木器，中層（黒灰色粘土と砂の互層）から大量の土師器と少量の木器，上層（灰色粘土）から大量の土師器と少量の須恵器が出土した。収録した木器は，すべて下層の出土品である。

〔木器番号〕*05803, 07603, 08901, 18022*

〔文　　献〕黒崎直・他『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良市1974年

5　和爾・森本遺跡（fig. 300）　わに・もりもと

天理市森本町・和爾・楢町に所在する弥生～古墳時代の集落跡。奈良盆地の東辺，大和高原の西を限る春日断層崖下の丘陵のうちの虚空蔵山丘陵の西端および丘陵裾部に立地する。工場建築に伴い，1975年から橿原考古学研究所が発掘調査を行なっている。1975年の1次調査では井戸などを検出した居住区と，古墳時代前期～中期にかけての遺物を多く含む川跡を検出した川跡地区（上流部）との2ヶ所を調査した。1978年の2次調査では削平された古墳の周溝を，1979年の3次調査では1次調査で検出した川跡の下流部分を調査し，川跡と岸辺に営まれた遺構群を検出している（川跡地区下流部，川岸地区）。収録した木器は，1次調査における居住区（1区）の溝ＳＤ03と井戸ＳＥ03，3次調査における川岸地区（3区）の井戸ＳＥ03，1・3次調査で検出した川跡から出土している。

〔文　　献〕中井一夫・他『天理市　和爾・森本遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第45冊，奈良県教育委員会1983年

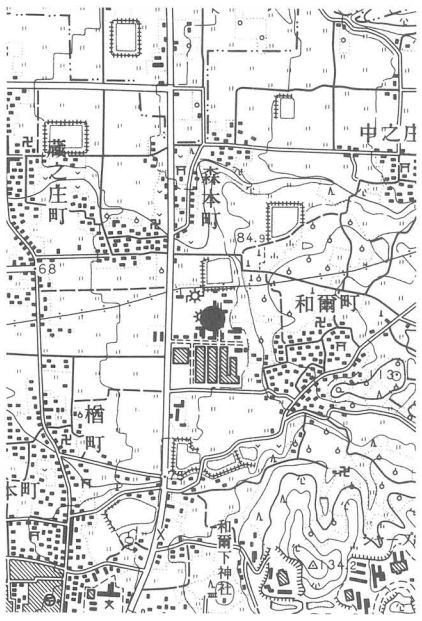


fig. 300　和爾・森本遺跡木器出土地点（1:25,000　大和郡山）

a　居住区（1区）の溝ＳＤ03と井戸ＳＥ03

居住区（1区）は小さな谷状地形部と南にある楢川の大きな谷とにはさまれた丘陵裾に立地する。ＳＤ03は谷状地形部に沿って流れる古墳時代後期の溝で，幅1.3m，深さ0.5mをはかる。6世紀の須恵器とともに，転用材を利用した横槌が出土した。

この谷状地形部の南には，時期を異にする4基の井戸がある。ＳＥ03は古墳時代後期中葉の井戸で，二段掘りの掘形内に建築部材を転用した井戸枠を組む。上段掘形は2.0m×1.3mの長方形を呈し，深さ0.3m。下段掘形は径約1.2mの円形を呈し，深さ1.5m。井戸枠は，東西側板には大型の長方形板材各2枚を縦に使い，南北側板には小型の長方形板材を横に使って組みあげる。南側板は7段，北側板は6段が遺存する。井戸内の埋土は黒色有機質土の単一層で，須

恵器・土師器とともに，曲柄鍬身・横槌・斎串・刀形などの木器が出土した。

〔木器番号〕溝ＳＤ03；*19521*　井戸ＳＥ03；*04709, 09208, 16401*

〔文　献〕同上

b　川岸地区（３区）の井戸ＳＥ05

川岸地区は南東から北西に向かって流れる旧流路（川跡地区）の右岸に広がる。弥生時代中期の方形周溝墓２基，同後期の円形周溝墓１基・壷棺墓１基，古墳時代中期の円墳１基のほか，溝・土坑・井戸などを検出している。

木器が出土した井戸ＳＥ05は，径2.0m，深さ1.6mの掘形をもつ。掘形底で刳抜きの井戸枠を据えた痕跡を確認したが，井戸枠本体は残っていなかった。埋土の中位（黒色粘土）から，須恵器器台片・各種土師器とともに曲柄又鍬身・槽・腰掛脚などの木器が出土した。木器はいずれも破損していた。

〔木器番号〕*18003*

〔文　献〕同上

c　川跡地区

１・３次調査で南東から北西に流れる旧流路（川跡）を検出した。１次調査では上流部の片岸を検出したにとどまるが，３次調査でその規模が幅約42m，深さ２mと確認できた（下流部）。下流部では数時期に重複する川跡を検出し，弥生時代後期には流れのとまったもの（Ⅰ期），古墳時代前期には流れのとまったもの（Ⅱ期），古墳時代中期末に流れのとまったもの（Ⅲ期）の３時期の流路に識別できた。Ⅲ期の流路は中州を挟んで幅７mの北流路と幅20mの南流路とに分流している。Ⅲ期の堆積土は３層に大別できる。上層では弥生～古墳時代前期の土器が混じるが，古墳時代中期の土師器が主体をなし，初期須恵器を含む。中層は古墳時代前期～中期の土師器が主体をなし，須恵器は含まない。下層からは弥生時代後期から古墳時代中期にかけての土器が混在して出土している。木器は，上流部から扉板・妻覆いなどの建築部材，下流部のⅠ期流路上層から竪杵，Ⅱ期流路から布（経）巻具と部材，Ⅲ期北流路下層から斧膝柄・曲柄又鍬身・縦櫛・鞘・部材，Ⅲ期北流路中層から机脚と部材，Ⅲ期南流路および北流路との合流点付近から曲柄又鍬とその柄・槽などが出土している。

〔木器番号〕上流部；*19004*　下流部Ⅰ期上層；*08807*

下流部Ⅱ期；*18911*　下流部Ⅲ期北流路下層；*00307, 12010*

下流部Ⅲ期南流路；*05307*　下流部Ⅲ期北流路中層；*18014, 18701*

〔文　献〕同上

6　布留遺跡（fig. 301）　ふる

天理市布留・三島・豊井・豊田・杣之内町にわたって所在する。布留川右岸に形成された扇状地上，および左岸の河岸段丘上に立地する。1938年に最初の発掘が行なわれ，1971年以降，埋蔵文化財天理教調査団が継続的に調査している。縄文時代早期～晩期，弥生時代中期から近世に至るまでの複合遺跡であるが，主体をなすのは古墳時代中期～後期のものである。祭祀跡・玉工房・鉄工房関係の遺物も出土している。

木器は三島（里中）地区で出土した。調査は1978年10月～1981年４月の間に断続的に行なっ

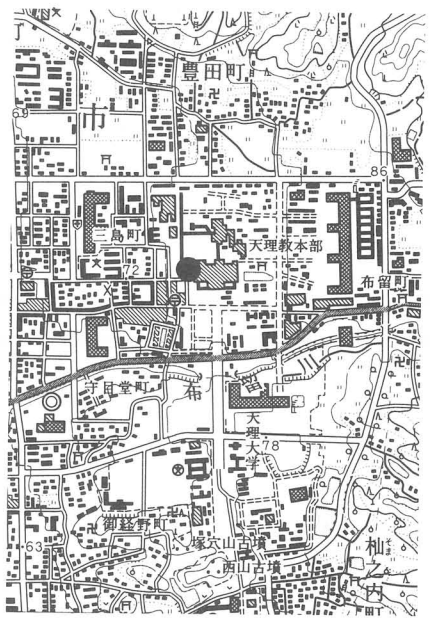


fig. 301　布留遺跡木器出土地点
（1:25,000　大和郡山）

た。木器が出土した遺構は布留川から分岐した流路中で，古墳時代中期～後期のものと，古墳時代後期～奈良時代のものの計２条がある。共伴した土器から，前者の年代は５世紀から６世紀前半までと推定できる。木器には刀剣の鞘・把頭や弓などの武器類のほかに機織具の部分，容器，農具などがある。武器類や機織具などの割合が多く，武器類のなかには実用ではないものも多く含まれている。古墳時代後期～奈良時代の流路で出土した木器のうち，奈良時代のものは『木器集成図録　近畿古代篇』に収録し，古墳時代後期と考えられる曲柄又鍬身・糸巻支え木・矢・琴・叩板，机天板は本書に収録した。

〔木器番号〕古墳時代中期～後期旧流路；*01603, 04602, 05106, 06708, 08517, 08523, 09205, 09214, 09407, 09408, 09409, 09517, 11201, 11202, 11203, 11204, 11205, 11206, 11207, 11208, 11209, 11211, 11212, 11301, 11302, 11303, 11304, 11317, 11318, 11319, 11402, 11404, 11405, 11406, 11407, 11415, 11418, 11419, 11510, 12008, 13605, 13704, 15106, 16111, 16219, 16410, 16505, 16512, 17212, 17403, 17709, 18106, 19718, 19812, 19814, 19905, 19913, 20013, 20014*

古墳時代後期～奈良時代旧流路；*04807, 09605, 11513, 15611, 17103, 17506*

〔文　　献〕布留遺跡天理教調査団（改め埋蔵文化財天理教調査団）『出土木器の樹種と木取りⅠ・Ⅱ』布留遺跡研究中間報告３　1981年
置田雅昭「古墳時代の木製把装具」『天理大学学報』第145輯，天理大学1985年
置田雅昭「古墳時代の木製刀剣鞘装具」『考古学雑誌』第71巻第１号，日本考古学会1985年

7　九ノ坪・シマダ遺跡（fig. 302）　きゅうのつぼ・しまだ

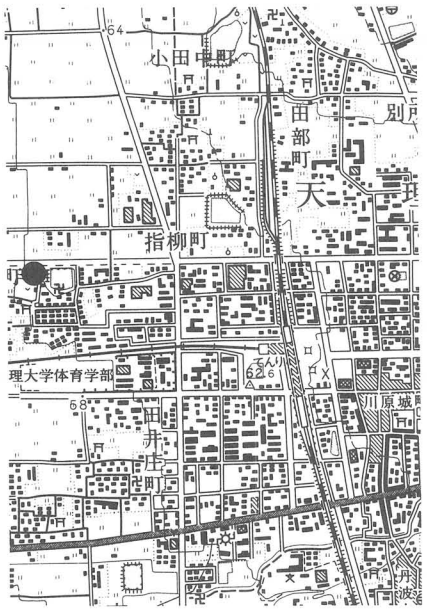


fig. 302　九ノ坪・シマダ遺跡木器出土地点（1:25,000　大和郡山）

天理市前栽町の北約200m，標高55～57mの平坦な水田地帯に所在する。天理市教育委員会が1982年に発掘調査を実施した。道路予定地のため東西の広がりは確認できたが，南北は幅14mを調査したにすぎない。検出した遺構は溝１条と土坑群である。溝の北岸部から玉製品，碧玉・グリーンタフ・滑石のチップや未成品などが出土し，玉作関係の遺跡であることが判明した。本図録には収録していないが，溝からは一木鋤・机天板などの木器も出土している。

収録した木器は土坑ＳＫ２・ＳＫ３から出土したもの。土坑ＳＫ２は径１m，深さ約1.2mで，自然木の細い枝をまわりに立てかけており，底中央には土師器壷を逆位に置いていた。木錘・横槌などの木器が共伴。木器・木片はすべて火を受けていた。土坑ＳＫ３は径約1.2m，深さ約１mで，滑石の屑石や多量の土器とともに木錘・火鑽臼などの木器が出土した。これらの溝・土坑の年代は５世紀後半から６世紀前半ごろに推定できる。

〔木器番号〕土坑ＳＫ２；*09323*　　土坑ＳＫ３；*09423, 17205*

出土地点不詳；*19405*

〔文　　献〕泉　武『天理市前栽町九ノ坪・シマダ遺跡発掘調査概報』天理市教育委員会 1983 年

8　星塚1・2号墳（fig. 303）　ほしつか

天理市二階堂上之庄町ホシツカに所在する。2号墳は古くから知られており，1952年に奈良県教育委員会が円墳状に残る墳丘部を調査し，横穴式石室を確認した（小島俊次「奈良県天理市上之庄　星塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第7輯，奈良県教育委員会 1955年）。1985年に2号墳の東側において天理市教育委員会が発掘調査を実施し，2号墳の周濠とそれに先行する1号墳の存在を確認した。2号墳の周濠は二重で，その形態から2号墳は東西に主軸を置く前方後円墳である可能性が強くなった（前方部側は未調査）。1号墳も東西に主軸を置く全長38mの前方後円墳であるが，墳丘は完全に削平されて濠のみを残す。濠幅は8～10m，深さ1m足らずである。

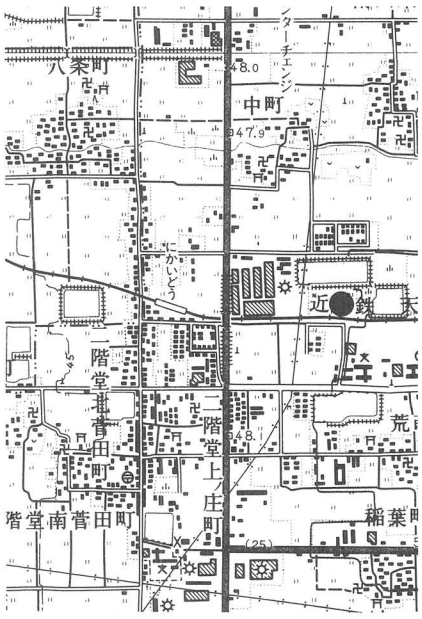


fig. 303　星塚1・2号墳木器出土地点（1:25,000　大和郡山）

収録した木器は2号墳内濠および1号墳周濠から出土した。1号墳は木器が豊富で製品のほか切屑などの加工片もかなり出土し，コウヤマキ・ヒノキの比率が高い。

1号墳の前方部濠が2号墳の外濠掘削時に一部破壊されていたが，1・2号墳から出土した須恵器，埴輪とも顕著な型式差が認められない。1号墳の築造は6世紀前半であるが，時期をあまりへだてず2号墳が造営されたのであろう。

〔木器番号〕2号墳内濠；*14002*

1号墳周濠；*01119, 07506, 15801, 18205, 18206, 18706*

〔文　　献〕泉　武・他『星塚・小路遺跡の調査』天理市埋蔵文化財調査報告第4集，天理市教育委員会 1990 年

9　平等坊・岩室遺跡（fig. 304）　びょうどうぼう・いわむろ

天理市の西部，平等坊町から岩室町にかけて所在する弥生時代集落跡。遺跡の東北隅にあたるヒライ池の改修工事に伴い，1981年に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。同地点では弥生時代の遺構に重複して推定長45～55mの西面する前方後円墳が築かれており，調査地はこの後円部南裾に相当する。下層の遺構は弥生時代中期から後期にかけての溝，土坑が主体である。古墳は墳丘裾部を巡る円筒・形象埴輪から6世紀前半期の築造と考えられる。収録した木器はこの調査時の包含層から出土した。しかし，同層では弥生時代前期後半から古墳時代後期前半までの遺物が錯綜しており，この木器の時期確定はできず，古墳に伴うものかどうかも明らかでない。

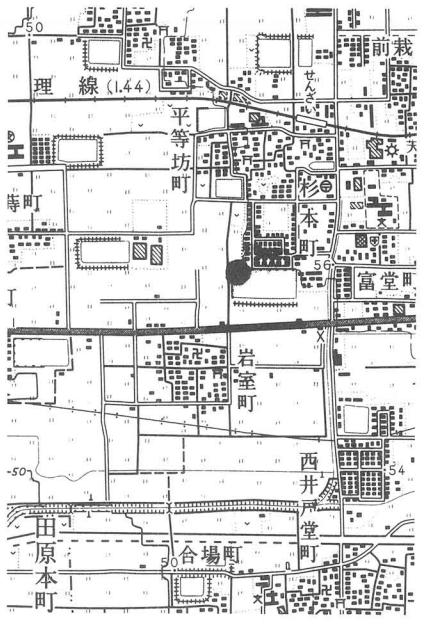


fig. 304　平等坊・岩室遺跡木器出土地点（1:25,000　大和郡山）

〔木器番号〕*19510*

〔文　　献〕楠元哲夫・他『岩室池古墳　平等坊・岩室遺跡』天理市埋蔵文化財調査報告第2集，天理市教育委員会 1985 年

10　東安堵遺跡（fig. 305）　ひがしあんど

生駒郡安堵町南部の岡崎川右岸に所在する。付近は奈良盆地の主要河川が合流する場所で，1982年8月2日の豪雨では調査中の遺構が完全に水没して一週間以上排水されなかった。発掘調査は住宅開発に伴い奈良県立橿原考古学研究所が実施した。検出した遺構には土坑・溝などがある。土坑は288ヶ所におよび，土器片が1片でも出土した土坑は124ヶ所にのぼる。明

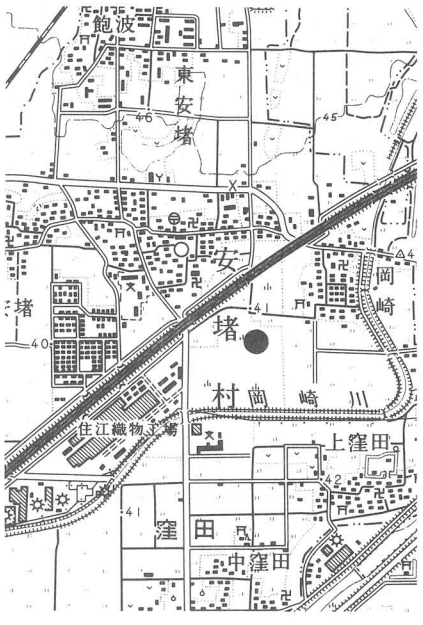


fig. 305　東安堵遺跡木器出土地点（1:25,000　大和郡山）

らかに土坑内に土器を据え置いたと推測できるものも20ヶ所あり，弥生第Ⅴ様式後半～纒向3式の時期のものを含む。土坑群が立地する微高地からやや下った低地部からも完形品を含む多数の甕・壷が出土した。

収録した木器は土坑49，ＮＥ南落ち込み（Ⅰ・Ⅱ区間低地部），古墳時代中期後半の溝ＳＤ03から出土した。土坑49は1.5×1.3m，深さ0.2mで，弥生Ⅴ期後半の甕と曲柄鍬身が出土。ＳＤ03は幅1.5～2m，深さ0.2mで，西北から東南に流れる。埋土は上下2層に大別でき，下層から須恵器・土師器とともに，田下駄などの木器が出土した。

〔木器番号〕土坑49；*04506*　ＮＥ南落ち込み；*13222*　溝ＳＤ03；*07413*

〔文　　献〕泉　武『東安堵遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第46冊，奈良県教育委員会1983年

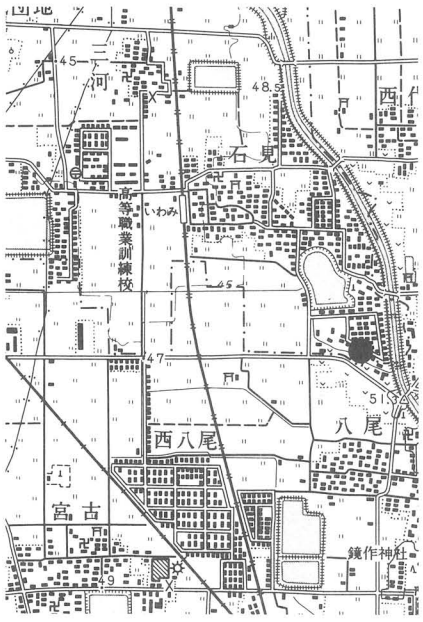


fig. 306　石見遺跡木器出土地点
(1:25,000　初瀬)

11　石見遺跡（fig. 306）　いわみ

磯城郡三宅町玉子に所在する。寺川の西岸にあたる標高47mの低地に立地している。寺川の堤防復旧工事の際多くの埴輪が出土したことを契機として1931年に1次調査が実施され，宅地造成に伴い1966年に橿原考古学研究所が2次調査を行なった。遺構の性格に関しては諸説があるが，径約30mのほぼ円形の高まりを巡る幅6mの濠とその屈曲部を検出しており，短い前方部を伴う墳丘長35m以上の前方後円墳が削平された跡の可能性が大きい。濠から鳥形・笠形・刀形・杭・棒状の各種木器と，人物・馬・鹿・盾形埴輪および円筒埴輪などが出土している。2次調査の所見では，埴輪は濠内側の斜面沿いに倒れた状態であったのに対し，木製品は濠内を中心に出土したという。笠形木器は20個体以上出土しており，大きさは36cm前後のものと30cm前後のものがある。鳥形木器は4個体あり，いずれも長さ1mをこえる大型品で，胴部の中央に長方形の貫通孔がある。伴出した須恵器・円筒埴輪から，6世紀前半から中葉にかけての時期が考えられる。収録した笠形木器は1次調査の出土品である。

〔木器番号〕*16905, 16906*

〔文　　献〕末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第13冊，奈良県教育委員会1935年

千賀久「石見遺跡資料」『大和考古資料目録』第15集，奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1988年

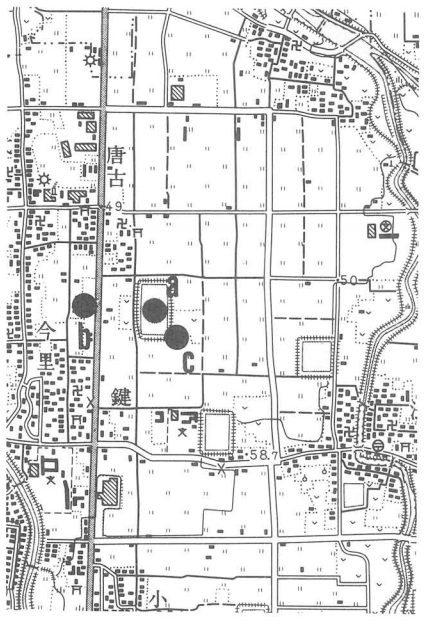


fig. 307　唐古・鍵遺跡木器出土地点
(1:25,000　桜井)

12　唐古・鍵遺跡（fig. 307）　からこ・かぎ

磯城郡田原本町唐古・鍵に所在する弥生時代の集落跡。大和盆地のほぼ中央，標高50m前後の水田地帯に位置する。1936～1937年に唐古池内で奈良県・京都大学が発掘調査を実施（唐古遺跡第1次調査）。畿内弥生土器の編年体系を確立し，弥生文化を理解する上での基盤を提供した。1977年には奈良県立橿原考古学研究所が第3次調査を実施し，集落の南限を確認するとともに，遺構が鍵地区にも広く及ぶことから「唐古・鍵遺跡」と遺跡名称を変更。以後，奈良県立橿原考古学研究所および田原本町教育委員会が発掘調査を継続している。

収録した木器は，唐古遺跡第1次調査において各種遺構から出土したもの，および田原本町教育委員会が実施した唐古・鍵遺跡第13・19・26次調査で出土したものである。

a　唐古遺跡　第1次調査

約15000㎡におよぶ唐古池内の調査では，「北方砂層」「中央砂層」「南方砂層」と呼んだおおよそ3条の河道と，「竪穴」と呼んだ107基以上の土坑・井戸・貯木施設などが検出されている。収録した木器のうち，弥生Ⅰ期のものはA号・G号・1号・13号・40号・49号・56号・57号・60号・65号・78号・80号・84号・87号・88号・97号・99号・101号地点「竪穴」と「中央砂層」，弥生Ⅳ期のものは27号・82号地点「竪穴」と「北方砂層」などから出土している。

〔木器番号〕A号地点竪穴；*09118, 12002, 12404, 13104, 13114*
G号地点竪穴；*08704*　1号地点竪穴；*13113*
13号地点竪穴；*07201*　40号地点竪穴；*02603*
49号地点竪穴；*12501*　56号地点竪穴；*00903*
57号地点竪穴；*12917*　60号地点竪穴；*12307, 12811*
65号地点竪穴；*13102, 13202, 15403*　80号地点竪穴；*08606*
78号地点竪穴；*02803, 02808, 12509*　84号地点竪穴；*13002*
87号地点竪穴；*12508*　88号地点竪穴；*01704, 13006*
97号地点竪穴；*01301, 01706, 08604*
99号地点竪穴；*00902, 09719, 12810, 16105*
101号地点竪穴；*08602*
中央砂層；*01401, 10904, 10905, 11113*
27号地点竪穴；*03306*　82号地点竪穴；*12505, 13213*
北方砂層；*02605*
出土地点不詳；*00509, 00510, 01304, 01305, 02310, 08610, 09703, 10505, 12019, 12301, 12407, 12803, 12818, 12908, 12913, 12914, 12916, 13215, 14001, 15502, 15603, 16103, 16106, 18703, 18919, 19511, 19518, 19705, 19707*

〔文　献〕末永雅雄・小林行雄・他『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊，京都帝国大学1943年

b　唐古・鍵遺跡　第13・19次調査

田原本町教育委員会が1982年（第13次調査）と，1984年（第19次調査）に実施。両調査区とも唐古・鍵遺跡の西部に位置し，第19次調査区は第13次調査区の南側に隣接する。この二つの調査区では弥生集落の内部から環濠帯にかけて調査し，第13次調査区では弥生中期の環濠5条を検出している。収録した木器は第13次調査区で検出した環濠ＳＤ－02とＳＤ－06，井戸ＳＫ－07，第19次調査区で検出した井戸ＳＫ－102から出土した。環濠ＳＤ－02は幅6.3m，深さ1.2mをはかる。溝の下層には植物層が堆積し，組合せ鋤と柄，鞘入り石剣，匙未成品，火鑽臼，緯打具，箕，丹塗板などが出土。第Ⅳ様式。環濠ＳＤ－06は幅10.5m，深さ1.6mをはかる。溝の最下層・下層には黒色粘土などが埋没し，これらの土層を覆って砂層・砂質土の洪水堆積（中層）がみられる。泥除は中層，一木鋤は下層から出土した。中層は第Ⅳ様式，下層は第Ⅲ様式。ＳＫ－07はＳＤ－06の東側で検出した井戸。最大径2.1m，深さ不明。中層よ

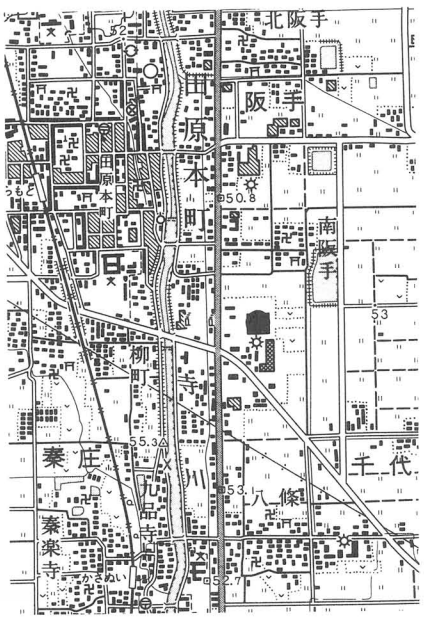


fig. 308　阪手遺跡木器出土地点
(1:25,000　桜井)

り穂摘具が単独出土。第Ⅳ様式。ＳＫ－102はＳＤ－204（第13次調査区のＳＤ－06に対応）の東側において検出した井戸。東西3.3m，南北2.3m，深さ1ｍ。井戸の堆積は4層に大別でき，中層の黒色粘土層などから泥除の未成品3点が出土。この3点は一連の製作工程のもので，層位ごとに進行過程がわかる。第Ⅳ様式あるいは第Ⅴ様式。

〔木器番号〕ＳＤ－02；*05504, 07111, 09718, 11312, 12312, 17211*
ＳＤ－06；*03814, 06505*　　ＳＫ－07；*07805*
ＳＫ－102；*02909, 04102, 04103, 04105*

〔文　　献〕藤田三郎『昭和57年度　唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要1，田原本町教育委員会1983年
藤田三郎「昭和58年度　唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要2』田原本町教育委員会1984年

c　唐古・鍵遺跡　第26次調査

田原本町教育委員会が1987年に調査。調査地は第1次調査の唐古池の東側にあたる。集落内部に該当し，大溝・土坑・柱穴などを検出。ＳＫ－2116は長軸2.6m，短軸2.2m，深さ1.3mを測る楕円形の土坑。土坑の底よりやや上で横杓子の未成品が出土。木器貯蔵用の土坑と考えられる。第Ⅲ様式。

〔木器番号〕*12406*

〔文　　献〕藤田三郎『昭和61年度　唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概報7，田原本町教育委員会1987年

13　阪手遺跡（fig. 308）　さかて

磯城郡田原本町阪手に所在。奈良盆地の中央，標高約51mの水田地帯に位置する。1982年に奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施した。水田上面から約40～60cmで弥生時代の地山を検出。遺構としては井堰跡を検出したのみで，水田跡は確認できなかった。井堰は幅10mにわたり，200本の杭でしがらみを組んでいた。井堰の周囲で弥生後期の土器片と石庖丁が出土している。しがらみの下部から穂摘具・杵などの木器が出土し，そこから数mへだてた溝のよどみから自然木とともに鍬身が出土した。なお地表下約5ｍ（標高47.2～47.3m）で，姶良火山灰，その上層でさらに2層の火山灰（阪手火山灰）を検出している。

〔木器番号〕*02006, 07823*

〔文　　献〕東潮・他「磯城郡田原本町阪手遺跡発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県教育委員会1983年

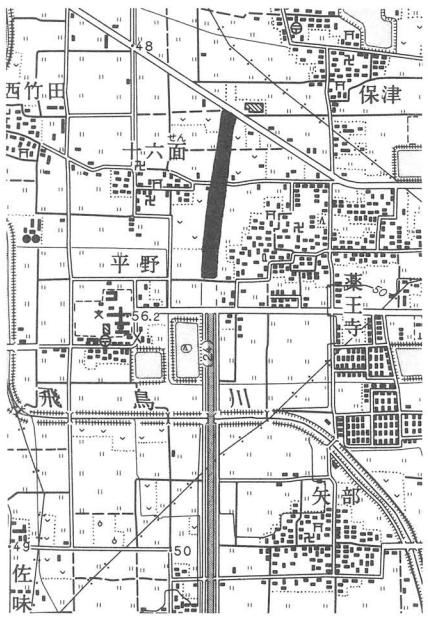


fig. 309　十六面・薬王寺遺跡木器出土地点(1:25,000　桜井)

14　十六面・薬王寺遺跡（fig. 309）　じゅうろくせん・やっこうじ

磯城郡田原本町十六面・薬王寺に所在。国道24号バイパス路線建設工事に伴い，1981年4月から1982年5月にかけて奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。奈良盆地のほぼ中央に位置し，弥生時代後期～中世にわたる大規模な複合遺跡である。とくに古墳時代中期の遺構が顕著で，主として土坑から多量の木器・古式須恵器・土師器が出土している。収録した木器は5世紀後半に比定される資料で，南Ⅰ区の溝ＳＤ－02，南Ⅱ区の土坑ＳＫ－02・ＳＫ－07・ＳＫ－13から出土した。

南Ⅰ区の溝ＳＤ－02は古墳時代中期集落跡の北限の大溝。幅約 65m。深さ 0.15～0.45m。暗灰色粘土が堆積する。南Ⅱ区のＳＫ－02は長さ約 4.9m，幅約 1.2m，深さ約 9.8m をはかる溝状の土坑。古式須恵器を含む多量の土器とともに，曲柄鍬身などの木器も出土している。ＳＫ－07は径約 1.4m，深さ約 0.85m の円形土坑。壁部はほぼ垂直に落ちる。下半部に植物遺体を多く含む灰層が厚く堆積しており，この層から多くの木器が出土している。ＳＫ－13は全体はわからないが，大形の不整形土坑である。検出範囲での規模は，3.5m×4.0m，深さ 0.6m で，底の一部を径約 0.8m，深さ 0.6m にわたり井戸状に掘り込んでいる。多量の土器，木器が出土した。

〔木器番号〕南Ⅰ区溝ＳＤ－02；*09111, 09112, 09415, 09513, 17809*

南Ⅱ区土坑ＳＫ－02；*04608*　　南Ⅱ区土坑ＳＫ－07；*04610*

南Ⅱ区土坑ＳＫ－13；*09414, 19001*

〔文　　献〕服部伊久男・松本洋明・他「田原本町十六面・薬王寺遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1981 年度』奈良県教育委員会 1983 年

fig. 310.　谷遺跡木器出土地点
(1:25,000　初瀬)

15　谷遺跡 (fig. 310)　たに

宇陀郡榛原町の上井足と下井足にかけて所在する。比高 20～50m の丘陵に囲まれた芳野川支流の谷間に立地する集落遺跡で，1983 年から 1984 年にかけて奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。木器はＣトレンチで検出した谷筋自然流路内において，弥生時代後期後半以降，とくに古墳時代後期を主体とする土器類とともに多量に出土。建築部材・農具・容器・紡織具・腰掛・楽器・武器・馬具など多種にわたる。いずれも使用済みの廃品や破損品で，建築部材などの大型品の出土状況から，Ｃトレンチで検出した谷川が，木器を再利用するための貯蔵場であったと思われる。

〔木器番号〕*09509, 09511, 11803, 14303, 15107, 16215, 16315, 16316, 17107, 17605, 17606*

〔文　　献〕松本洋明「谷遺跡」『大和を掘る－1984 年度発掘調査速報展－』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1985 年

松本洋明・他「宇陀地方の遺跡調査（大和高原南部地区パイロット事業地内の発掘調査概要）－昭和 59 年度－」『奈良県遺跡調査概報 1984 年度』奈良県教育委員会 1985 年

16　纒向遺跡 (fig. 311)　まきむく

桜井市太田・辻・東田・草川・巻野内・大豆越に所在。径 1 km以上の範囲にわたる弥生時代末期から古墳時代前期を中心とするこの時期の日本有数の大集落で，畿内政権の基盤的な集落と考えられている。大和高原から奈良盆地に流れ出る巻向川が形成した扇状地上にあり，標高70m前後に立地する。1971 年以降，橿原考古学研究所・桜井市教育委員会が発掘調査を継続している。検出遺構はこの時期の墳墓，古墳の周濠，建物，大溝，土坑，ピットなどのほか古墳時代後期の古墳など多数にのぼる。木器はこれらの墳墓，古墳の周濠，大溝，土坑から各種の遺物とともに出土したもので，その内容は農具，容器，祭祀具を始めとして多種にわたる。

とくに纒向 1 式期の石塚古墳周濠の孤文円板・鶏形・天秤棒・鋤・建築部材や纒向 3 式期の辻地区土坑 4 の大型木製高杯・鳥形容器及び舟形などが顕著なものである。

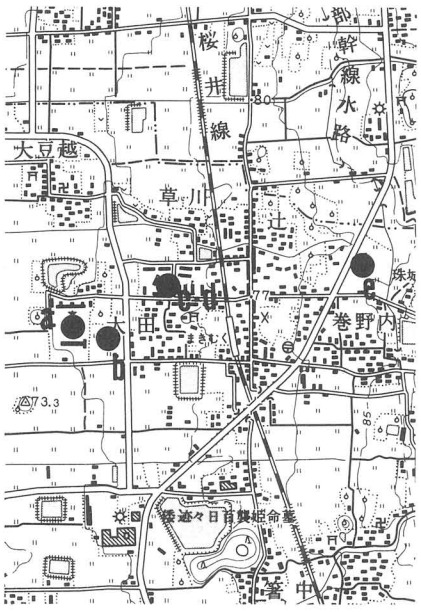


fig. 311　纒向遺跡木器出土地点
(1:25,000　桜井)

a　東田（ひがしだ）地区大溝

纒向遺跡を貫流する2条の大溝（北溝と南溝）があり，同溝は東田地区で合流する。溝の幅は5～6m，深さ1.2mで，矢板・杭などで護岸する。合流地点には井堰が設けられ，その上流約30mの南溝には「集水マス」が構築されている。纒向1式期に掘削され，同3式期まで機能した人工水路と考えられる。

〔木器番号〕北溝；*03803, 07010, 09801*　　南溝；*18518, 19715*

〔文　　献〕石野博信・関川尚功・他『纒向』桜井市教育委員会1976年

b　石塚（いしづか）古墳周濠

太田（おおた）246-1番地ほかに所在する。1971～1975年に橿原考古学研究所（1～3次調査），1989年に桜井市教育委員会（4次調査）が発掘調査を実施。

墳丘は平面バチ形の前方後円状をなし，前方部を東南に向け，全長約93m，後円部最大幅約64m，前方部最大幅約36mをはかる。周囲には前方部前面付近がやや突出した楕円形の周濠がめぐる。周濠の総長は約120mと推定される。周濠内から纒向1式を主体とする土器とともに多数の木器が出土している。収録した木器は1～3次調査のものに限る。

〔木器番号〕*02005, 06306, 06604, 09802, 16513, 17004*

〔文　　献〕石野博信・関川尚功・他『纒向』桜井市教育委員会1976年

寺沢薫・萩原儀征・他『纒向石塚古墳－範囲確認調査（第4次）概報－』桜井市教育委員会1989年

c　辻（つじ）地区　土坑4

旧巻向川流域を中心に多数分布する祭祀に関連した土坑のひとつ。径約3mの不整円形をなし，深さ約1.5m。土坑内の堆積土は大きく3層にわかれ，上層は纒向4式の土器を含み，中・下層は纒向3式土器の標式となっている。木器は中層の籾殻を主体とする植物層内から主に出土した。

〔木器番号〕*12106, 13223, 15008, 16514, 16802, 17604, 19817, 20005*

〔文　　献〕石野博信・関川尚功・他『纒向』桜井市教育委員会1976年

d　辻地区　土坑5

径2.5×2.3mの円形をなし，深さ約1.6m。土坑内の堆積土は，上から黒褐色土・黒色粘土・黒色砂層で，上部に纒向3式の土器片を多く含む。木器は黒色砂層から若干量が出土している。

〔木器番号〕*19202*

〔文　　献〕石野博信・関川尚功・他『纒向』桜井市教育委員会1976年

e　巻野内・家ツラ地区　溝2

1987年10月，桜井市教育委員会が実施した巻野内・家ツラ地区の発掘調査で，集水施設と考えられる遺構群を検出した。木樋と集水木槽からなる集水施設で，付近に掘立柱建物2棟が建っていた。南側の溝の中から，弧文板が一枚出土している。溝内出土の土器から，布留式土器期（4世紀初）に埋められ，庄内式土器期（3世紀後半）に機能したと考えられる。桶状容器や火鑽臼・農具類が共伴している。

〔木器番号〕*17002*

〔文　　献〕桜井市教育委員会『桜井市巻野内　纒向遺跡発掘調査概報』桜井市埋蔵文化財発掘調査概報 1987-7，1987 年

萩原儀征「纒向－巻ノ内家ツラ地区－」『大和を掘る－1987 年度発掘調査速報展－』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1988 年

17　城島遺跡（下田地区）(fig. 312)　しきしま（しもだ）

桜井市大字外山（とび）から粟殿（おうどの）・慈恩寺にかけて所在する集落・生産遺跡。初瀬川と粟原川にはさまれた標高 85m 前後の沖積平野上に立地し，8 万㎡に及ぶ広い範囲で弥生時代～中世にいたる遺構群を検出している。とくに，古墳時代中～後期の掘立柱建物や竪穴住居群，古墳時代後期～奈良時代の水田などが顕著な遺構である。市水道局前に欽明天皇の磯城島金刺宮推定地の石碑が立っているが根拠はない。

1984 年 8 月，桜井市教育委員会が下田地区の発掘調査を行なったところ，約 10m 四方の範囲におよぶ浅い窪地状遺構がみつかり，中から鍬・鋤・天秤棒・田舟・槽などの木器が 100 点近く出土した。木器を含む青灰色粘土層内からは，ほかに自然木が多く出土しており，自然埋没の可能性も考えられる。共伴した土器は布留式土器期（4 世紀前半）で，南東約 300m の粟原川南岸にある桜井茶臼山古墳に近い時期と考えられる。

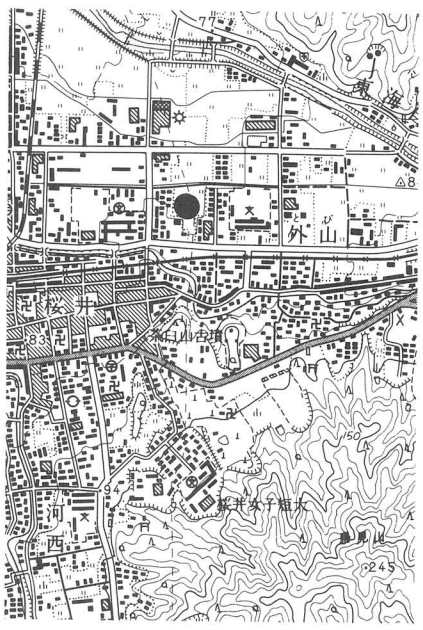


fig. 312　城島遺跡（下田地区）木器出土地点 (1:25,000　桜井)

〔木器番号〕*02103, 04308, 04310, 04312, 04501, 04603, 04606, 05102, 05103, 06305, 06605, 06606, 06608, 06901, 06902, 06903, 06904, 06905, 10302*

〔文　　献〕清水真一「外山　下田遺跡（桜井市外山）」『大和を掘る－1984 年度発掘調査速報展－』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1985 年

桜井市教育委員会『桜井市外山下田遺跡発掘調査概報』桜井市文化財発掘調査概要 1984-1，1984 年

18　上之宮遺跡 (fig. 313)　うえのみや

桜井市大字上之宮に所在する集落遺跡。寺川の左岸，河岸段丘上に立地し，標高 110m 前後にある。約 1 万㎡におよぶ範囲で，古墳時代～飛鳥時代にかけての遺構群を検出している。とくに四面庇をもつ掘立柱建物を中心として，柵で囲んだ 6 世期末～7 世紀初頭の居館遺構を発見し，「上之宮」の地名とともに，その性格が重要視されている。

1987 年～1990 年にかけて，5 次におよぶ発掘調査を桜井市教育委員会が実施している。1987 年 4 月，発掘調査範囲北端の整地層中から，1 個の横櫛が出土した。古墳時代後期までの縦櫛と，飛鳥時代以後の横櫛との中間形態を示しており，櫛の形態変化の上で重要な位置を占める。このほかに桃核や馬歯・滑石小玉などが出土しており，整地時の地鎮もしくは整地の際に運ばれた土中に含まれた遺物と考えることができるだろう。

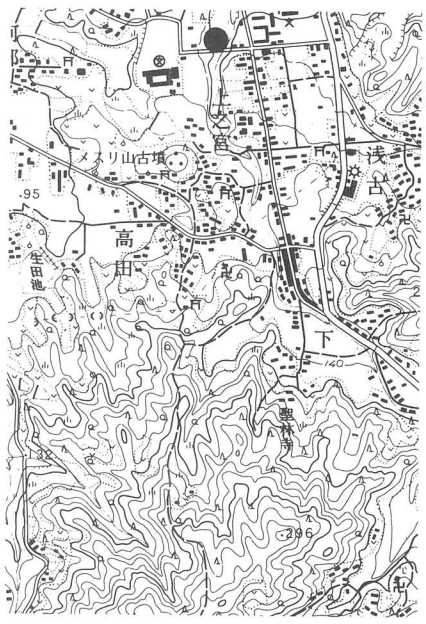


fig. 313　上之宮遺跡木器出土地点 (1:25,000　畝傍山)

〔木器番号〕*12012*

〔文　　献〕桜井市教育委員会『桜井市　上之宮遺跡宮ノ前地区発掘調査概報』桜井市埋蔵文化財概報 1987-1，1987 年

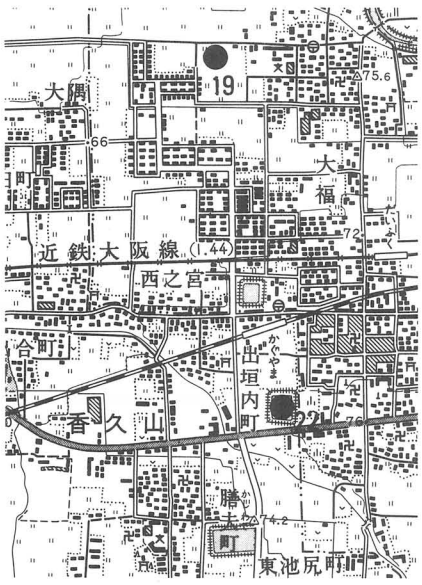


fig. 314　大福・黒田池遺跡木器出土地点（1:25,000　桜井）

19　大福遺跡（fig. 314）　だいふく

桜井市大福に所在する縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡。奈良盆地の東南隅，耳成山から西1,300mの，寺川と米川との複合扇状地の上に立地する。宅地造成の事前調査として，1973年に橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。

弥生時代の遺構としては溝・土坑・土器棺墓を検出した。溝は2条検出しており，いずれも集落の南を画する溝と想定される。木器が出土した溝Ⅰは幅3.8m，深さ1mをはかり，東西7mにわたり調査した。溝の西半分には下層で茶褐色のシマ状堆積があり，その上に堆積した50cmの厚さの有機質土層から炭化した植物遺体とともに木器が出土している。伴出土器は若干第Ⅰ様式をまじえるものの，大半は弥生中期とくに第Ⅲ様式の弥生土器が主体を占める。

〔木器番号〕*00502, 02307, 07203, 14606, 14607*

〔文　　献〕亀田博・他『大福遺跡－桜井市大福所在遺跡の調査報告－』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第36冊，奈良県教育委員会1978年

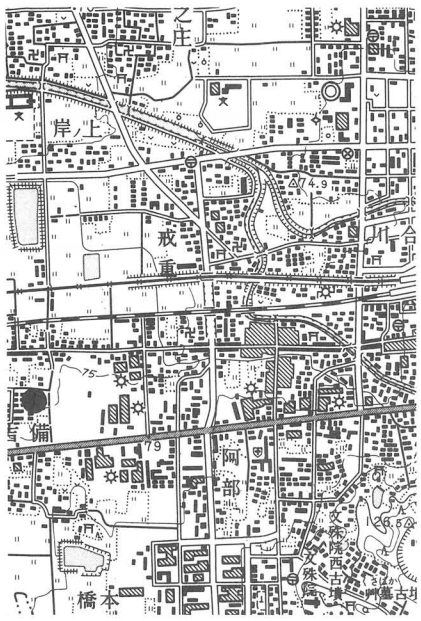


fig. 315　吉備遺跡（岡崎地区）木器出土地点（1:25,000　桜井）

20　吉備遺跡（岡崎地区）（fig. 315）　きび（おかざき）

桜井市大字吉備に所在する集落遺跡。寺川と米川とにはさまれた標高70m前後の沖積平野上に立地し，2万㎡におよぶ範囲で縄文時代晩期～飛鳥時代にかけての遺構群を検出している。とくに，弥生時代後期と飛鳥時代の溝や掘立柱建物群が顕著な遺構である。

1985年8月，桜井市教育委員会が岡崎地区の発掘調査を行ない，弥生時代後期の蛇行した旧河道を検出した。河道内から多量の土器片のほか，木器やひょうたん・トチの実などの植物遺体が出土した。近くの住居群で使用した生活用品の棄て場の可能性が強い。木器には斧柄・鍬・鋤・穂摘具・横槌のほか，赤色顔料を塗布した祭祀用具や小孔のあいた木片（木盾か？）などがある。

1985年9月，約1km北西の大福遺跡内で銅鐸が発見されたことにより，同時代とみられる吉備遺跡の存在が重視されるようになった。

〔木器番号〕*00213, 01804, 07812, 07815, 07827, 09106, 19403, 20117*

〔文　　献〕清水真一『桜井市　吉備遺跡岡崎地区発掘調査概報』桜井市教育委員会1986年

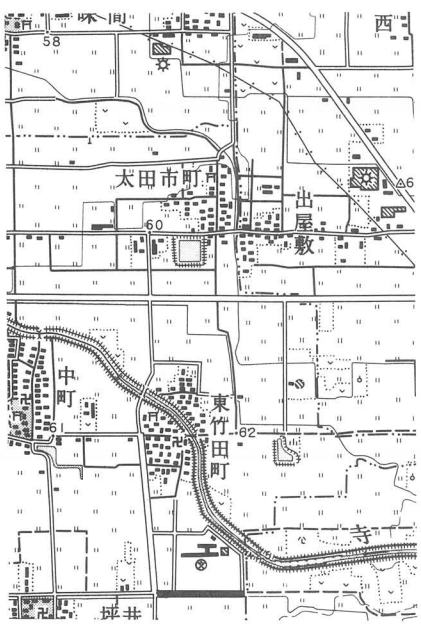


fig. 316　坪井遺跡木器出土地点（1:25,000　桜井）

21　坪井遺跡（fig. 316）　つぼい

橿原市常盤町大字坪井を中心に所在。耳成山の北東を流れる寺川とその支流の米川とにはさまれた標高約65mの水田地帯に立地する。周辺には，寺川水系に沿った約2kmの範囲に，大隅・大福・大福池・東新堂遺跡など縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺跡が分布し，これらは坪井遺跡と併存した可能性が高い。

1932年，下村正信が遺跡の存在を明らかにし（『大和考古学』第2号），水路工事で出土した土器をもとに，1959年，網干善教が弥生時代を通じての遺跡であると位置づけた（『古代文化』3－10）。1981年，学校建設工事に伴い奈良県立橿原考古学研究所が第1次発掘調査を実施。1983年の第3次調査以降は，橿原市教育委員会が主体となって調査を継続している。

収録した木器は1983年2月～5月に橿原市教育委員会が実施した第3次調査で出土したもの。この調査では，弥生時代前期の土器棺墓・木棺墓群・弥生時代中期の溝，弥生時代後期～古墳時代前期の溝，古墳時代の木樋など，弥生時代前期～奈良時代の遺構を検出している。剣

把が出土したのは弥生時代中期の溝ＳＤ－1008で，集落を区画する濠の一部の可能性がある。短甲が出土したのは弥生時代後期～古墳時代前期の溝ＳＤ－14・18で，取水のための木樋が遺存していた。短甲は浅い流路状溝が蛇行した部分から出土した。

〔木器番号〕溝ＳＤ－1008；*11311*　　溝ＳＤ－14・18；*11528*

〔文　　献〕橿原市千塚資料館『貫頭衣を着た人々のくらし』1983年

22　黒田池遺跡（fig. 314）　くろだいけ

橿原市出垣内町字黒田に所在。香久山の北約1.5km，寺川と米川とにはさまれた沖積平野に立地する。1954年，橿原考古学研究所と天理参考館とが共同で発掘調査を実施。土師器・須恵器などとともに，攪網枠や盤・剣形などの木器が出土した。

〔木器番号〕*10601, 16204*

〔文　　献〕小島俊次「黒田池遺跡発掘調査概要」『大和文化研究』第2巻第2号，大和文化研究会1954年

小島俊次『奈良県の考古学』郷土考古学叢書1，吉川弘文館1965年

23　曽我遺跡（fig. 317）　そが

橿原市曽我町に所在する弥生時代中期から古墳時代後期にわたる集落・玉類の生産遺跡で，南北約400mの範囲におよんでいる。とくに，国道24号線橿原バイパス建設工事に伴い1982～1983年に奈良県立橿原考古学研究所が実施した発掘調査の結果，古墳時代中期後半から後期前半にかけて，各種の石製模造品・玉類の生産を行なっていたことが判明し，日本でも最大規模の玉生産遺跡であることが明らかになった。

舞錐の弓が出土したのは，Ｃ地区の土坑ＳＫ－01。径約5ｍ，深さ約1.7mで，土師器・須恵器のほか滑石・碧玉の玉類の未成品，剥片，砥石，自然木などが出土した。6世紀後半に埋没した遺構である。

〔木器番号〕*01101*

〔文　　献〕関川尚功・他「橿原市曽我遺跡発掘調査概報2」『奈良県遺跡調査概報1983年度』奈良県教育委員会1984年

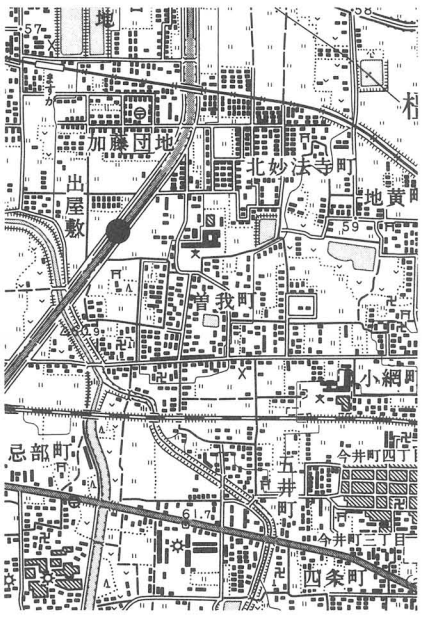


fig. 317　曽我遺跡木器出土地点
（1:25,000　桜井）

24　四分遺跡（fig. 318）　しぶ

橿原市四分町に所在。飛鳥川右岸の自然堤防上に立地する弥生時代の大集落遺跡。東西250m，南北400m以上の範囲におよぶこの集落遺跡は，畿内第Ⅰ様式の中段階に始まり，第Ⅴ様式期の終わりまで継続するが，中期以降に遺構の密度・遺物の出土量が急増し，とくに後期後半期の遺物の出土量は膨大である。ただし，弥生時代後期を頂点として，古墳時代になると集落規模は極端に縮小する。その後，古墳時代を通じて集落は存続するが，弥生時代に比べてはるかに小規模である。

1970年以降，藤原宮跡発掘調査の一環として奈良国立文化財研究所が調査を継続しており，これまでに竪穴住居・柱穴・井戸・溝・土坑・水田などを検出している。出土遺物には多くの土器や石器のほかに，木器や銅鏃もあり，銅鐸形土製品2点も発見されている。

〔文　　献〕宮沢智士・小笠原好彦・菅原正明・他『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報31冊，奈良国立文化財研究所1978年

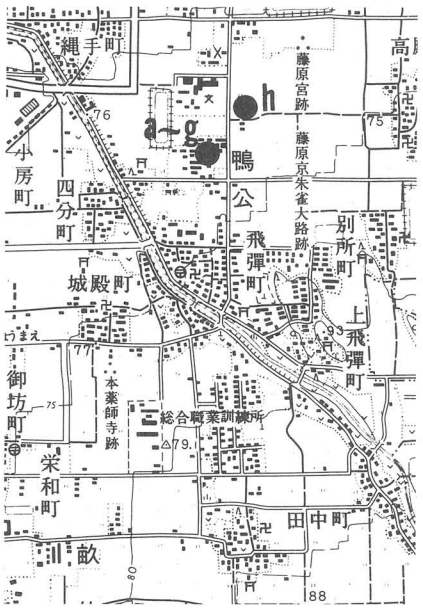


fig. 318　四分遺跡木器出土地点
（1:25,000　畝傍山）

木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ－藤原宮西辺地区・内裏東外郭の調査－』奈良国立文化財研究所学報第37冊，奈良国立文化財研究所1981年

a　井戸ＳＥ610（６ＡＪＬ－Ｅ区）

直径1.6m，深さ1.2mの素掘りの井戸。内部の土層は4層に区分できるが，最下層の粗砂層が井戸内の堆積層であろう。井戸は一部埋まったあと，土器等の捨て場として使われたらしく，上部3層からは第Ⅲ様式新段階の土器が多量に出土した。木器もそれらの土器と同様な状況で埋まっていた。

〔木器番号〕*07909*

〔文　　献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

b　井戸ＳＥ758（６ＡＪＬ－Ｅ区）

東西2.4m，南北2mの不整円形の平面をもつ，深さ1.4mの素掘りの井戸。井戸内部の土層は3層に区分でき，上層からは第Ⅴ様式の土器が少量出土した。中・下層はともに井戸の埋土と考えられ，第Ⅲ様式古段階の土器がまとまって出土した。下層から砥石，中・下層にまたがって竪杵，上層からは石庖丁・石鏃が出土した。

〔木器番号〕*08701*

〔文　　献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

c　井戸ＳＥ1481（６ＡＪＬ－Ｅ区）

直径4m，深さ1.7mの素掘りの大型井戸。井戸内の堆積層は上下2層に区別できるが，両層から多量の第Ⅲ様式土器が出土した。井戸の一部は後期の井戸によって破壊されている。

〔木器番号〕*09010*

〔文　　献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

d　溝ＳＤ666（６ＡＪＬ－Ｅ区）

幅4.4m，深さ0.9mの南北方向の大溝。溝の断面形は底面幅（3m）の広い逆台形を示し，溝内の堆積層は4層に大別できるが，多量の流水を示す砂の堆積はみられない。最下層からは第Ⅲ様式土器が出土するが，中・下層には第Ⅴ様式前半期の土器が，上層には第Ⅴ様式後半期の土器が多量に含まれていた。また，上層からは銅鏃2点が出土している。

〔木器番号〕中層出土；*00217, 02102*　　上層出土；*17208*

〔文　　献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

e　井戸ＳＥ760（６ＡＪＬ－Ｅ区）

南北3m，東西2.8m，深さ2.2mの円形の井戸。井戸内の堆積層は4層に区別され，中層からは完形品を含む多量の第Ⅴ様式土器が出土し，下層からは編物，木器，種子などの有機質遺物が出土した。なお井戸最下層には，約20余点の完形壷が累積した状況で埋まっていた。

〔木器番号〕*09009, 09410, 09515, 15602, 17207, 19703, 20010*

〔文　　献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

f　井戸ＳＥ1665（６ＡＪＬ－Ｅ区）

直径約４m，深さ２mで円形の平面を持つ大型の素掘り井戸。底部の径は約2.5m，内部には11の堆積層が認められた。このうち第Ⅴ様式土器は主として中間層から出土し，鍬・木錘などの木器は下層から出土した。

〔木器番号〕*09309*

〔文　　献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

g　井戸ＳＥ555（６ＡＪＬ－Ｅ区）

長辺1.6m，短辺1.2mの不整長円形の素掘り井戸。深さ1.4mの底面には拳大の石を密に敷いていた。井戸内の堆積土は４層に大別され，上層には土器片，下層には木製品や種子が含まれ，最下層からは須恵器片や完形に近い土師器甕が出土した。５世紀末に掘られた井戸であろう。

〔木器番号〕*17313*

〔文　　献〕木下正史・山中敏史・他「藤原宮西辺地区の調査」（前掲）

h　河ＳＤ1331（６ＡＪＧ－Ｑ区）

四分遺跡の北端付近を西流する幅約３m，深さ0.5m以上の自然河川。堆積土中からは多くの第Ⅴ様式土器が，少量の第Ⅳ様式土器とともに出土した。木器としては農具や工具などが出土している。

〔木器番号〕*03702, 05703*

〔文　　献〕宮沢智士・小笠原好彦・菅原正明・他『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』（前掲）

25　埴口丘陵古墳（fig. 319）　はにぐちきゅうりょうこふん

北葛城郡新庄町北花内に所在。前方部を南西に向けた全長約85mの前方後円墳で，現状では周囲に幅約10mの濠がめぐる。飯豊陵古墳とも言う。1979年２～３月の樋管改修工事に伴い，宮内庁書陵部が後円部周濠東外堤において発掘調査を実施。現在の東外堤が明治以後に造成されたもので，当初の周濠はさらに数m広いことが判明した。当初の周濠内堆積土（第Ⅵ層）から，円筒埴輪片などとともに笠形木器が出土した。

〔木器番号〕*16902*

〔文　　献〕土生田純之「埴口丘陵外堤の樋管改修箇所の調査」『書陵部紀要』第31号，宮内庁書陵部1980年

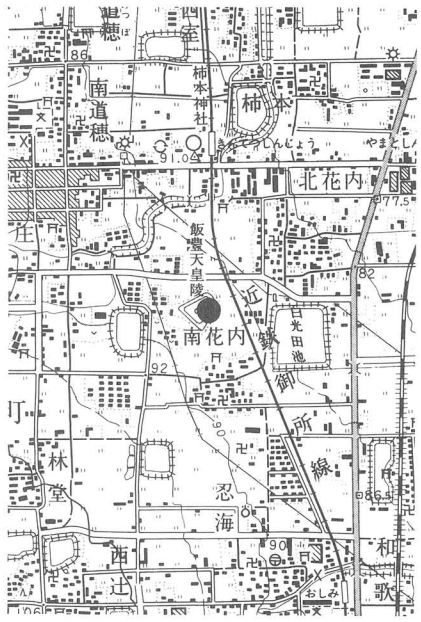


fig. 319　埴口丘陵古墳木器出土地点
（1:25,000　御所）

26　鴨都波遺跡（fig. 320）　かもつば

御所市掖上（わきがみ）に所在する弥生時代の集落遺跡。奈良盆地の西南隅，金剛山地の東麓にのびる一支丘の東端にあって，葛城山から東流する柳田川と金剛山地に沿って北流する葛城川との合流点近くに立地する。現在の鴨都波神社境内を中心とし，標高は100m内外をはかる。国道24号線改良工事を契機として，奈良県教育委員会や御所市が中心となって1960～61年に発掘調査を実施。高床建築と思われる柱根列や土坑・溝状遺構などを検出した。溝状遺構は幅2.3m，深さ0.5mで，畿内第Ⅲ様式～第Ⅴ様式の土器や石器・植物遺存体などとともに，各種木器が出土した。

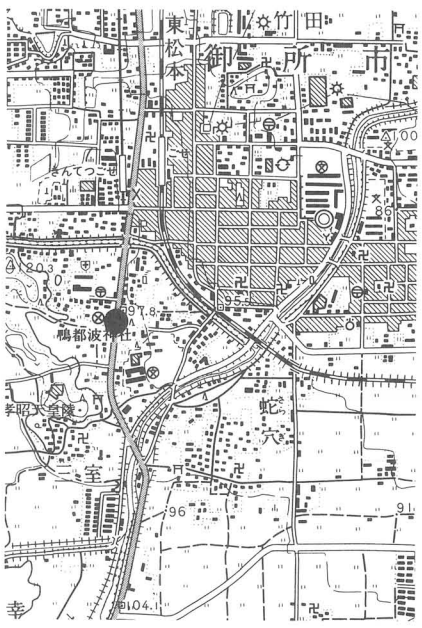


fig. 320　鴨都波遺跡木器出土地点
（1:25,000　御所）

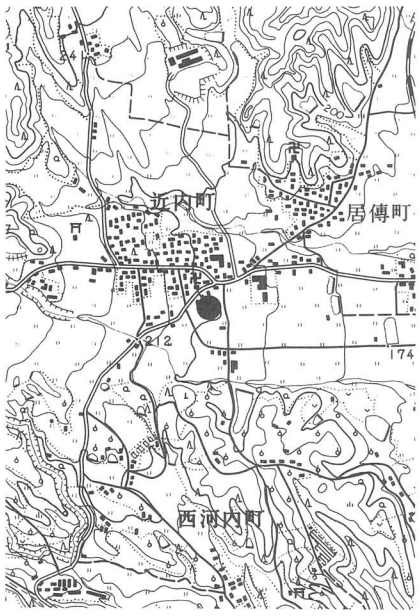


fig. 321　つじの山古墳木器出土地点
(1:25,000　五條)

〔木器番号〕*12107*

〔文　　献〕網干善教「鴨都波遺跡」『御所市史』御所市役所 1965 年

27　つじの山古墳 (fig. 321)

五條市近内町に所在する。鑵子塚古墳を中心とする近内古墳群に属し，標高約 200m の扇状地状の地形に立地する一辺約 52m の方墳である。四周には幅 10m をこえる周濠の痕跡を明瞭にとどめる。

墳丘南側の周濠痕跡において家屋建築計画がなされたため，1974 年に橿原考古学研究所が発掘調査を行なった。検出した周濠の規模は上部幅 9 m，底部幅 7 m，深さ 1 mをはかり，墳丘裾部と外堤斜面に葺石を施している。濠内からは円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形木器が出土した。埴輪は墳丘側と外堤側から出土しており，盾形木器は墳丘側にやや寄った濠内から出土している。他に加工木の類は伴出していない。6 世紀には濠が埋没していることから，古墳築造年代は 5 世紀代かと考えられる。

〔木器番号〕*17011*

〔文　　献〕久野邦雄・村井将幸・他「つじの古墳」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ』奈良県文化財調査報告書第28集，奈良県立橿原考古学研究所 1976 年

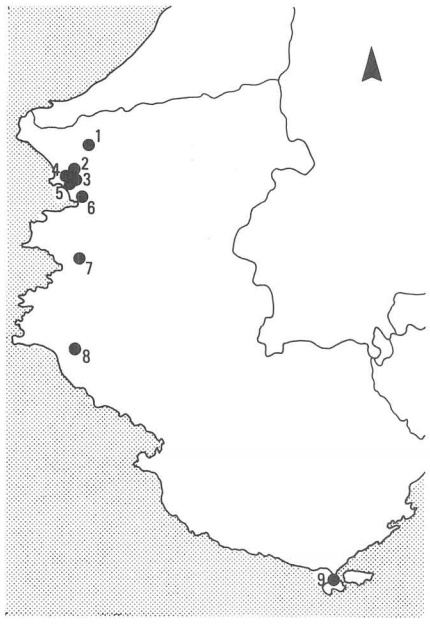


fig. 322　和歌山県の木器出土遺跡

G　和 歌 山 県

1　田屋遺跡 (fig. 323)　たや

和歌山市田屋に所在。和歌山県教育委員会が 1982 年 1 月から 1986 年 3 月まで 5 次にわたって発掘調査を実施した。紀ノ川下流右岸の沖積地に立地する。弥生時代後期と古墳時代中・後期の竪穴住居群や自然河道を検出している。

木器は竪穴住居群の傍の自然河道から出土。琴柱・矢・糸巻の支え木・木錘・穂摘具・又鍬身・鍬反柄などが 5 世紀中葉から 6 世紀の土器と共伴した。

〔木器番号〕*02410, 05205, 07814, 09425, 09604, 11509, 15613, 17108, 18621, 18713, 19912, 20119*

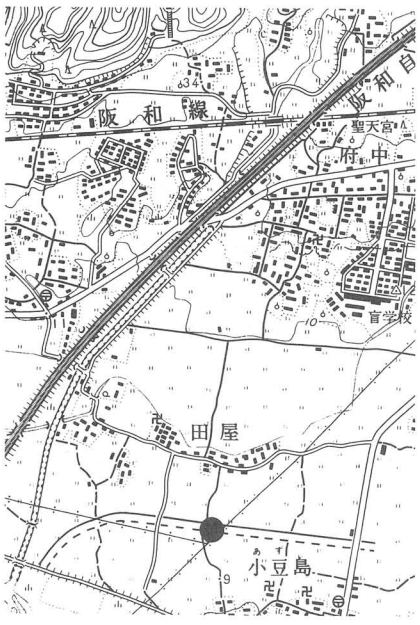


fig. 323　田屋遺跡木器出土地点
(1:25,000　淡輪)

2　音浦遺跡 (fig. 324)　おとうら

和歌山市鳴神に所在。1971 年と 1978 年との 2 回の調査を和歌山県教育委員会が行なった。5 世紀の古墳群がある花山北西麓の微高地に立地する。竪穴住居・掘立柱建物・溝など，古墳時代を中心とした遺構を検出。出土した土器の中に韓式系土器が多く見られる。1978 年の調査で検出した幅約 6 m，深さ 2 m内外の溝から曲柄又鍬身が出土した。弥生時代末から古墳時代初頭のものである。

〔木器番号〕*04414*

3　鳴神Ⅱ遺跡 (fig. 325)　なるかみ

和歌山市鳴神に所在。1969 年と 1970 年との 2 回の調査を和歌山県教育委員会が行なった。岩橋山塊西麓の沖積地に立地。検出したおもな遺構は井戸と溝である。井戸は奈良時代に属す。

溝は弥生時代末から古墳時代初頭にかけて開削されたもので，古墳時代中期に整備されて平安時代まで用水路としての機能を保っていた。幅７～８ｍ，深さ約３ｍあり，現在紀ノ川南岸の広大な水田を潅漑している「宮井用水」の前身と考えられる。この溝に３条の小溝が合流する地点は溝幅がかなり広くなっていて，堰と考えられる杭列が認められた。棟押・扉板・腰掛座板・竪杵などの木器はこの合流点から出土した。

〔木器番号〕*00405, 06601, 08905, 09110, 11210, 17701, 19008, 19201*

〔文　　献〕藤丸詔八郎「鳴神Ⅱ遺跡」『近畿自動車道和歌山線関係第１次発掘調査概報』和歌山県教育委員会 1970 年

吉本尭俊・北山惇「鳴神Ⅱ遺跡出土の木製品」『昭和 45 年度阪和高速道路（近畿自動車道和歌山線）遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会 1971 年

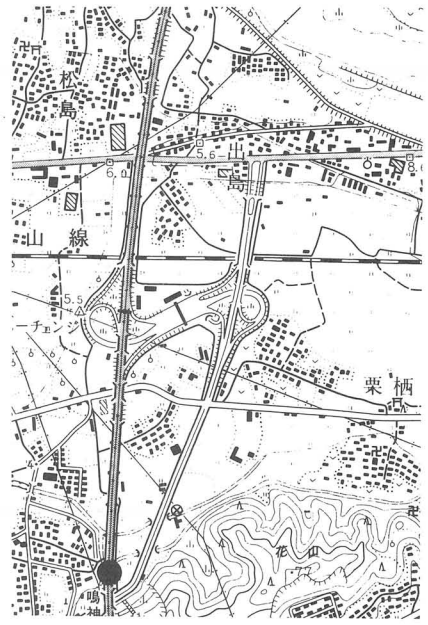


fig. 324　音浦遺跡木器出土地点
(1:25,000　和歌山)

4　鳴神Ⅴ遺跡（fig. 325）　なるかみ

和歌山市鳴神に所在。1977 年に和歌山県教育委員会が発掘調査を行なった。国造紀氏の本拠地と考えられている日前宮の東の微高地に立地する。弥生時代中期から近世にかけての遺構を検出。古墳時代後期の箱式石棺墓や土坑墓，中世の土坑墓などがおもな遺構である。遺物に緑釉陶器や円面硯などもある。収録した木器は４世紀の溝ＳＤ094とＳＤ097から出土。ＳＤ094からは曲柄鍬身や自然木・種子などが，ＳＤ097からは横槌形や容器が出土している。

〔木器番号〕溝ＳＤ094；*04711*　　溝ＳＤ097；*16413*

〔文　　献〕吉田宣夫・山本高照・他『鳴神地区遺跡発掘調査報告書－一般国道 24 号バイパス関連遺跡発掘調査－』和歌山県教育委員会 1984 年

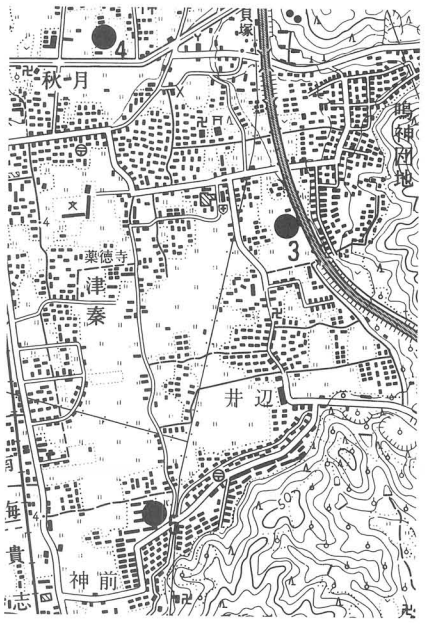


fig. 325　鳴神Ⅱ・鳴神Ⅴ・井辺遺跡
木器出土地点 (1:25,000　和歌山)

5　井辺遺跡（fig. 325）　いんべ

和歌山市井辺・神前に所在。和歌山市教育委員会と関西大学文学部考古学研究室が 1964 年５月から６月にかけて２回にわたって発掘調査を行なった。井辺前山古墳群がある福飯ケ峯北麓の標高約５ｍの沖積地に立地する。調査の結果，約４ｍの間隔を置いて並行する２条の土器列と井戸を検出した。土器列の土器は弥生時代後期後半に属す。井戸は，径２ｍの掘形内に刳抜き井筒を据えたもので，井筒には蔓３条をたがとして巻きつけていた。井戸内から古墳時代初頭の土器とともに釣瓶・竹製網代や桃核などが出土した。

〔木器番号〕*15202, 15305*

〔文　　献〕森浩一・久野邦雄・他『井辺弥生式遺跡発掘調査報告書』社会教育資料（24），和歌山市教育委員会 1965 年

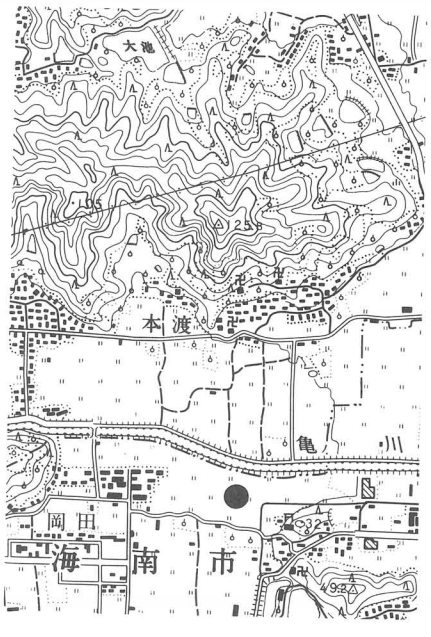


fig. 326　岡村遺跡木器出土地点
(1:25,000　和歌山)

6　岡村遺跡（fig. 326）　おかむら

海南市岡田に所在。海南市教育委員会が 1977 年から 1980 年まで４回にわたって確認調査を実施。また，1987 年７月から８月にかけて工事に伴う事前調査を行なった。亀の川ぞいの微高地に立地する縄文時代後期から中世にかけての集落遺跡。とくに弥生時代においては，亀の川流域における拠点的集落であった。

木器は 1979 年の調査で検出した溝ＳＤ１と 1987 年の調査で検出した溝から出土している。ＳＤ１は推定幅約５ｍ，深さ１ｍをはかり，弥生Ⅳ期の土器とともに自在鉤や一木鋤などが出土。1987 年調査の溝からは弥生Ⅰ期からⅡ期にかけての土器とともに高杯が出土している。

〔木器番号〕1979年調査　溝ＳＤ１；*06205, 06207, 06208, 07011, 17310*

1987年調査　溝；*13103*

〔文　　献〕萩本勝『岡村遺跡確認調査概報』海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会 1980年

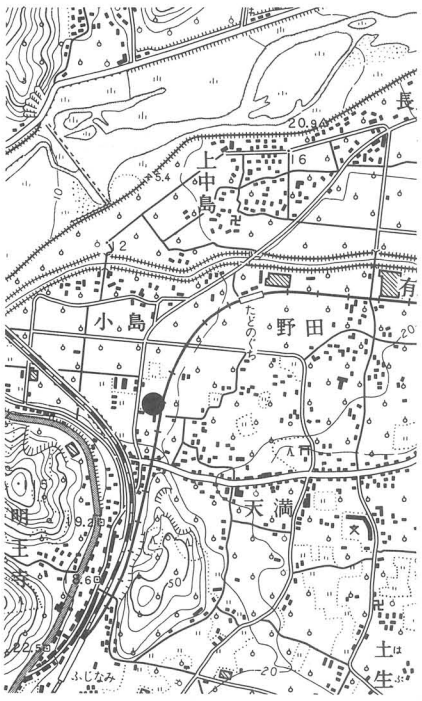


fig. 327　野田地区遺跡木器出土地点
(1:25,000　湯浅)

7　野田地区遺跡 (fig. 327)　のだちく

有田郡吉備町野田に所在。1980年5月から1981年3月まで和歌山県教育委員会が発掘調査を行なった。有田川下流左岸の沖積平野と河岸段丘上に立地する。段丘と沖積地との境目で，弥生時代末から室町時代にかけての10条の溝を検出。このうち9条の溝から木器が出土。ＳＤ10からは，弥生時代末から4世紀にかけての土器とともに横槌・木錘・梯子などが出土。4世紀の溝であるＳＤ09からは部材が，9世紀の溝ＳＤ07からは机天板が出土している。

〔木器番号〕溝ＳＤ10；*09212, 09320, 19003*

溝ＳＤ07；*17503*　　溝ＳＤ09；*18716*

〔文　　献〕藤井保夫・渋谷高秀・他『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書（海南湯浅道路建設に伴う関連遺跡発掘調査）』和歌山県教育委員会 1985年

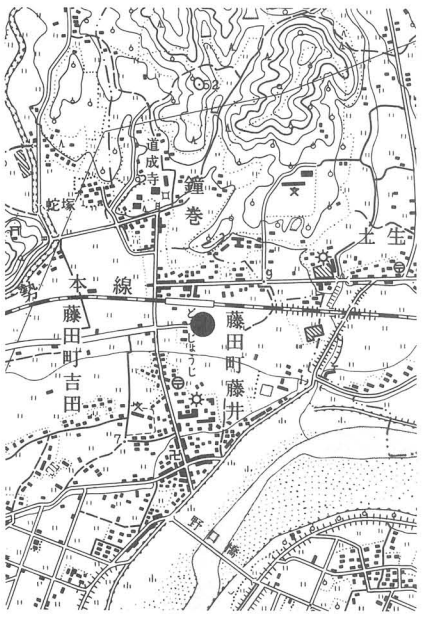


fig. 328　東郷遺跡木器出土地点
(1:25,000　御坊)

8　東郷遺跡 (fig. 328)　とうごう

御坊市藤田町藤井に所在。1986年9月から1987年3月まで御坊市遺跡調査会が発掘調査を行なった。日高川下流右岸の微高地上に立地する。弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居14棟や溝などを検出。

木器は溝ＳＤ４から出土した。この溝は幅6m，深さ1.8mあり，櫂・斧直柄・曲柄鍬身・曲柄又鍬身などが，弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器と共伴した。

〔木器番号〕*00706, 04704, 04714, 10101*

〔文　　献〕御坊市遺跡調査会『東郷遺跡発掘調査概報』1987年

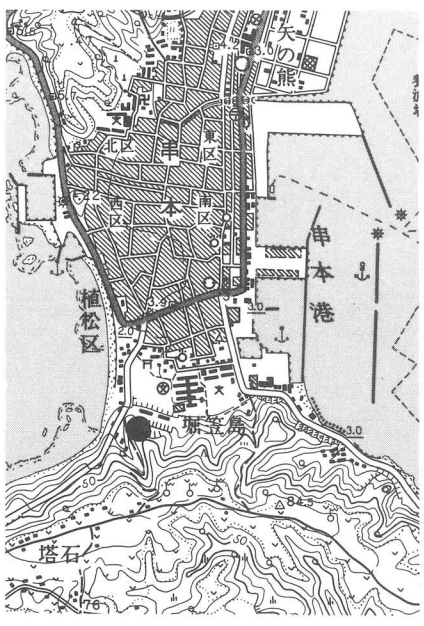


fig. 329　笠嶋遺跡木器出土地点
(1:25,000　串本)

9　笠嶋遺跡 (fig. 329)　かさじま

西牟婁郡串本町串本に所在。同志社大学文学部考古学研究室を中心とする笠嶋低湿地遺跡発掘調査会が，1960年2月から3月にかけて発掘調査を実施した。潮岬台地北麓の砂州上に立地。本州と潮岬台地を繋ぐこの砂州は遺跡周辺で幅が最も狭い。

遺構は検出されなかったが，表土層下の泥炭層中から弥生時代後期の土器とともに船材・舟形・浮子・四脚盤・剣形などの木器が出土した。

〔木器番号〕*05304, 09122, 09310, 09905, 10307, 10508, 10509, 10514, 10516, 10811, 13313, 13404, 13604, 14101, 16015, 16709, 19310*

〔文　　献〕安井良三・伊藤久嗣・他『南紀串本　笠嶋遺跡』笠嶋遺跡発掘調査報告書刊行会 1969年